流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10

－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・
市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・
西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－

平成29年3月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構
公益財団法人　千葉県教育振興財団

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10

－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・
市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・
西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第769集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市市野谷芋久保遺跡ほか７遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、旧石器時代の石器をはじめ、縄文時代や古墳時代の集落跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成29年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　平林秀介

凡　　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は下記の遺跡を収録したものである。

市野谷芋久保遺跡	千葉県流山市市野谷623-1ほか	（遺跡コード220－021）
市野谷中島遺跡	流山市市野谷603-1ほか	（遺跡コード220－055）
市野谷向山遺跡	流山市市野谷466-1ほか	（遺跡コード220－036）
市野谷立野遺跡	流山市市野谷777-1ほか	（遺跡コード220－022）
大久保遺跡	流山市西初石６丁目818-16ほか	（遺跡コード220－023）
西初石五丁目遺跡	流山市大畔521－２ほか	（遺跡コード220－045）
十太夫第Ⅲ遺跡	流山市十太夫2-17ほか	（遺跡コード220－062）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆は、第１章を文化財主事　平井真紀子、下層は上席文化財主事　橋本勝雄、それ以外を上席文化財主事　城田義友・岸本雅人が担当した。編集は城田が行った。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関から多くの御指導、御協力を得た。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、流山市教育委員会

7　本書で使用した地形図は、下記を合成・縮小したものである。

第1-2図　都市基盤整備公団　流山新市街地地区現況図　1/2,500（平成13年３月調整）

第1-3図　参謀本部陸軍測量局第１軍管地方迅速測図

「流山村」、「我孫子宿」（明治13年測量）

「野田町」、「守谷町」（明治14年測量）

8　本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。

図版1-1　在日極東アメリカ軍撮影（昭和22年８月）

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり、測地系は日本測地系による。

10　本書で報告する遺構の略号は、竪穴住居跡がSI、土坑がSK、溝状遺構がSD、その他の遺構がSXである。遺構番号は調査次ごとに新たに付されたため、同じ番号の遺構が複数存在するが、調査次数を示すかっこ付きの算用数字を遺構番号の前に加え、区別した。

11　縄文時代の繊維土器は、土器断面に「●」を付した。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　第２節　遺跡の位置と環境……2
第２章　市野谷芋久保遺跡……8
　第１節　遺跡の概要……8
　第２節　遺構と遺物……9
　第３節　まとめ……14
第３章　市野谷中島遺跡……15
　第１節　遺跡の概要……15
　第２節　遺構と遺物……16
　第３節　まとめ……16
第４章　市野谷向山遺跡……17
　第１節　遺跡の概要……17
　第２節　遺構と遺物……20
　第３節　まとめ……66
第５章　市野谷立野遺跡……68
　第１節　遺跡の概要……68
　第２節　遺構と遺物……69
　第３節　まとめ……79
第６章　大久保遺跡……81
　第１節　遺跡の概要……81
　第２節　遺構と遺物……81
　第３節　まとめ……95
第７章　西初石五丁目遺跡……96
　第１節　遺跡の概要……97
　第２節　遺構と遺物……97
　第３節　まとめ……101
第８章　十太夫第Ⅲ遺跡……102
　第１節　遺跡の概要……102
　第２節　遺構と遺物……102
　第３節　まとめ……103
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１章　はじめに
第1-1図　グリッドの呼称例 …… 2
第1-2図　流山新市街地地区遺跡位置図 …… 3
第1-3図　遺跡の位置と周辺の地形（旧況図）…… 4
第1-4図　流山新市街地地区　基本土層図 …… 7

第２章　市野谷芋久保遺跡
第2-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 8
第2-2図　遺構配置図 …… 9
第2-3図　(26)SI001① …… 10
第2-4図　(26)SI001② …… 11
第2-5図　(26)SI001③ …… 12
第2-6図　遺構外出土遺物 …… 13
第2-7図　(26)SD001 …… 14

第３章　市野谷中島遺跡
第3-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 15
第3-2図　遺構外出土遺物 …… 16

第４章　市野谷向山遺跡
第4-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 17
第4-2図　遺構配置図① …… 18
第4-3図　遺構配置図② …… 19
第4-4図　(16)SI001① …… 20
第4-5図　(16)SI001② …… 21
第4-6図　(16)SI001③ …… 22
第4-7図　(16)SI003 …… 23
第4-8図　(16)SI004 …… 24
第4-9図　(16)SI005・006 …… 25
第4-10図　(16)SI005 …… 26
第4-11図　(16)SI006 …… 27
第4-12図　(16)SI007① …… 29
第4-13図　(16)SI007② …… 30
第4-14図　(17)SI001・002 …… 31
第4-15図　(17)SI001① …… 32
第4-16図　(17)SI001② …… 33
第4-17図　(17)SI001③ …… 34
第4-18図　(17)SI002① …… 35
第4-19図　(17)SI002② …… 36
第4-20図　(17)SI002③ …… 37
第4-21図　(16)SX001① …… 38
第4-22図　(16)SX001② …… 39
第4-23図　(16)SX001③ …… 40
第4-24図　(16)SX001④ …… 41
第4-25図　縄文時代土坑① …… 43
第4-26図　縄文時代土坑② …… 44
第4-27図　縄文時代土坑③ …… 45
第4-28図　縄文時代土坑④ …… 47
第4-29図　縄文時代土坑⑤ …… 48
第4-30図　縄文時代土坑⑥ …… 49
第4-31図　縄文時代土坑⑦ …… 50
第4-32図　縄文時代土坑⑧ …… 51
第4-33図　遺構外出土遺物① …… 52
第4-34図　遺構外出土遺物② …… 53
第4-35図　遺構外出土遺物③ …… 54
第4-36図　遺構外出土遺物④ …… 55
第4-37図　遺構外出土遺物⑤ …… 56
第4-38図　遺構外出土遺物⑥ …… 57
第4-39図　遺構外出土遺物⑦ …… 58
第4-40図　遺構外出土遺物⑧ …… 59
第4-41図　遺構外出土遺物⑨ …… 60
第4-42図　(16)SI002 …… 61
第4-43図　古墳時代土坑① …… 62
第4-44図　古墳時代土坑② …… 64

第５章　市野谷立野遺跡
第5-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 68
第5-2図　第５ブロック器種別分布図 …… 70
第5-3図　第５ブロック石材別分布図 …… 71
第5-4図　第５ブロック出土石器① …… 72
第5-5図　第５ブロック出土石器② …… 73
第5-6図　第５ブロック出土石器③ …… 74
第5-7図　第５ブロック出土石器④ …… 75
第5-8図　第５ブロック出土石器⑤ …… 76
第5-9図　第５ブロック出土石器⑥ …… 77
第5-10図　遺構外出土遺物① …… 78
第5-11図　遺構外出土遺物② …… 79

第６章　大久保遺跡
第6-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 81
第6-2図　出土石器分布図 …… 82
第6-3図　第42ブロック器種別分布図 …… 84
第6-4図　第42ブロック石材別分布図 …… 85
第6-5図　第42ブロック出土石器① …… 86
第6-6図　第42ブロック出土石器② …… 87
第6-7図　第43ブロック器種・石材別分布図 …… 89
第6-8図　第43ブロック出土石器① …… 90
第6-9図　第43ブロック出土石器② …… 91
第6-10図　第44ブロック器種・石材別分布図 …… 92
第6-11図　第44ブロック出土石器 …… 93

第７章　西初石五丁目遺跡
第7-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 96
第7-2図　遺構配置図 …… 97
第7-3図　第７地点石材別分布図 …… 97
第7-4図　(21)SI001 …… 99
第7-5図　遺構外出土遺物① …… 100
第7-6図　遺構外出土遺物② …… 101

第８章　十太夫第Ⅲ遺跡
第8-1図　調査範囲と遺構の位置 …… 102
第8-2図　遺構外出土遺物 …… 103
第8-3図　(15)SD001・002 …… 103

表　目　次

第１章　はじめに
第1-1表　発掘調査一覧 …… 1

第４章　市野谷向山遺跡
第4-1表　出土貝類組成表（数）…… 67
第4-2表　縄文時代石器石材別石器組成表 …… 67

第５章　市野谷立野遺跡
第5-1表　第５ブロック石器組成表 …… 69

第６章　大久保遺跡
第6-1表　旧石器時代石器組成表（全体）…… 83
第6-2表　第42ブロック石器組成表 …… 94
第6-3表　第43ブロック石器組成表 …… 94
第6-4表　第44ブロック石器組成表 …… 94

第７章　西初石五丁目遺跡
第7-1表　下層第７地点出土遺物一覧 …… 98

図版目次

第１章　はじめに
図版1-1　遺跡周辺航空写真（昭和22年撮影）

第２章　市野谷芋久保遺跡
図版2-1　調査区全景、(26)SI001、遺構外出土遺物

第３章　市野谷中島遺跡
図版3-1　遺構外出土遺物

第４章　市野谷向山遺跡
図版4-1　(16)SI001、(16)SI001炉、(16)SI003、(16)SI004・SK015、(16)SI005・006、(16)SI005炉、(16)SI006炉、(16)SI007
図版4-2　(16)SI007炉、(17)SI001・002遺物出土状況、(17)ＳＩ001・002、(16)ＳＸ001、(16)ＳＸ001炉体土器出土状況、(16)ＳＸ001土層断面、(16)SK008、(16)SK010
図版4-3　(16)SK012・014、(16)SK012貝層、(16)SK012土層断面、(16)SK015、(16)SK011、(16)SK001、(16)SK013、(16)SI002
図版4-4　(16)SK002、(16)SK003、(16)SK004、(16)SK005、(16)SK005遺物出土状況、(16)SK007、(16)SK006、(16)SK009
図版4-5　(16)SI001、(16)SI003、(16)SI004、(16)SI005①
図版4-6　(16)SI005②、(16)SI006、(16)SI007
図版4-7　(17)SI001①
図版4-8　(17)SI001②、(17)SI002
図版4-9　(16)SX001、(16)SK008、(16)SK010
図版4-10　(16)SK012、(16)SK014、(16)SK015①
図版4-11　(16)SK015②、(16)SK003、(16)SK001、遺構外出土遺物①
図版4-12　遺構外出土遺物②
図版4-13　遺構外出土遺物③、(16)SI002、(16)SK007、(16)SK005、(16)SK002、(16)SK003
図版4-14　(17)SI002出土石器、(16)SX001出土石器、遺構外出土石器

第５章　市野谷立野遺跡
図版5-1　48CC-73・84石器出土状況、48CC-73石器出土状況、48CC-73・84土層断面、Ｇ１土層断面、遺構外出土遺物
図版5-2　第５ブロック出土石器①
図版5-3　第５ブロック出土石器②

第６章　大久保遺跡
図版6-1　38FF-57土層断面、38GG-50土層断面、38FF-57石器出土状況、38FF-68・69石器出土状況、38GG-51・60・61・70石器出土状況、38GG-51石器出土状況、38GG-71石器出土状況、38GG-80土層断面
図版6-2　第42ブロック出土石器、第43ブロック出土石器、第44ブロック出土石器

第７章　西初石五丁目遺跡
図版7-1　(21)SI001、(21)SI001炉、(21)SI001、遺構外出土遺物

第８章　十太夫第Ⅲ遺跡
図版8-1　発掘調査状況、出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１．調査に至る経緯

独立行政法人都市再生機構は、茨城県つくば市と都心を結ぶつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線整備計画に関連して、千葉県流山市市野谷から東初石、十太夫地区一帯の土地区画整理事業を計画した。この事業は流山市新拠点構想として位置づけられ、事業実施にあたり、独立行政法人都市再生機構から区域内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会宛に提出された。区域内には、包蔵地14か所、野馬土手３か所が所在しており（第1-2図）、その取り扱いについて千葉県教育委員会との間で度重なる協議が行われた。その結果、事業区域内には山林・雑木林・畑地のほか既存の住宅地が点在していることから、住宅地や緑地など現状保存する区域を策定し、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

２．調査の経緯と経過

（１）発掘作業

今回報告する７遺跡の発掘調査の内容は第1-1表のとおりである。

第1-1表　発掘調査一覧

遺跡名	年度	調査次	面積（㎡） 調査対象	確認調査 上層	確認調査 下層	本調査 上層	本調査 下層	調査期間	担当者	調査課長	調査研究部長 文化財センター長
市野谷芋久保	27	(26)	2,781	272	68	80	0	27. 4.13～27. 5. 7	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
市野谷中島	27	(17)	348	348	12	0	0	27. 5.18～27. 5.21	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
市野谷向山	26	(15)	522	54	16	0	0	27. 2.16～27. 2.24	及川　淳一	白井久美子	伊藤　智樹
	27	(16)	6,526	750	152	1,820	0	27. 5.25～27. 6. 9 27. 7.30～27. 8. 5 27.11. 2～28. 2.10	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(17)	471	84	17	64	32	27. 6.23～27. 7.14	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
市野谷立野	26	(24)	5,054	472	192	0	90	26. 8.25～26.10. 3 26.10.14～26.11.11	及川　淳一	白井久美子	伊藤　智樹
		(25)	1,394	134	48	0	0	27. 1.19～27. 2.13	及川　淳一	白井久美子	伊藤　智樹
		(26)	331	36	8	0	0	27. 2. 5～27. 2.27	及川　淳一	白井久美子	伊藤　智樹
	27	(27)	376	68	12	0	0	27. 6.15～27. 6.22	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(28)	4,449	408	96	0	0	27. 8. 6～27. 8.24 27. 9. 3～27.10. 1	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(29)	165	32	8	0	0	27. 8.25～27. 8.27	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(30)	271	48	8	0	0	27. 8.31～27. 9. 1	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(31)	496	64	12	0	0	27.10. 5～27.10. 7	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(32)	186	35	8	0	0	27.10. 8～27.10.14	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(33)	1,399	138	32	0	0	27.10.15～27.10.27	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(34)	218	32	4	0	0	27.10.28～27.10.29	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
		(35)	165	18	4	0	0	28. 2.15～28. 2.16	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
大久保	26	(12)	265	265	12	0	265	26.11.13～27. 1.16	及川　淳一	白井久美子	伊藤　智樹
西初石五丁目	27	(21)	620	86	24	42	0	28. 2.24～28. 3.10	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史
	28	(22)	1,511	－	96	－	0	28. 4.18～28. 5.18	岡田　誠造	蜂屋　孝之	上守　秀明
十太夫第Ⅲ	27	(15)	825	146	20	0	0	27. 7.16～27. 7.29	岡田　誠造	今泉　潔	小久貫隆史

（2）整理作業

平成28年度

文化財センター長　上守秀明

整理課長　　山口典子

担当職員　　上席文化財主事　城田義友、橋本勝雄、岸本雅人　　文化財主事　平井真紀子

内　容　市野谷芋久保遺跡　　記録整理～報告書刊行

市野谷中島遺跡　　記録整理～報告書刊行

市野谷向山遺跡　　記録整理～報告書刊行

市野谷立野遺跡　　記録整理～報告書刊行

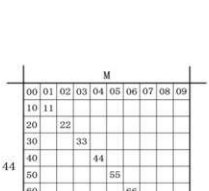
大久保遺跡　　記録整理～報告書刊行

西初石五丁目遺跡　　記録整理～報告書刊行

十太夫第Ⅲ遺跡　　記録整理～報告書刊行

3．調査の方法と概要

調査にあたり、国土方眼座標（第Ⅸ座標系）に基づいてグリッドの設定を行っている。新市街地地区内の調査対象範囲を覆うように、40m×40mの方眼網を設定し、南北方向を北から1、2、3・・・、東西方向は西からA、B、C・・・とし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とした。さらに大グリッドを4m×4mの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えば44M－00と呼称した（第1-1図）。



第1-1図　グリッドの呼称例

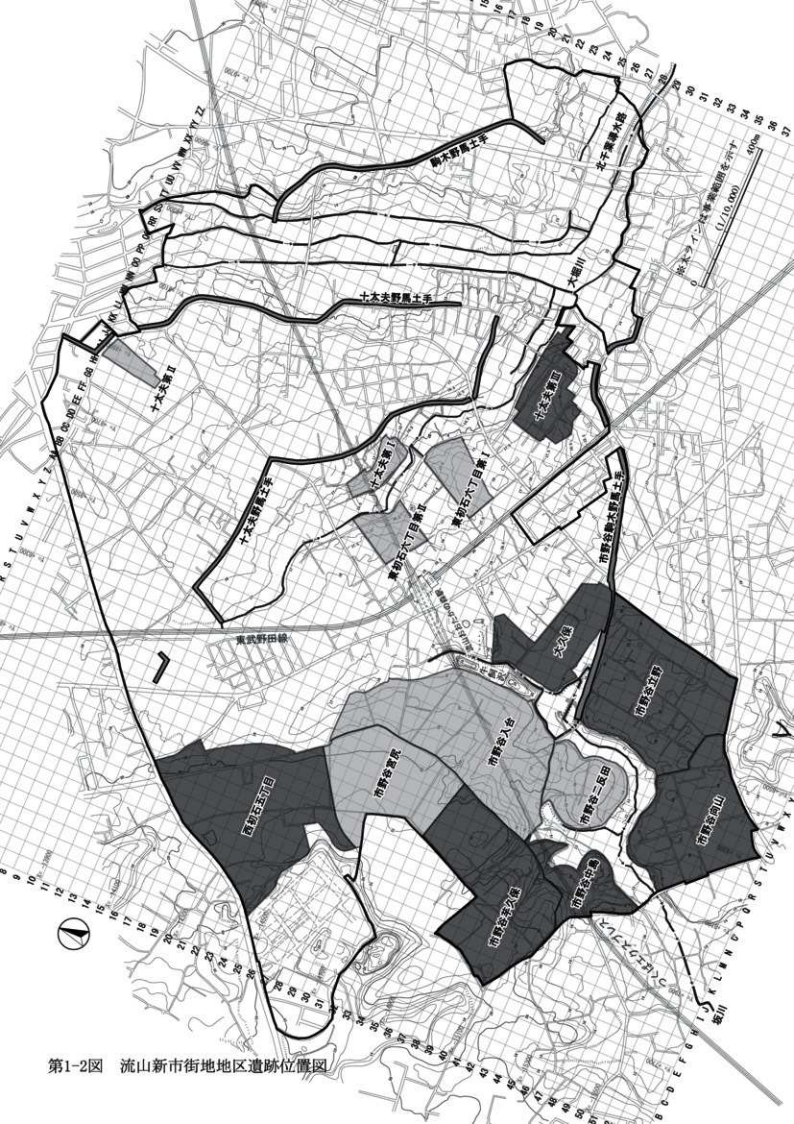
上層の調査では、調査対象面積の10％についてトレンチを設定し、遺構の有無や時期及びその分布を把握するため確認調査を実施した。トレンチの設定方向は各調査区の形状などに即しており、必ずしも方眼に沿っていない。確認調査で検出された遺構が希薄な場合は、トレンチを適宜拡張して精査し、遺構が広範囲に分布する場合は、本調査範囲を設定し引き続き調査を行った。

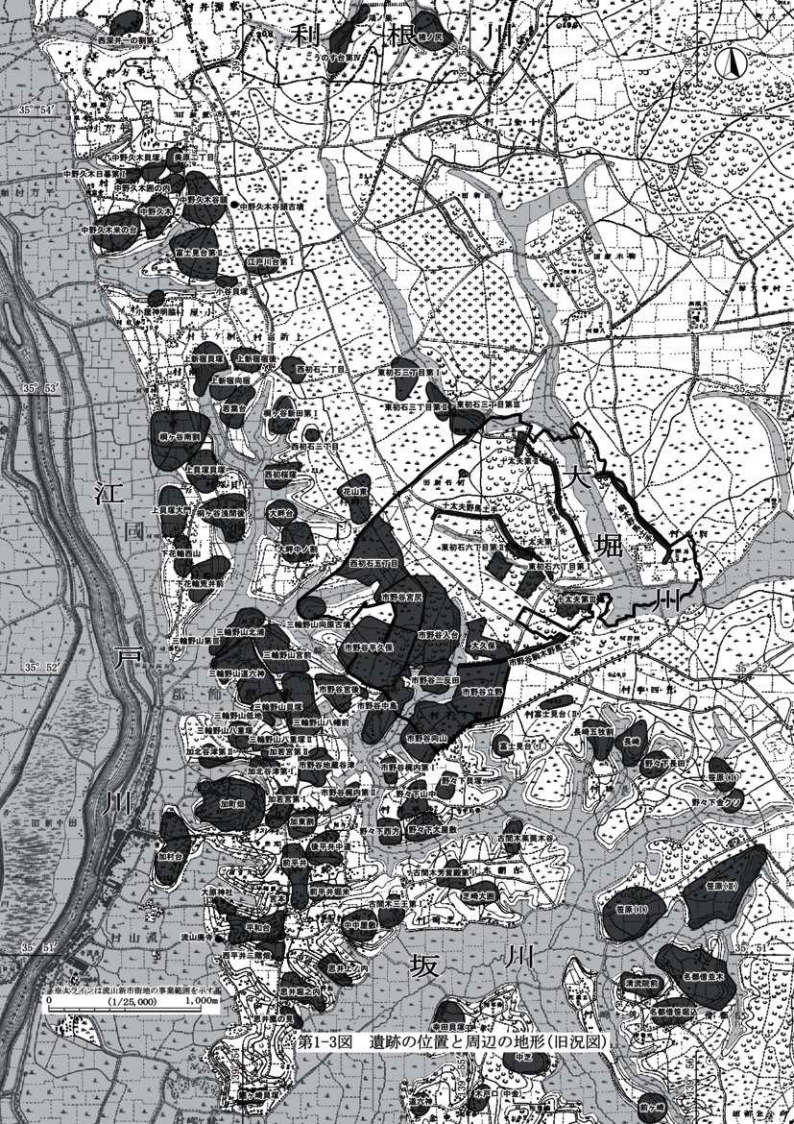
下層の調査は上層の調査が終了した後、調査対象面積の4％について2m×2mのグリッドを設定し確認調査を行った。石器などの遺物が集中的に出土した地点については拡張後、本調査に移行した。

第2節　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境（第1-2･3図、図版1-1･2）

今回報告する7か所の遺跡が所在する流山市は、千葉県の北西部に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿って南北に長い市域を形成している。江戸川に沿った市の西部は平坦な沖積低地であり、東部は高低差のある台地が広がっている。近年では、JR武蔵野線、東武アーバンパークライン（旧 東武野田線）などの在来線に加え、つくばエクスプレス線（TX）の開通など都心からの利便性が高まり、急激な住宅都市化が


十太夫野馬土手
十太夫野馬土手
十太夫野馬土手
十太夫野馬土手
十太夫新田
十太夫新田
十太夫新田
東柏台六丁目遺跡
東柏台六丁目遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷二反田遺跡
市野谷宮前遺跡
市野谷宮前遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
市野谷大台遺跡
東武野田線
東武野田線
東武野田線



第1-3図　遺跡の位置と周辺の地形(旧況図)

進んでいる。7か所の遺跡は、このつくばエクスプレス線流山おおたかの森駅の周辺に位置する。

第1-2図によると、流山おおたかの森駅の北西部29Xグリッド付近（標高15m～16m）に坂川の源流とされる湧水地が所在する。そこから「牛飼沢」を通り、38X・Y、39X・Yグリッド付近で蛇行して湿地帯を形成する。流路はさらに蛇行しながら大久保遺跡の北西から南西方向に続く。一方、市野谷二反田遺跡西側の41Rグリッド付近にも湧水地があり、湧き出た水は市野谷向山遺跡の北側の45Sグリッドあたりで北東からの流れと合流し、氾濫原のような湿地帯を形成している。台地縁辺部には坂川の源流域を囲むように遺跡が集中している。

第1-3図では周辺の旧地形と遺跡立地を把握するために、明治13・14年測量の迅速測図を用いて、低地（薄いスクリーントーン）と台地・微高地とを区分したうえで水系を示し、遺跡位置を示した。

2．周辺の遺跡（第1-2・3図、図版1-1・2）

流山市では、大規模開発に伴って、1980年代以降多くの遺跡が調査されている。今回報告する7遺跡の周辺に分布する遺跡については、これまで流山新市街地地区の報告書が8冊刊行され、詳しく報告されているので参照していただきたい。ここでは、これまで報告された区域内の遺跡を概観する。なお、遺跡の名称等については、『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）』に従っている。

まず、坂川の源流域の遺跡群をみてみると、西初石五丁目遺跡をはじめ、市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡、市野谷芋久保遺跡、市野谷中島遺跡、市野谷二反田遺跡、市野谷向山遺跡、市野谷立野遺跡、大久保遺跡の9遺跡が所在している。これらを時代順に追ってみよう。

旧石器時代は、遺物量の多寡はあるものの、9遺跡全てから石器が出土している。9遺跡全体では161か所の石器集中地点が検出され、湧水地に近い市野谷入台遺跡で26か所、大久保遺跡で41か所、市野谷芋久保遺跡で46か所、市野谷向山遺跡で25か所と特に多くなっている。もっとも古い時期はX層上部～Ⅸc層下部に生活面をもつ市野谷芋久保遺跡の第1文化層で、ナイフ形石器や台形様石器、局部磨製石斧などが出土している。次いで大久保遺跡の第1文化層（Ⅸ層下部）、市野谷向山遺跡の第1文化層（Ⅸ層上部）があり、Ⅴ層～Ⅳ層の時期にピークを迎え、多数の礫群と角錐状石器・ナイフ形石器を伴う石器群が出土している。この時期は最寒冷期で、海面が低下し、谷が最も深く刻まれた時期とされており、河川によって浸食され露出した遺跡近在の段丘礫層の礫を用いて礫群が形成されたことが推察される。

縄文時代になると、散漫ながら前期黒浜式期を主体とした集落跡が市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡などでみられる。以降、断続的に遺構・遺物が検出され、中期加曽利E式期の埋甕が市野谷宮尻遺跡と市野谷入台遺跡から、後期称名寺式期の埋甕が大久保遺跡から出土している。他地域との交流を窺わせる遺物として、大久保遺跡から出土した有撮石器（押出型ポイント）や市野谷向山遺跡から出土した三角壔（とう）形土製品が挙げられる。有撮石器は東北地方、三角壔形土製品は北陸・中部高地を中心に出土している。縄文時代晩期から弥生時代にかけて、流山市周辺では遺跡数が減少するが、坂川源流域においても同様の傾向がみられる。

古墳時代前期になると再び集落が営まれ始め、市野谷宮尻遺跡で90軒、西初石五丁目遺跡で22軒の竪穴住居跡が確認された。市野谷宮尻遺跡では東海・北陸との交流を示す土器が、西初石五丁目遺跡では小形仿製鏡が出土している。市野谷入台遺跡では前期～中期にかけての竪穴住居跡が35軒と、石製模造品の工房跡が存在し、集落が台地の西から東へと移っていった様子が窺える。市野谷向山遺跡で8軒の竪穴住居

跡が検出されたのを最後に、古墳時代の集落は姿を消す。

奈良時代の竪穴住居跡は、市野谷入台遺跡で４軒、市野谷中鳥遺跡で３軒、大久保遺跡で１軒確認された。出土した遺物から想起される年代は、いずれも８世紀中葉と思われる。平安時代は市野谷向山遺跡で１軒と非常に少ない。この時期、集落の主体は江戸川河岸の加遺跡群にあり、坂川源流域は単発的な竪穴住居跡がみられるのみとなる。

大堀川源流域の遺跡群としては、東初石六丁目第Ⅰ遺跡、東初石六丁目第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅰ遺跡、十太夫第Ⅲ遺跡の４遺跡が事業地内に所在する。旧石器時代の石器集中地点は９か所、縄文時代の遺構は十太夫第Ⅲ遺跡から加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡１軒、土坑や陥穴が数基と坂川の源流域に比べ、遺構数・遺物量は少ない。

近世、この一帯は江戸幕府直轄の上野牧が置かれた。日光東往還に隣接する大久保遺跡や市野谷立野遺跡、上野牧の南西境界に位置する市野谷芋久保遺跡から牧に関連する野馬土手や野馬堀、シシ穴状遺構などが検出されている。新市街地地区の北東には駒木野馬土手、北側には十太夫野馬土手、大久保遺跡と市野谷立野遺跡の境界から東へ延びる市野谷・駒木野馬土手が所在し、複数年度に渡って調査が行われている。これらの調査結果については、牧関連遺構としてまとめて刊行する。

参考文献

栗田則久　2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書１－流山市市野谷宮尻遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

栗田則久ほか　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市西初石五丁目遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

伊藤智樹ほか　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市市野谷入台遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

山岡磨由子ほか　2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書４－流山市市野谷二反田遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

新田浩三ほか　2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書５－流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

新田浩三　2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書６－流山市市野谷中鳥遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡－旧石器時代編』（公財）千葉県教育振興財団

森本和男ほか　2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書７－流山市市野谷芋久保遺跡･市野谷中鳥遺跡（上層）・市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

橋本勝雄ほか　2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中鳥遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

千葉県教育委員会　2006『県内遺跡詳細分布調査報告　房総の近世牧跡』

第３節　基本層序（第1-4図）

基本層序は、第1-4図のとおりである。今回報告する７遺跡のうち、市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡の３遺跡の層序を図示した。Ⅸ層とⅩ層については、細分できない遺跡も多くみられた。基本層序については、この地域で細分可能な標準土層の特徴を記載した。

Ⅰ　層　黒色の表土である。

Ⅱａ層　黒褐色土である。

Ⅱｂ層　明褐色土で、いわゆる「新期テフラ層」である。

Ⅱｃ層　暗褐色土である。

Ⅲ　層　明黄褐色ローム土で、立川ローム最上層に相当するいわゆる「ソフトローム層」である。下部に向かってソフト化が進行している。赤色スコリアを少量含む。

Ⅳ　層　明褐色ローム土である。硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。２㎜～３㎜大の赤色スコリアを多く含み、全体に赤みを帯びて明色である。

Ⅴ　層　黄褐色ローム土で、第１黒色帯に相当する。Ⅳ層に比べて赤色スコリアの量が少なく、全体に黒ずんでいる。Ⅳ層とⅤ層とを明確に区分できる遺跡は少なかった。

Ⅵ　層　明黄褐色ローム土である。ＡＴ（姶良丹沢火山灰）がブロック状に含まれる。

Ⅶ　層　褐色ローム土で、第２黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。１㎜～２㎜大の黄色スコリアと１㎜大の赤色スコリアが少量含まれる。

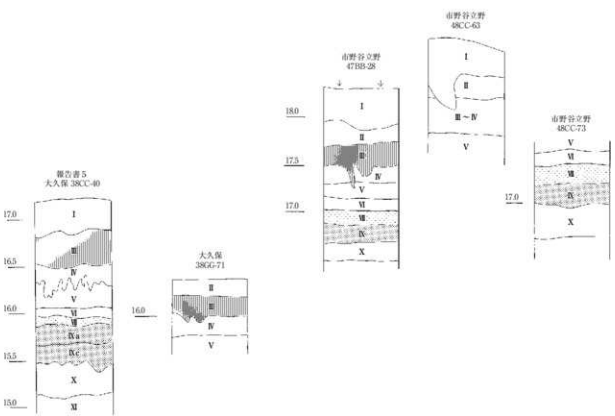
Ⅸａ層　暗褐色ローム土で、第２黒色帯下部の上半である。Ⅸ層を細分できた遺跡もあるが、細分できなかった遺跡も多い。Ⅶ層よりも黒ずんでいる。２㎜～３㎜大の赤色スコリアが多く含まれる。

Ⅸｂ層　暗褐色ローム土で、第２黒色帯下部の間層である。ほとんどの遺跡でこの層はみられなかった。

Ⅸｃ層　暗黄褐色ローム土で、第２黒色帯下部の下半である。２㎜大の赤色スコリアが微量含まれる。

Ⅹ　層　暗黄褐色ローム土である。スコリア粒がほとんど含まれない。

ⅩⅠ層　灰褐色ローム土で、武蔵野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。

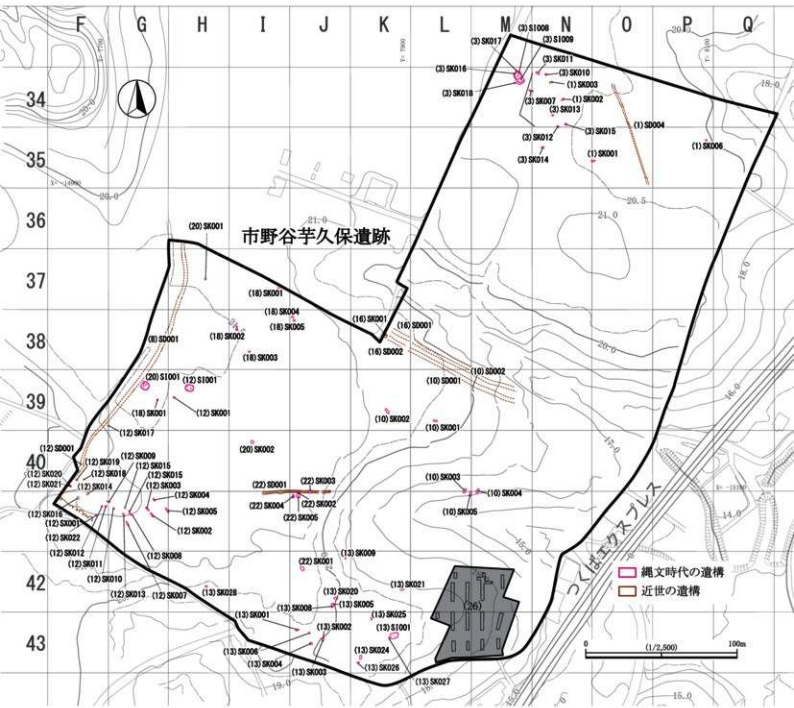


第1-4図　流山新市街地地区　基本土層図

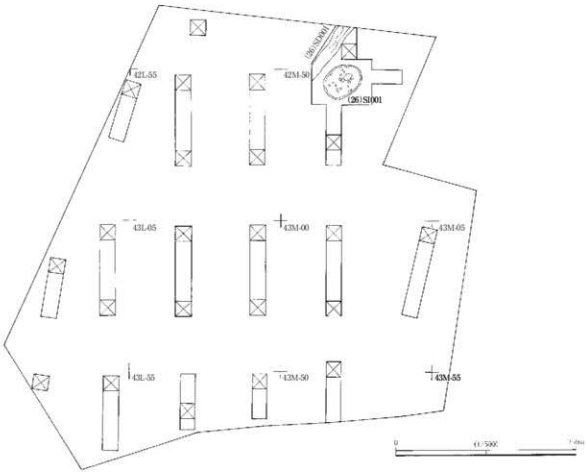
第２章　市野谷芋久保遺跡

第１節　遺跡の概要（第2-1図）

今回報告する第26次調査の調査状況は、第2-1図のとおりである。本遺跡では、これまでの調査で、旧石器時代・縄文時代の遺構と遺物が検出されている。旧石器時代については、事業範囲の中央付近でⅨ層下部からⅩ層上部に生活面を持つと考えられる環状ブロック群、南側を中心にⅣ層下部からⅤ層に生活面



第2-1図　調査範囲と遺構の位置



第2-2図　遺構配置図

を持つと考えられる石器群が検出されているが、今回の調査範囲からは遺構、遺物ともに検出されなかった。縄文時代以降については、事業範囲の北端・南端・西端に遺構が点在しており、今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡１軒のほか、近世の溝状遺構を検出した。

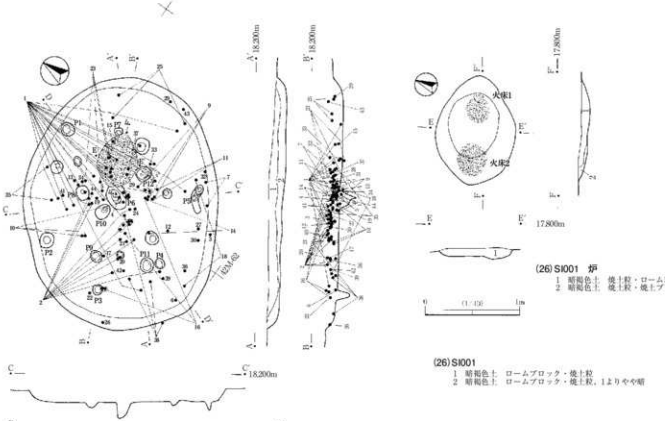
第２節　遺構と遺物

１．縄文時代

（１）竪穴住居跡

(26) SI001（第2-3～5図、図版2-1～3）

42M－41・42・51・52グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。平面プランは比較的整った小判形で、主軸方位はN－60.0°－E、規模は、検出面が5.33m×4.13m、床面が4.83m×3.75mである。検出



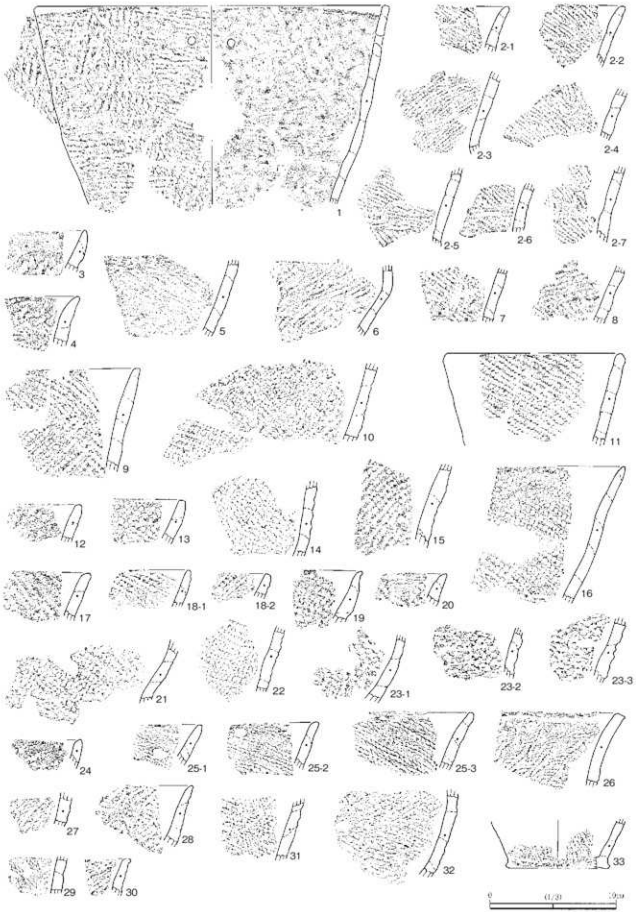
第2-3図 (26)SI001①

面からの深さは最大0.32mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面はほぼ平坦だが、硬化面は確認されなかった。

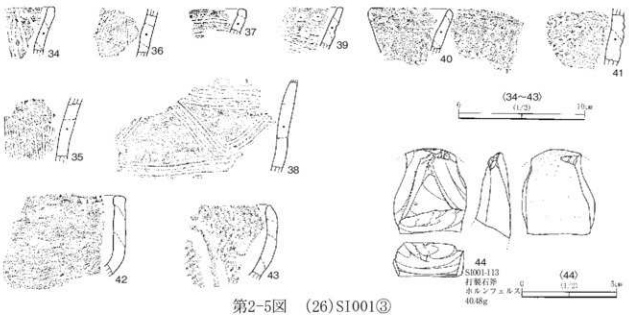
ピットは13基検出された。このうちP１～P５は深さにばらつきはあるが、比較的整った配置が認められることから本竪穴住居跡の柱穴となる可能性がある。

炉は、プランの中央北東寄りに１基検出された。ややいびつな楕円形で、主軸方位はN－70.0°－E、規模は1.16m×0.85mである。火床は前後２か所に認められた。火床１は0.32m×0.25mの楕円形、火床２は0.35m×0.33mの略円形で、いずれも覆土に焼土ブロックを多く含むが、底面の被熱は弱い。

出土遺物 出土状況からみて１は本竪穴住居跡に伴うものと考えられるが、全般に散漫な分布状況を示し、ほとんどが小破片である。１は前期黒浜式に併行する釈迦堂Ｚ３式の深鉢である。外面に単節RLを縦横に施し、裏面には明瞭な指頭圧痕を残す。薄手で胎土には雲母を多く含み、風化によりやや脆くなっているが、焼成は良好である。また、口縁下に焼成前に穿孔される。２～41は前期黒浜式の範疇で把握できるものである。２～33は縄文あるいは撚糸文のみを施すものである。２は結節を伴う無節Ｒ、３～５は無節Ｌ、６～８は無節ＲとＬを上下に羽状施文する。９は単節LRと単節RLを菱形施文、10は上下に羽状施文する。11～15は単節LR、16～23は単節RLを用いる。24～33は撚糸文で、24は単節LR×２、25～27・30は単節RL×２、28は無節Ｒである。29～32は異なる原体を羽状施文するもので、29は単節RL×２と単節LR×２（軸不明）を縦方向に、31は横方向に、32は無節Ｒ×２と無節Ｌ×２（軸不明）を横方向に羽状施文する。33は無節Ｌ×２を横施文した底部片である。34～38は半截竹管を用いたもので、34･35は縦方向に、



第2-4図　(26)SI001②



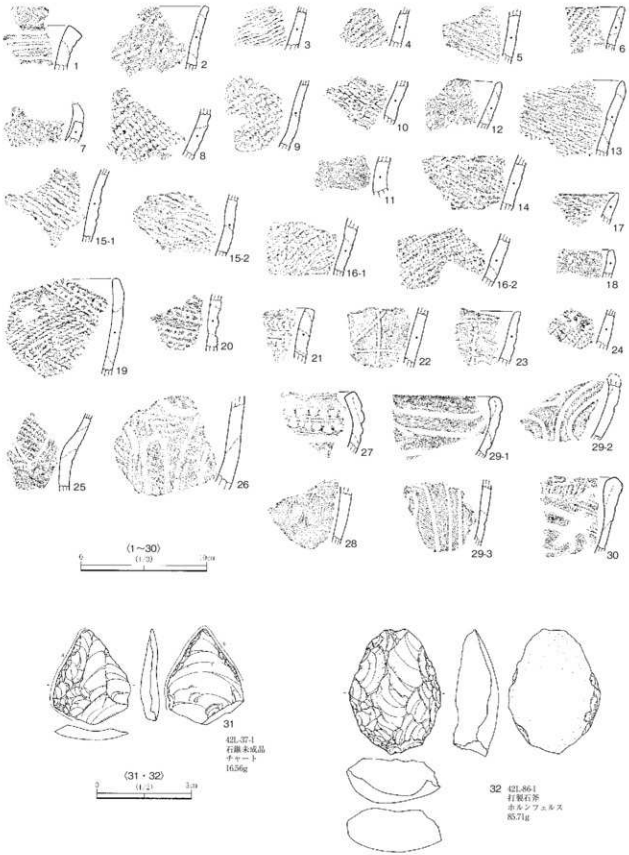
第2-5図　(26)SI001③

36は縦横に、37は口縁下に横方向の平行沈線をめぐらす。38は上下を横方向の平行沈線で区画し、内部に沈線による三角文を施す。39･40は口縁直下に刺突列を２列めぐらせ、39はその下に撚糸文（単節LR×２）を施し、40は浅沈線を地文としている。41は半截竹管によるキャタピラ文を三角形状に施すものと考えられる。42は無文の口縁で、口唇には明瞭な端面を形成する。43は加曽利Ｅ式で、単節LRを地文とし、指ナデによる幅広の浅い沈線を施す。44はホルンフェルス製の片刃の打製石斧である。小型で裏面に自然面を残しており、黒浜期特有の片刃石斧といえる。

（２）遺構外出土の遺物（第2-6･7図、図版2-4）

確認トレンチ出土遺物を報告する。時期は早期～晩期まで幅広く出土しているが、前期黒浜式が大部分を占め、中期加曽利Ｅ式がそれに次ぐ。１は早期田戸下層式である。口縁下に半截竹管による平行沈線文、口唇部に綾杉文が施される。２～24は前期黒浜式である。２～17は縄文あるいは撚糸文を施すもので、２～４は無節Ｌ、５は無節Ｒ、６～９は単節LR、10は単節LRと単節RLを羽状施文する。11～16は撚糸文で、11はＲ、12・13がRL２本、14はRL２本を縦横に用いて羽状施文、15がRR２本であろうか。16は附加条１種、17は反の縄RR、18はＳ字結節文を２段用いる。19～21は半截竹管を使用するものである。19は羽状撚糸文を地文とし、波状縁の直下にキャタピラ文を２段施す。20・21はキャタピラ文が横方向に施文される。22・23は沈線文を用いるもので、いずれも縦横斜めに施し、23は縦方向の沈線内に刺突を伴う。24は単節LRを地文とし、その上部に細い竹管で刺突する。

25～28は中期加曽利Ｅ式である。25は細沈線による区画、26は浅い沈線で意匠を描くものである。27・28は櫛描文をもつもので、27は口縁直下の竹管による沈線内に連続刺突するもの、28は縦方向にコンパス文を施すものである。29は沈線による意匠内に単節LRを充填するもので、後期称名寺式である。30は櫛描文を地文とし、浅い沈線で意匠を描くもので、肥厚した口唇直下に刻みを施す。晩期安行式であろう。31はチャート製の石鏃未成品である。幅広な剥片を素材として、表面の左側縁、裏面上部の両側縁に細かな加工が施されている。32はホルンフェルス製の片刃の打製石斧で、(26)SI001から出土したものと同様である。このほか、利器としては安山岩製の石皿もあるが断片的なため図化しなかった。

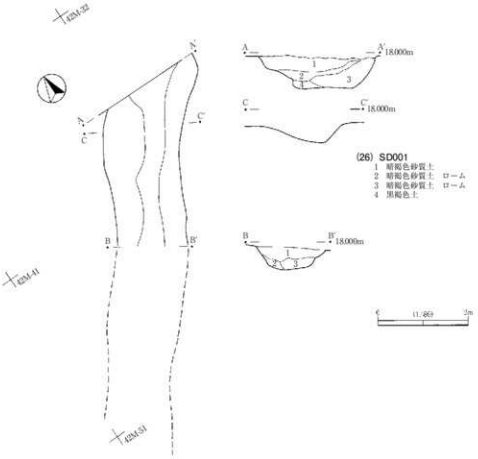


第2-6図　遺構外出土遺物

2．中世～近世

(26) SD001（第2-7図）

調査区の中央北寄りを、南西－北東方向に走る溝状遺構である。(26)SI001の精査のための拡張により検出された。方位はN－34.5°－E、上端幅1.6m～1.5m程度、底幅0.6m～0.4mで平坦面をもつが、硬化していない。断面形状は概ね逆台形だが整っていない。覆土は砂質が主体で、遺物は出土しなかった。



第2-7図　(26)SD001

第３節　まとめ

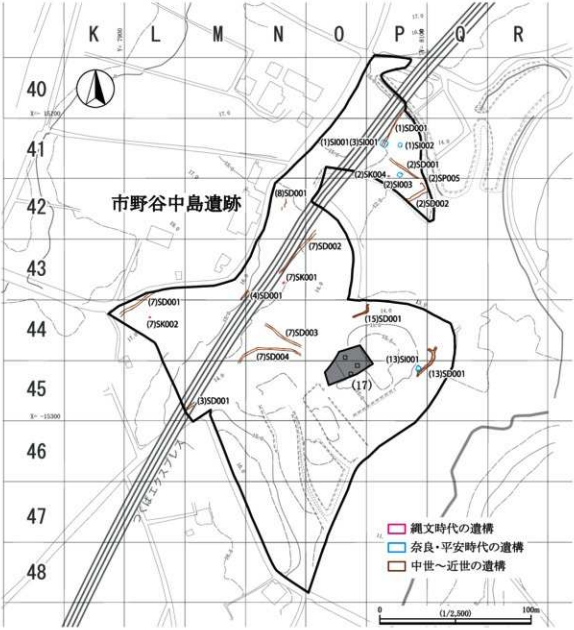
今回の調査範囲からは、前期黒浜式期の竪穴住居跡が１軒確認された。竪穴住居内から出土した前期黒浜式に併行する釈迦堂Ｚ３式の深鉢が特筆される。この土器は胎土に金雲母を多量に含み、内面に顕著な指頭痕跡を残すなど、他の土器類とは明らかに胎土や技法が異なっていることから、搬入品と考えられる。

釈迦堂Ｚ３式は山梨県域を中心とし、東京都内や埼玉県内などでは前期黒浜式などに少量伴出することが知られており、いずれも本遺跡の事例と同様、前期黒浜式期の遺構から確認されている。その他、縄文時代では早期～晩期の遺物が出土しているが、前期黒浜式期が多く、中期加曽利Ｅ式、後期称名寺式、堀之内式、晩期安行式などが混在する状況はこれまでの調査と同様である。

第３章　市野谷中島遺跡

第１節　遺跡の概要（第3-1図）

今回報告する第17次調査の調査状況は、第3-1図のとおりである。隣接する第13次調査区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡と中近世の溝状遺構を検出したが、今回の第17次調査の範囲では遺構が確認されなかったため、上層、下層ともに確認調査で終了した。



第3-1図　調査範囲と遺構の位置

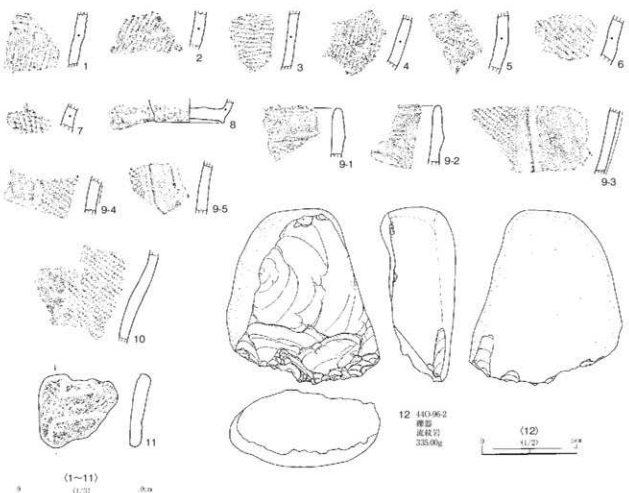
第２節　遺構と遺物

１．縄文時代（第3-2図、図版3-1）

遺構は確認されなかったが、確認トレンチより縄文時代の遺物が出土した。縄文土器はいずれも小破片であり、図示できるものは僅少である。１～８は前期黒浜式である。１は半截竹管による沈線文を縦横に配する。２～７は縄文が施された胴部片である。８は上げ底状の底部片で、底径5.6cmである。外面には半截竹管による平行沈線文がみられる。９・10は中期加曽利Ｅ３式ないしＥ４式である。微隆起線によって文様が描出される。11は土器片円板である。平面形は不整形ながら、周縁部を研磨している。12は楕円形の礫を素材とした片刃の礫器である。大きさは、長さ9.3cm、幅8.0cm、厚さ3.9cm、重さ335.0gである。石材は流紋岩で、被熱により表面が赤く変色している。

第３節　まとめ

これまでの調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されているが、今回の調査範囲では遺構は確認されず、遺物もわずかな量の前期黒浜式及び加曽利Ｅ式のほかは若干量の土師器のみであった。遺跡全体をみても遺構・遺物ともに希薄と言わざるを得ない。

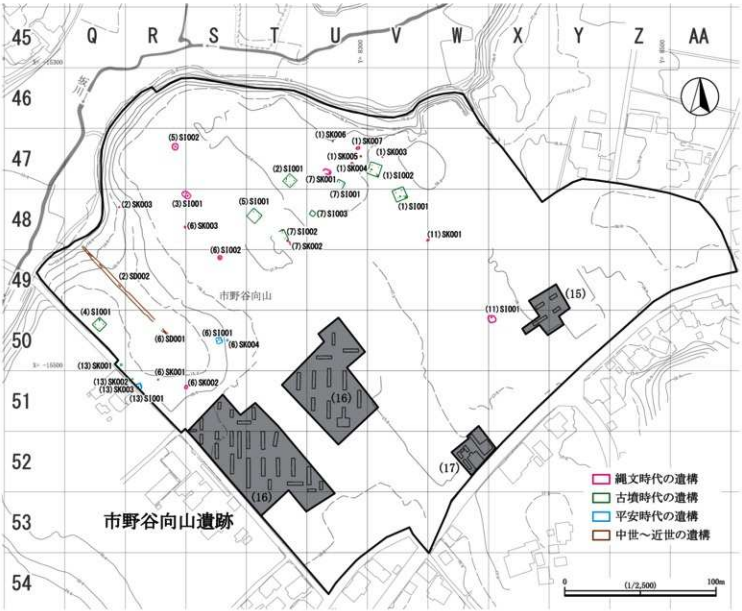


第3-2図　遺構外出土遺物

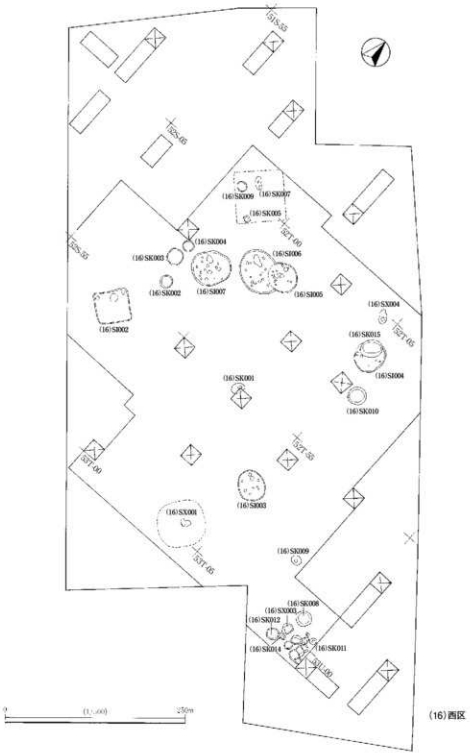
第４章　市野谷向山遺跡

第１節　遺跡の概要（第4-1図）

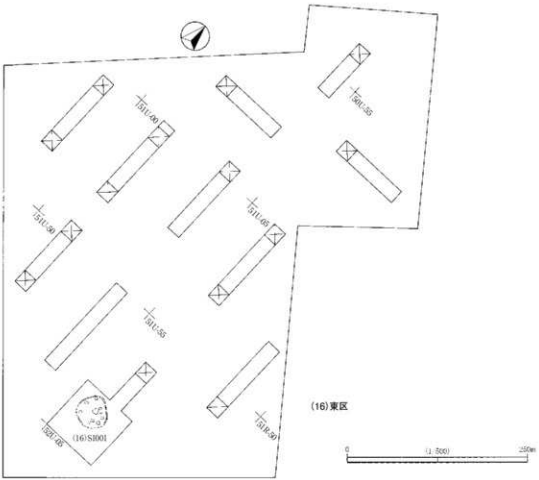
今回報告する第15次～第17次調査の調査範囲は、第4-1図のとおりである。過去の調査では、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構と遺物が確認されているが（第4-1図）、第15次調査では遺構は検出されなかったため、確認調査で終了した。第16次調査では、縄文時代の竪穴住居跡６軒、袋状土坑３基、土坑16基、土器埋設炉１基、炉跡２基、古墳時代の竪穴住居跡１軒、土坑７基が検出され、第17次調査では、縄文時代の竪穴住居跡が２軒検出された。



第4-1図　調査範囲と遺構の位置


(16)SK009
(16)SK007
(16)SK005
(16)SK004
(16)SK003
(16)SK006
(16)SK002
(16)SI007
(16)SI005
(16)SX004
(16)SI002
(16)SK015
(16)SI004
(16)SK001
(16)SK010
(16)SI003
(16)SX001
(16)SK009
(16)SK008
(16)SX003
(16)SK012
(16)SK014
(16)SK011
(16)西区

第4-2図　遺構配置図①



第4-3図　遺構配置図②

第２節　遺構と遺物

１．縄文時代

（１）竪穴住居跡

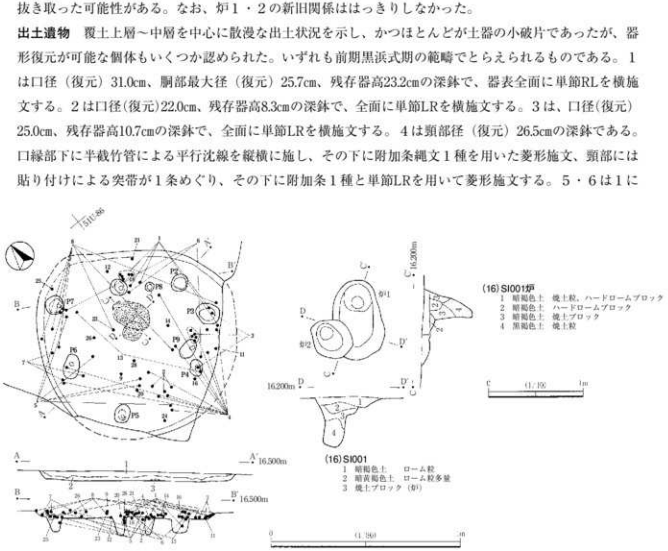
(16) SI001（第4-4～6図、図版4-1･6）

51Ｕ－85・86グリッドに位置する。縄文時代の他の遺構との重複関係はないが、近世以降の溝により東辺と南辺の大部分を破壊されている。平面プランは略楕円形、主軸方位はＮ－39.8°－Ｅである。規模は、検出面が概ね4.0m×4.2m、床面が概ね3.7m×3.7mである。検出面からの深さは最大0.2mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面は外周がやや下がっており、硬化面は認められない。

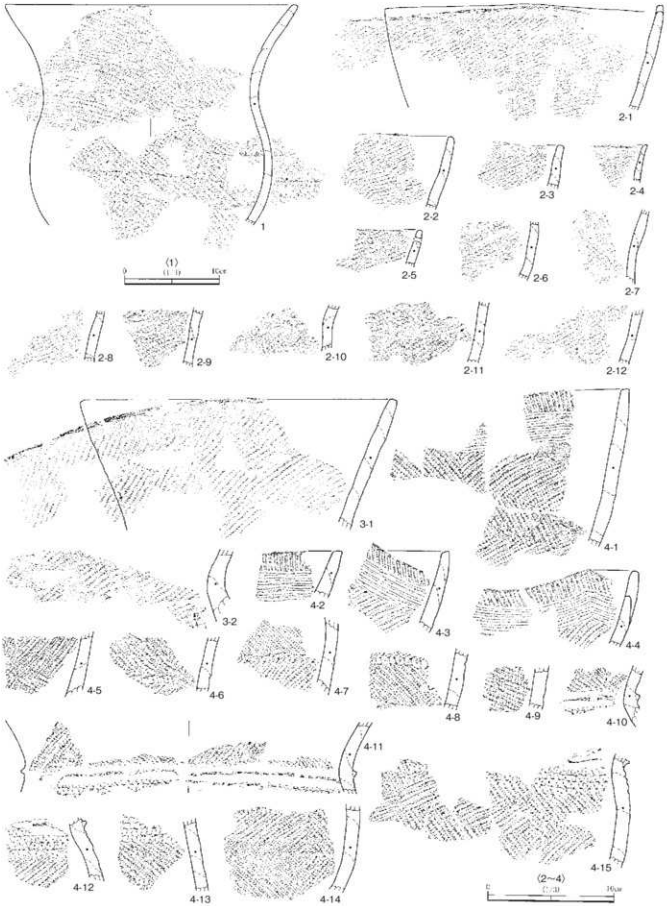
ピットは９基検出されたが、規則的な配置は認められず、規模と深さにばらつきが大きいことから、すべてが本竪穴住居跡に伴うかは判然としない。

炉は、遺構の中央やや北寄りに大小２基検出された。炉１は0.85m×0.55mの長円形、炉２は0.44m×0.42mの円形で、いずれも明瞭な火床部は認められなかった。ただ、底面からそれぞれ直径0.2m、深さ0.5m程度の円形の掘込みがあり、覆土に多くの焼土が認められることから、炉体として埋設していた土器を抜き取った可能性がある。なお、炉１・２の新旧関係ははっきりしなかった。

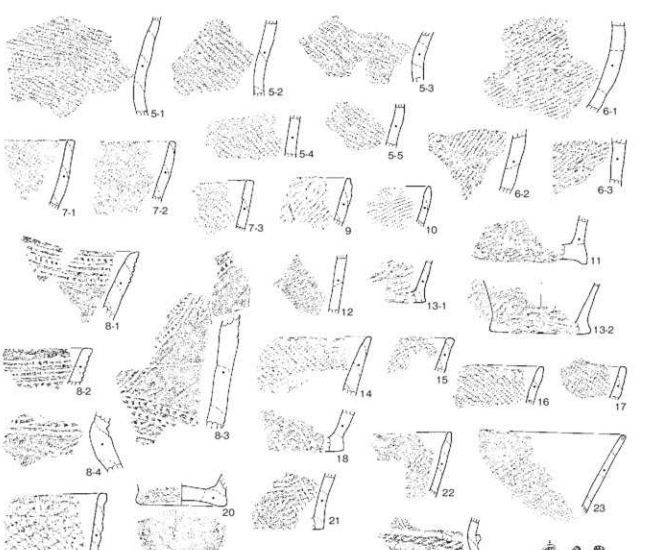
出土遺物　覆土上層～中層を中心に散漫な出土状況を示し、かつほとんどが土器の小破片であったが、器形復元が可能な個体もいくつか認められた。いずれも前期黒浜式期の範疇でとらえられるものである。１は口径（復元）31.0cm、胴部最大径（復元）25.7cm、残存器高23.2cmの深鉢で、器表全面に単節RLを横施文する。２は口径(復元)22.0cm、残存器高8.3cmの深鉢で、全面に単節LRを横施文する。３は、口径(復元)25.0cm、残存器高10.7cmの深鉢で、全面に単節LRを横施文する。４は頸部径（復元）26.5cmの深鉢である。口縁部下に半截竹管による平行沈線を縦横に施し、その下に附加条縄文１種を用いた菱形施文、頸部には貼り付けによる突帯が１条めぐり、その下に附加条１種と単節LRを用いて菱形施文する。５・６は１に



第4-4図　(16) SI001①



第4-5図　(16)SI-001②



第4-6図　(16)SI-001③

類似する別個体破片で、5は単節RL、6は単節LRを施す。7は単節RLを横方向に施文する。8は、口縁に半截竹管によるキャタピラ文が3条、器表には3～4条のキャタピラ文が三角形状に施文される。9～28は破片資料である。9～24は器表全面に縄文が施されるものと考えられ、9～14・23は無節L、15～19は単節RL、20～22・24は単節LRで、20は口縁部直下に単節LRの端部を2段施文する。25～27は半截竹管を用いたものである。25は単節RLを地文とし、キャタピラ文が3段めぐる口縁部、26は平行沈線区画の内部に単節LRの端部を5段施文する胴部片、27はキャタピラ文を頸部に施して区画し、胴部に単節RLとLRを羽状に施文した胴部片である。28は4に類似する別個体で、胴部に附加条1種を用いている。29は石鏃又は石錐の未成品である。横長剥片の先端部に部分加工が施され、尖頭部を形作っている。石材は白色細粒の斑晶を含む漆黒色の黒曜石であり、神津島産と推定される。

(16) SI003（第4-7図、図版4-1・6）

52T－04・05・14・15グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。平面プランは楕円形で、主軸方位はN－55.0°－Wである。規模は、検出面が4.10m×3.50m、床面が3.95m×3.30mである。検出面からの深さは最大0.1mと非常に浅く、覆土の堆積状況ははっきりしなかった。床面はおおむね平坦だが、東方向に若干傾斜している。硬化面は認められない。

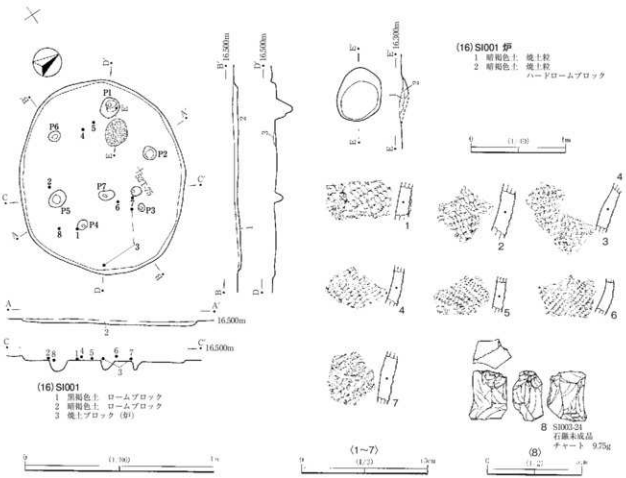
ピットは8基検出された。規模と深さにばらつきはあるが、比較的整った配置が認められるP1～P6については、本竪穴住居跡の柱穴の可能性がある。

炉は、遺構のほぼ中央奥側に1基検出された。0.56m×0.46mの楕円形で、主軸方位はN－52.5°－Wである。火床部は0.44m×0.35mの楕円形で、底面は強く被熱していた。

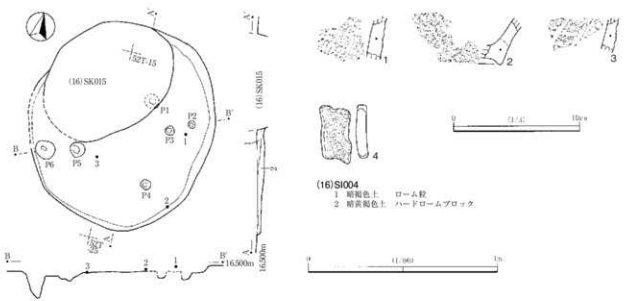
出土遺物　出土量は少なく、土器はすべて覆土中から出土した破片資料である。いずれも器表に縄文を施すもので、前期黒浜式期の範疇でとらえられる。1～3は単節LR、4～6は単節RL、7は無節Lである。8は角柱状の剥片を素材として上端に連続剥離が施されている。形態的には楔形石器の可能性もあるが、局所的な加工を重視してここでは石鏃未成品とした。チャート製である。

(16) SI004（第4-8図、図版4-1・6）

52T－04・05・14・15グリッドに位置する。縄文時代中期の土坑である(16)SK015と重複しており、本竪穴住居跡のほうが古い。また、西辺の一部がタケ類の根茎により破壊されている。平面プランは比較的整った小判型で、主軸方位はN－13.0°－Wである。規模は、検出面が4.23m×3.90m程度、床面が4.12m



第4-7図　(16) SI003



第4-8図　(16)SI004

×3.75m程度である。検出面からの深さは最大0.19mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面は中央がややくぼんでおり、硬化面は認められない。

ピットは6基検出されたが、規則的な配置は認められなかった。床面からの深さは比較的浅いものが多い。

炉は、(16)SK015により破壊されたと考えられ、検出できなかった。

出土遺物　僅少で、土器はいずれも覆土中から出土した破片資料である。前期黒浜式の範疇でとらえられる。1・2は単節RLを用いた縄文、3は無節Rを2本使用した網目状撚糸文を施す。4は土器片錘で、覆土中から出土したものである。詳細な出土位置が不明であるため便宜上ここに掲載したが、遺物の時期からみて、本遺構と重複する(16)SK015に帰属する遺物である可能性が高い。

(16)SI005（第4-9・10図、図版4-1・2・6・7）

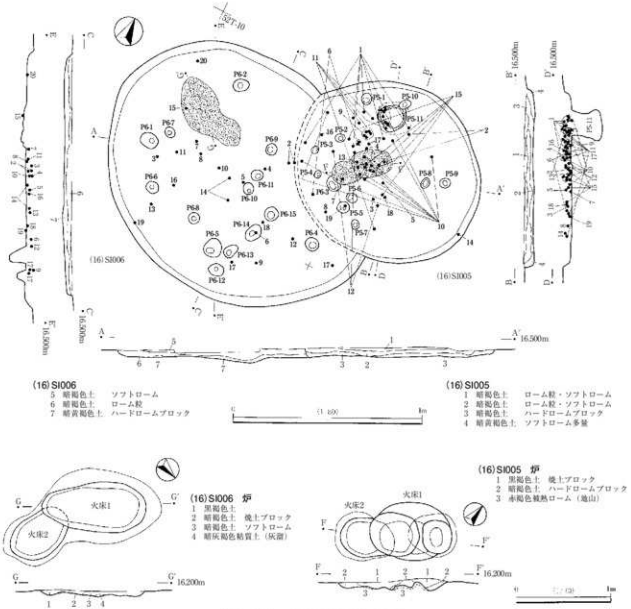
52T－00・01・10・11グリッドに位置する。(16)SI006と重複しており、土層断面の観察から本住居跡のほうが新しい。平面プランは略円形で、主軸方位はN－48.0°－Eである。規模は、検出面が3.80m程度×3.95m、床面が3.60m程度×3.68mである。検出面からの深さは最大0.2mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面はおおむね平坦であるが、硬化面は認められない。

ピットは9基検出されたが、位置と深さにばらつきがあるうえ、規則的な配置は認められなかった。

炉は、遺構の中央からやや西寄りに検出された。主軸方位はN－49.5°－Eで、1.22m×0.47mの楕円形状であるが、火床部が南北に2か所認められた。火床1は0.31m×0.35mの横楕円形、火床2は0.58m程度×0.43mの楕円形で、いずれも底面は強く被熱していた。

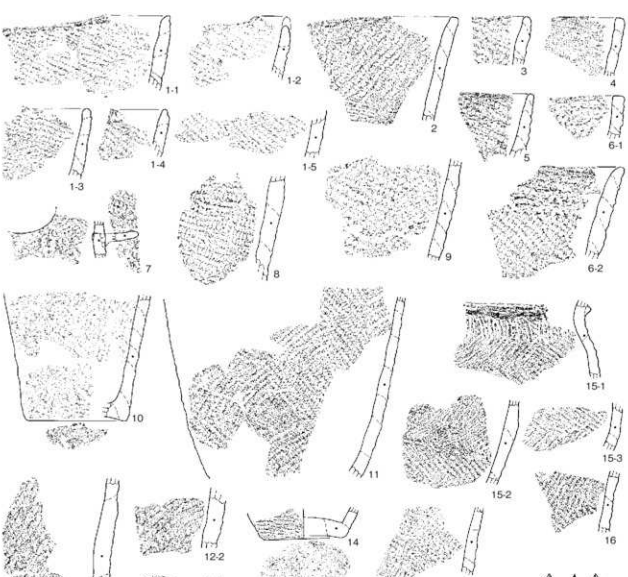
このほか、遺構西寄りに袋状を呈するピットが検出された。規模は上端が0.60m×0.58m、下端が0.46m×0.46mで、底面から0.1m程度高い部分が0.70m×0.80mと最も広い。

出土遺物　遺構中央やや西寄りに集中する傾向がみられたが、覆土上層が中心である。ほとんどが土器の小破片で、前期黒浜式期の範疇でとらえられるものである。1は器表に単節LRを縦施文し、口縁直下に半截竹管による刺突が1列めぐる。2～14は器表に縄文ないし撚糸文のみを施すものである。2～6は平縁で、4・6は口唇に平端面を形成する。2は単節LR、3～6は単節RLを施す。7は片口で、全面に単



第4-9図　(16)SI005・006

節RLを横施文する。8・9は単節RLを施す胴部片である。10・11は胴部下半～底部で、いずれも胴部が急角度で立ち上がる筒状の器形である。10は底径（復元）7.8cm、残存器高10.0cmで単節RLを施す。11は残存器高14.3cmで、単節LRとRLを用いた菱形モチーフを施す。12・13は無節Lを施す胴部片、14は底部片で、底径6.4cmである。15～17は縄文を地文として半截竹管文を施すものである。15は頸部に貼付突帯をめぐらせ、直下に縦方向の短い平行沈線を施す。16は15の同一個体となる可能性がある。17は2～3条のキャタピラ文を斜め方向に十字施文する。地文は、15・16が単節LRと単節RLを用いた菱形モチーフ、17は単節LRである。18は内湾する平縁の口縁で、口唇は明瞭な端面を作り出す。口縁下に貼付突帯をめぐらせ、その上下を半截竹管による刺突文帯で挟んでいる。19は完形の凹基無茎鏃である。半両面加工により表裏とも平坦な剥離面で覆われているが、裏面に素材剥片の主要剥離面の一部をとどめている。石材はチャートである。



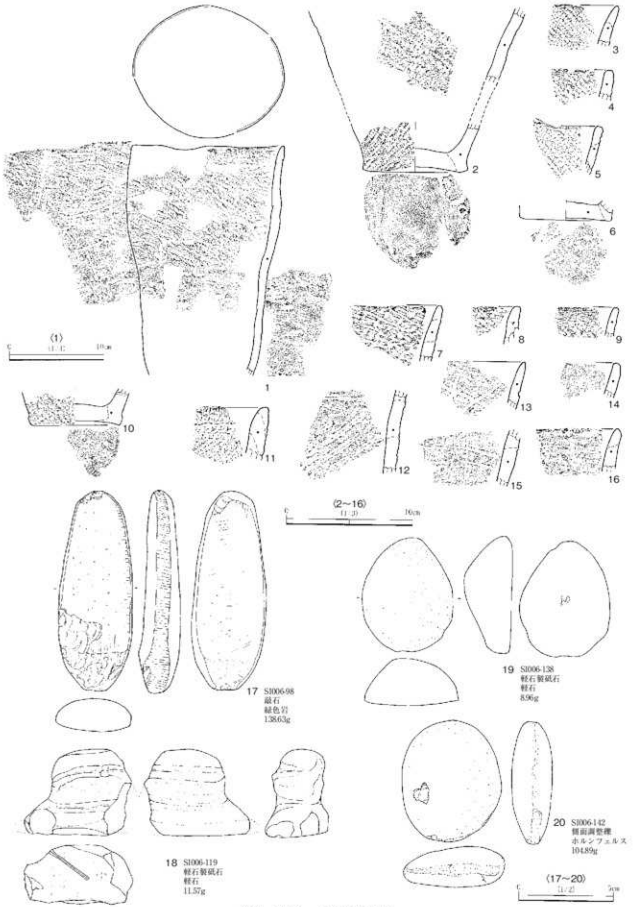
第4-10図　(16)SI005

(16)SI006（第4-9･11図、図版4-1･2･7）

52U－19・29、T52－10・20グリッドに位置する。前述の(16)SI005と重複しており、断面観察から本竪穴住居跡のほうが古い。平面プランは楕円形で、主軸方位はN－73.5°－Wである。規模は、検出面が6.34m×5.00m、床面が5.92m×4.67mである。検出面からの深さは、最大0.2mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面はおおむね平坦であるが、硬化面は認められない。

ピットは15基検出された。このうちP1～P6については、ややいびつながら多角形状の配置が認められることから、中央付近のP10とP15と併せ、本竪穴住居跡の柱穴の可能性がある。

炉は、遺構中央の北西寄りに、「ラッカセイ形」の焼土集中範囲として検出され、2か所の火床が認め



第4-11図　(16)SI006

られた。火床１は1.21m×0.53mの楕円形、火床２は0.70m×0.48mの楕円形で、いずれも底面の被熱はそれほど著しいものではなかった。

出土遺物　炉の周囲～遺構中央付近に比較的まとまって出土したが、覆土上層が中心である。ほとんどが土器の小破片であったが、器形復元が可能な個体もあった。ほかに敲石などの石器も数点出土している。いずれも前期黒浜式の範疇でとらえられるものである。１は横断面が楕円状に歪んだ筒状の深鉢である。口径16.0cm～14.0cm、残存器高24.4cmである。器表全面に無節Ｒを用いた撚糸文を施す。２は深鉢の底部～胴部で、底径8.3cmである。３～17は破片資料である。３～10は縄文あるいは撚糸文を施すもので、６は底径7.4cm、10は底径6.8cmである。11～15は半截竹管を用いるものである。11・12は平行沈線、13～15は細い半截竹管の沈線文を縦横に施文する。16は無文の口縁である。17～20は礫石器である。17は敲石で、乳棒状磨製石斧の破損資料の側面と刃部を重点的に再研磨し、敲石として再利用している。上下両端は鈍端をなし敲打痕が部分的にみられる。断面は表面が凸、裏面が平坦なカマボコ形を呈する。石材は黒浜期の乳棒状石斧に頻用される緑色岩である。18・19は軽石製の砥石である。18は側面形が石冠状、19は楕円形を呈する。ともに底面に平坦な作業面がみられる。いずれも使い減りによりかなり小型化している。19の作業面中央には性格不明の小孔がみられる。いずれも用材の軽石は黄白色で軟質である。20は側面調整礫である。楕円形で扁平な小円礫を素材として、その側縁に敲打痕や磨耗痕がみられる。器面の一部には被熱による火ハネが生じている。石材はホルンフェルスである。ちなみに側面調整礫は砂岩を主体としており、その意味では少数派に属する。なお、これらの石器（乳棒状磨製石斧（転用）、軽石製砥石、側面調整礫）は、いずれも黒浜期を特徴づける資料である。

(16) SI007（第4-12・13図、図版4-2・7）

52Ｓ－28・29・38・39グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。平面プランはやや横長の楕円形で、主軸方位は、Ｎ－43.5°－Ｗである。規模は、検出面が4.62m×5.28m、床面が4.22m×4.90mである。検出面からの深さは最大0.22mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面は、外周が若干下がっており、硬化面は認められない。

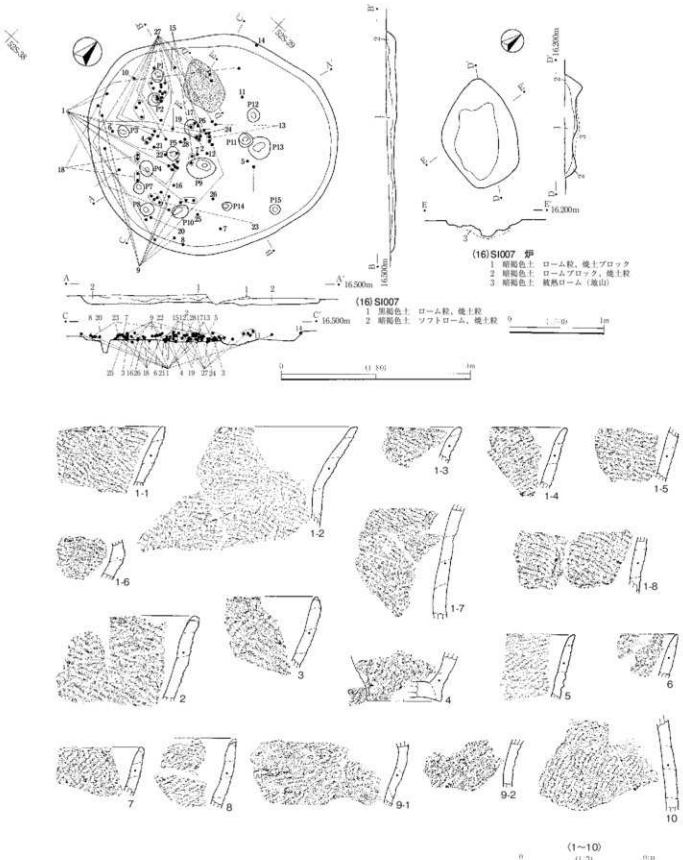
ピットは15基検出されたが、分布にばらつきがあり、規則的な配置は認められない。

炉は、遺構の中央北東寄りに１基検出された。主軸方位はＮ－60.0°－Ｗで、1.12m×0.79mのややいびつな楕円形を呈する。中央付近に0.76m×0.46mの火床部があり、底面が強く被熱している。

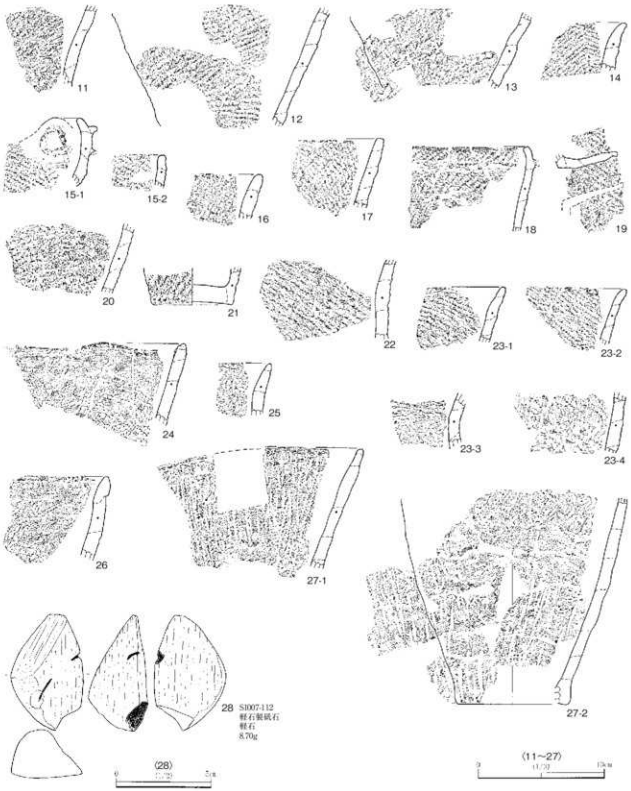
出土遺物　遺構の南西側にやや集中する傾向がみられたが、覆土上層が中心である。ほとんどが土器の小破片であるが、同一個体とみられる破片も複数確認された。いずれも前期黒浜式の範疇で把握できるものである。１～26は縄文あるいは撚糸文のみが施されるもので、４は底径（復元）5.9cm、21は底径6.5cmである。18・19は同一個体と考えられる破片で、口縁下に鍔状の貼付隆帯の痕跡が残る。27は口縁部と胴部下半～底部のみが確認された個体で、口縁部下にはハイガイの腹縁を用いた縦方向の貝殻文を施し、胴部下半には半截竹管の片側を用いた縦方向の沈線文を施す。底径（復元）は8.5cm、残存器高は16.5cmである。28は軽石製の砥石である。黒浜期を特徴づける遺物のひとつと考えられる。表面の左側縁下半に部分的に自然面が残るものの、それ以外の部位は平坦な磨滅痕で覆われている。使用による損耗が著しく、かなり小型化しており、下端部等は後世のガジリ（黒彩）により損傷している。

(17) SI001（第4-14～17図、図版4-2・8・9）

52Ｗ－37～39・47～49グリッドに位置する。(17)SI002と重複しており、土層断面の観察から本竪穴住



第4-12図　(16)SI007①



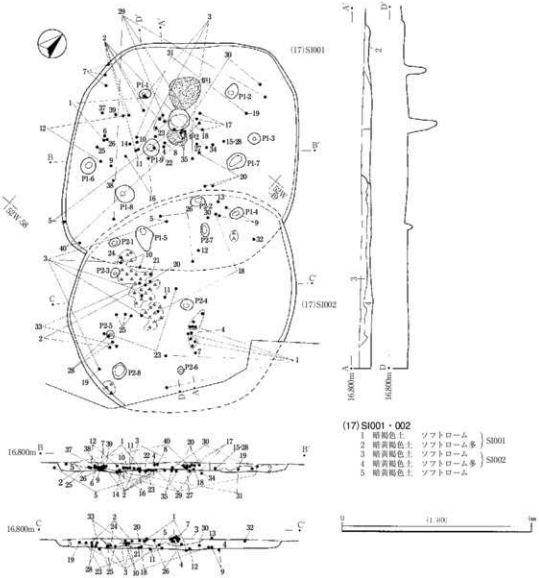
第4-13図　(16)SI007②

居跡が古い。平面プランはやや台形状の隅丸方形で、主軸方位はN－39.5°－Wである。規模は、検出面が4.80m程度×4.95m、床面が4.70m程度×4.75mである。検出面からの深さは最大0.2mで、覆土は自然堆積の様相を呈している。床面は、外周がわずかに下がっており、硬化面は認められない。

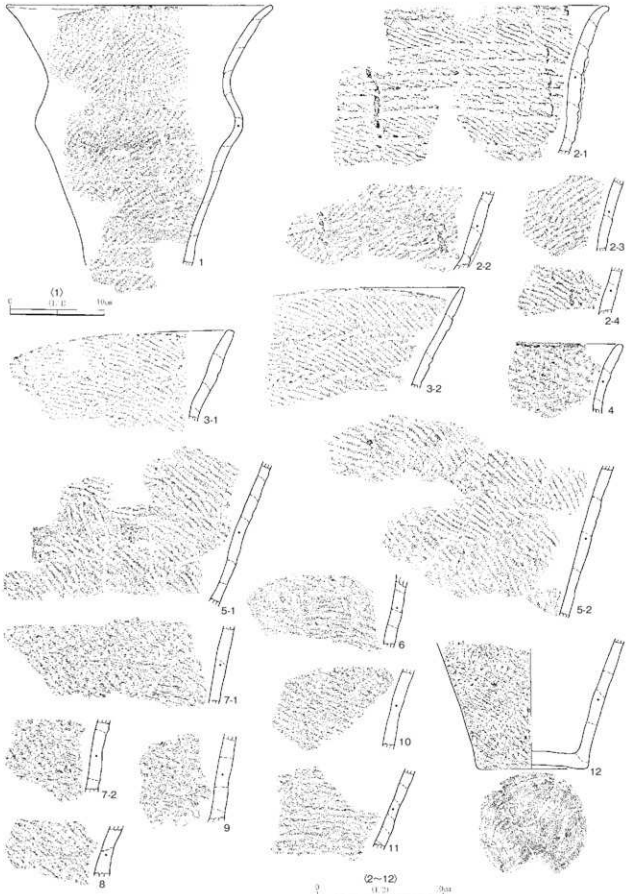
ピットは9基検出された。そのうちP1～P6については、いびつながら多角形状の配置が認められることから、本竪穴住居跡の柱穴の可能性がある。

炉は遺構の中央北西寄りに2基検出された。炉1は0.75m程度×0.65mのいちじく形、炉2は0.34m程度×0.45mの楕円形で、いずれも底面はよく被熱している。

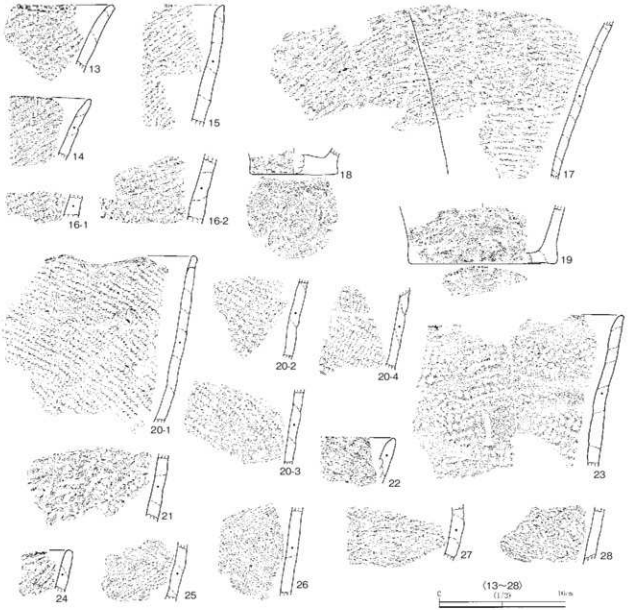
出土遺物　遺構の南西側を中心に散漫な出土状況を示す。比較的大きな破片もみられるが、本遺構に伴うと考えられる遺物は多くない。いずれも前期黒浜式の範疇で把握できるものである。1は、口径（復元）28.0cm、胴部最大径(復元)22.1cm、残存器高27.5cmである。2～27は縄文のみを施すもので、12は底径8.6cm、18は底径7.0cmである。27は網目状撚糸文、28は附加条縄文を施す。29～39は半截竹管を用いるものである。



第4-14図　(17)SI001・002



第4-15図　(17)SI001①

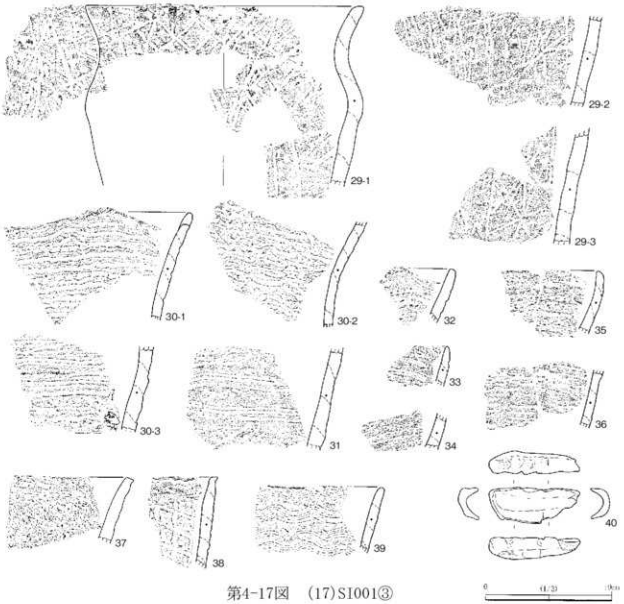


第4-16図　(17)SI001②

29は口径（復元）21.6㎝、胴部最大径（復元）22.0㎝、残存器高14.2㎝で、単沈線を斜格子状に施す。30は平行沈線をめぐらすが、波状もしくは押し引き状となる部分もある。31は平行沈線、32は押引文をめぐらす。33・35・36はやや短い平行沈線、34・39はコンパス文を施すものである。37は口縁下に刺突列を２段めぐらせ、38は単沈線を格子状に施す。40は手づくねによる土製品で、指の跡を明瞭に残すが、指紋などは認められない。丸木舟を模したものであろうか。長さ7.2㎝、幅3.0㎝、高さ1.8㎝で、厚みは0.6㎝である。

(17)SI002（第4-14･18～20図、図版4-2･9･15）

52W－48・49・58・59グリッドに位置する。(17)SI001と重複しており、土層断面の観察から本竪穴住居跡のほうが新しい。平面プランは略楕円形で、主軸方位はN－20.0°－Eである。規模は、検出面が5.10m×4.50m程度、床面が4.90m×4.30m程度である。検出面からの深さは最大0.2mで、覆土はおおむね自然堆積の様相を呈しているが、プラン西側および南側の上層から貝ブロックが検出された。床面は、中央がわずかにくぼんでおり、硬化面は認められない。

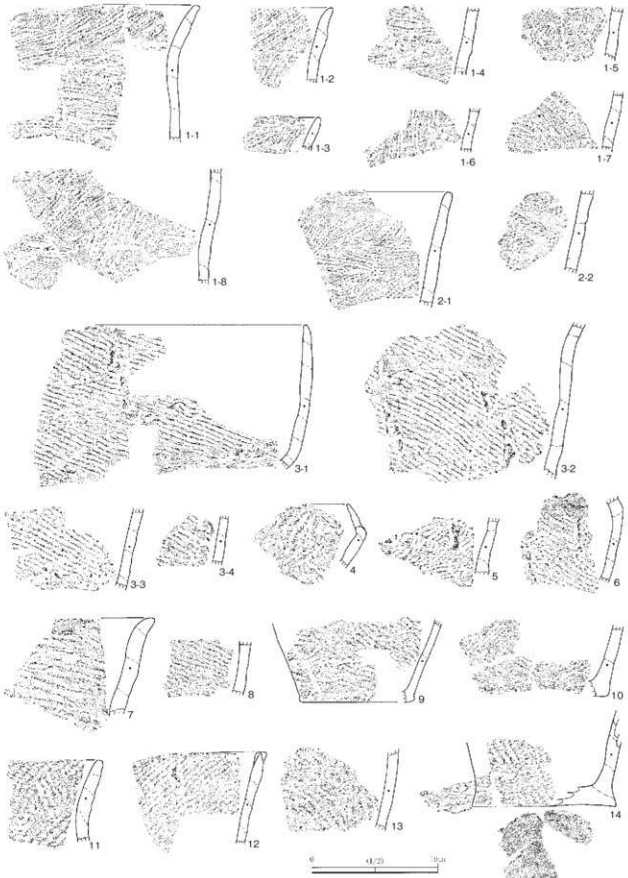


第4-17図　(17)SI001③

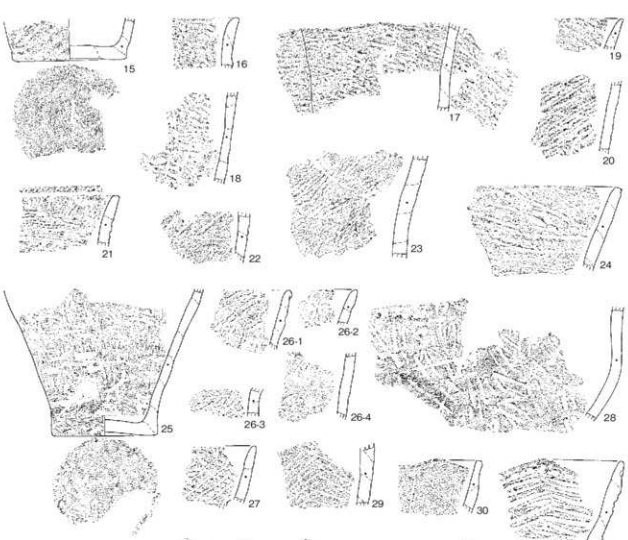
ピットは８基検出されたが、配置に偏りがあり規則的でない。炉は検出されなかった。

貝ブロックは、覆土内で４か所確認され、最大で10cm程度の厚みがあった。貝種は、第4-1表に示したとおりだが、ハマグリが最も多く、ハイガイ、マガキがこれに次ぐ。土ごとすべてを取り上げ、水洗選別を行ったが、魚骨などの微細遺物は検出されなかった。

出土遺物　遺構の中央付近を中心とし、散漫な出土状況を示す。ほとんどが土器の小破片であったが、同一個体と考えられる破片も複数認められた。いずれも前期黒浜式の範疇で把握できるものである。１・２は無節Ｌ×２（軸不明）を用いた撚糸文を横あるいは縦に羽状施文するもので、両者の原体は非常によく似ているが、胎土が異なっており、別個体である。３は平縁で、全面に無節Ｒを横施文し、施文単位の両端にミミズ腫状の微隆起を残す。４～27は器表面に縄文あるいは撚糸文のみを施すものである。４は「く」字状に内湾する波状縁で、無節Ｌを横施文する。５は無節Ｌと単節ＬＲを横施文し、縦の隆帯を貼り付けている。６は無節ＲとＳ字結節２段を横施文する。７～９は無節Ｒを横施文するもので、９は底径（復元）9.0cmである。10は無節Ｒと無節Ｌで菱形モチーフを施すものである。11は単節RLを縦横に用いて羽

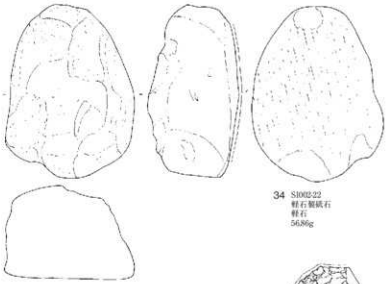


第4-18図　(17)SI002①

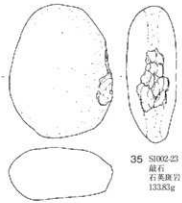


第4-19図　(17)SI002②

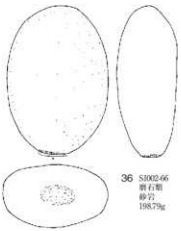
状施文するものである。12は無節Ｌを横施文し、口唇をところどころ指頭で押さえることにより平坦面を作り出し、浅い波状となっている。13・14は単節RL、15は単節LRを横施文するもので、底径（復元）は14が11.4cm、15は9.0cmである。16は平縁で、複節RLRであろうか。17・18は正反の合RRLで、18はサルボオによる貝殻腹縁文を施す。19～27は撚糸文で、19は無節Ｒ（軸不明）、20は単節RL×２を縦横に用いて羽状施文する。21は無節Ｌ×２（軸不明）で、口唇と口縁直下に押型文が施される。22・24は無節Ｒ、23は無節Ｒ×２を用いている。25は単節RLの押捺と考えられる。底径（復元）8.4cm、復元器高11.8cmである。26・27は附加条１種で、単節RL＋無節Ｌを用い、26が横、27が縦に施文する。28～32は半截竹管を用いるものである。28は短い平行沈線を縦横に施すもので、29が単沈線による菱形モチーフ、30は波状縁で単沈線を縦横に施す。31は細い単沈線を縦方向に施し、32は波状縁で、口縁直下に刺突列をめぐらせ、沈線による菱形モチーフを描く。33はサルボオを用いた貝殻腹縁文を施す。34は軽石製の砥石である。表面は



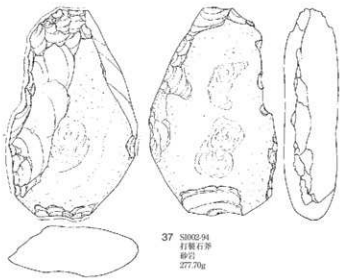
34 SI002-22
磨石類統石
磨石
56.86g



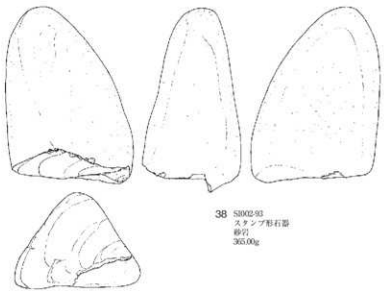
35 SI002-23
敲石
石英斑岩
133.83g



36 SI002-66
磨石類
砂岩
198.79g

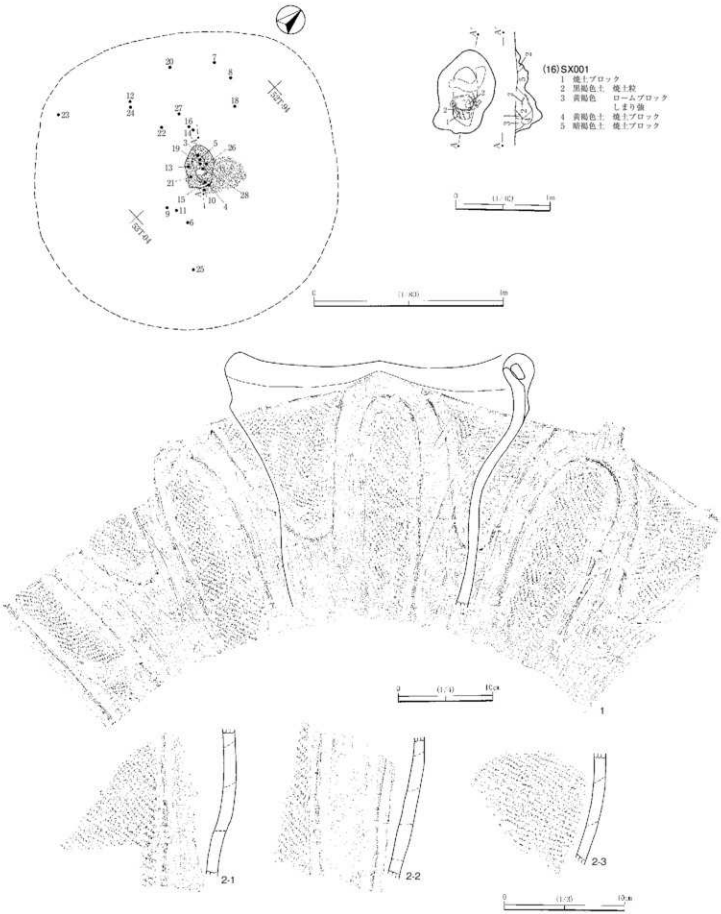


37 SI002-94
打製石斧
砂岩
277.70g



38 SI002-93
スタンプ形石器
砂岩
365.00g

第4-20図　(17)SI002③



第4-21図 (16)SX001①

自然面であり、作業面は平坦な裏面に限定される。本遺跡の出土資料の中では大型例（長さ9.1cm）に属する。35は敲石である。楕円形の扁平礫を素材としており、右側縁の中央部には敲打痕が部分的にみられる。被熱資料であり、器面全体が赤く変色している。石材は石英斑岩である。36は砂岩製の磨石類である。磨耗痕と敲打痕（下端部）が共存する。37は打製石斧である。磨石類の転用例であり、表裏に磨耗痕と凹み痕をとどめる。38はスタンプ形石器である。楕円形の円礫を素材として、下端部を打撃により截断し、平坦な底面を作出している。底面周辺の縁辺は鋭利であり、磨耗痕等の使用痕は特に見受けられない。スタンプ形石器は撚糸文土器の後半期、特に稲荷台式に顕著であり、混入である。

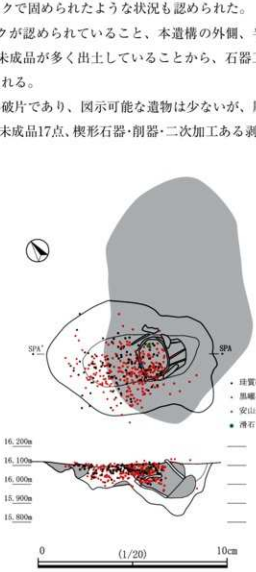
（2）土坑

(16) SX001（第4-21～24図、図版4-2・10・15）

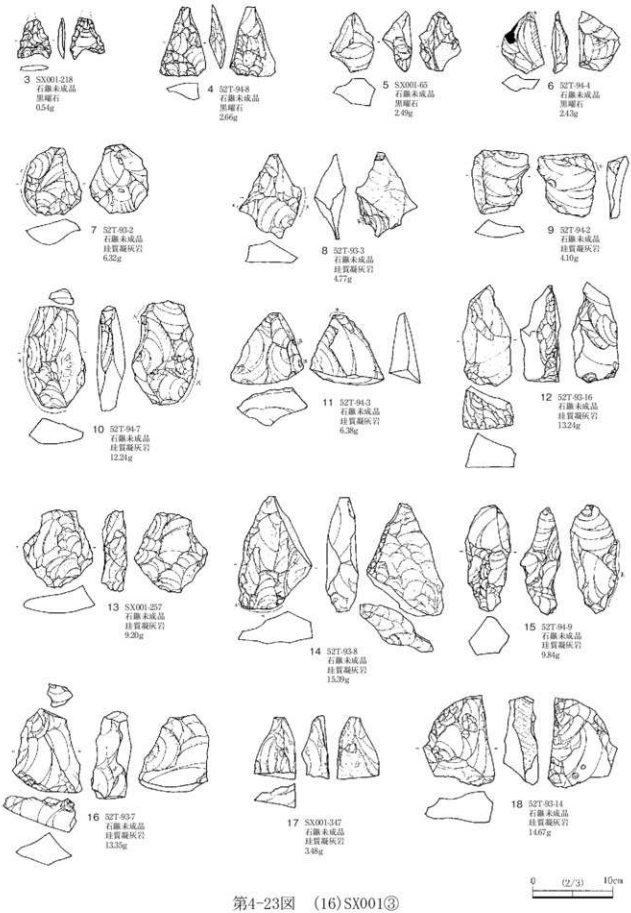
52T－93・94グリッドに位置する土器埋設炉で、他の遺構との重複関係はない。平面プランは略楕円形で、主軸方位はN－60.5°－Wである。規模は、検出面が1.76m×1.22m、火床部は0.64m×0.25mである。火床部のやや南寄りに、北向きに傾いた状態で埋設土器が確認された。土器は強く被熱し、土器内の覆土は焼土を非常に多く含んでおり、その周囲はロームブロックで固められたような状況も認められた。

なお本遺構は、遺構外の南側にもやや広く焼土ブロックが認められていること、本遺構の外側、半径3.5m程度の範囲に、黒曜石を中心とするチップや玉類の未成品が多く出土していることから、石器工房等として営まれた竪穴住居跡の炉であった可能性が考えられる。

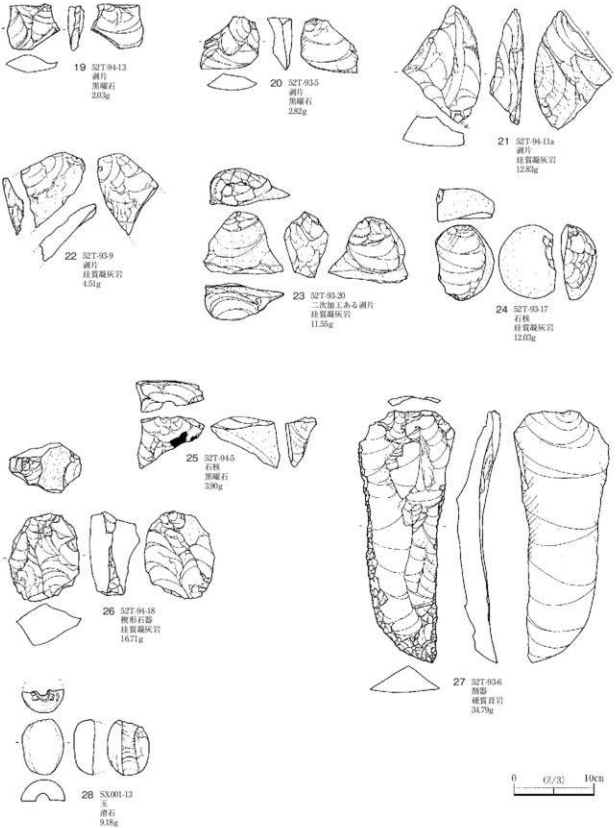
出土遺物　土器は、埋設された土器以外はほとんどが小破片であり、図示可能な遺物は少ないが、周辺グリッドを含め、総数415点の石器が出土した。内訳は石鏃未成品17点、楔形石器・削器・二次加工ある剥片・磨石類・礫（石皿関連）・玉各１点、石核３点、剥片・砕片389点である。これらの資料は炉跡周辺から出土しており、変色及び熱破砕がみられる。１は火床に埋設されていた縄文土器で、加曽利ＥⅡ式の深鉢である。口縁の半分程度と胴部下半以下を欠き、口径（復元）22.0cm、残存器高20.0cmである。なお、下部の破断面は、設置時にほぼ水平になるよう断面が調整されている。２～４は深鉢の破片で、強く被熱している。５～18は石鏃の未成品である。いずれも不定形の横長剥片を素材としている。この中で３・４は比較的完成度が高いが、その他は部分的な加工にとどまっている。石材は３～６が黒曜石、７～18が珪質凝灰岩である。黒曜石は斑晶を含まず良質であり、信州系の可能性が高い。19～22は幅広な横長剥片（19～22）であり、石鏃の素材となり得る大きさを有している。石材は19・20が黒曜石、その他は珪質凝灰岩である。23は部分加工が見られたため二次加工ある剥片としたが、石鏃等の未成品の可能性もあり、定かではない。石材は珪質凝灰岩である。



第4-22図　(16) SX001②



第4-23図　(16)SX001③



第4-24図　(16)SX001④

24・25は石核である。24には珪質凝灰岩製の小円礫を素材とした両極打法、25には黒曜石製の扁平礫を素材とした横長剥片生産が垣間見られる。26は楔形石器である。上下両端に両極打撃の痕跡がみられる。27は東北頁岩製の削器である。石刃に近い縦長剥片を素材として、周辺加工により半月形の刃部を形成している。長さ10.0cm、幅3.9cm、厚さ1.2cm、重さ34.79gである。帰属時期は明確ではないが、草創期後半が想定され、縄文前・中期を主体とする本遺跡の出土資料の中ではひときわ異彩を放っている。なおこの他に、同一母岩の資料として剥片が１点ある。28は楕円形の丸玉で半欠品である。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.9cm、重さ9.18ｇである。上下両端からそれぞれ穿孔されており、中央部で若干の食い違いがみられる。石材は滑石である。被熱により黒く変色し、かつ上端部の孔の周辺に損傷がみられる。おそらく縦割れの要因も被熱の影響と無縁ではなかろう。帰属時期については、形態的に黒浜期の可能性が高い。

(16) SK008（第4-25･27･28図、図版4-3･10）

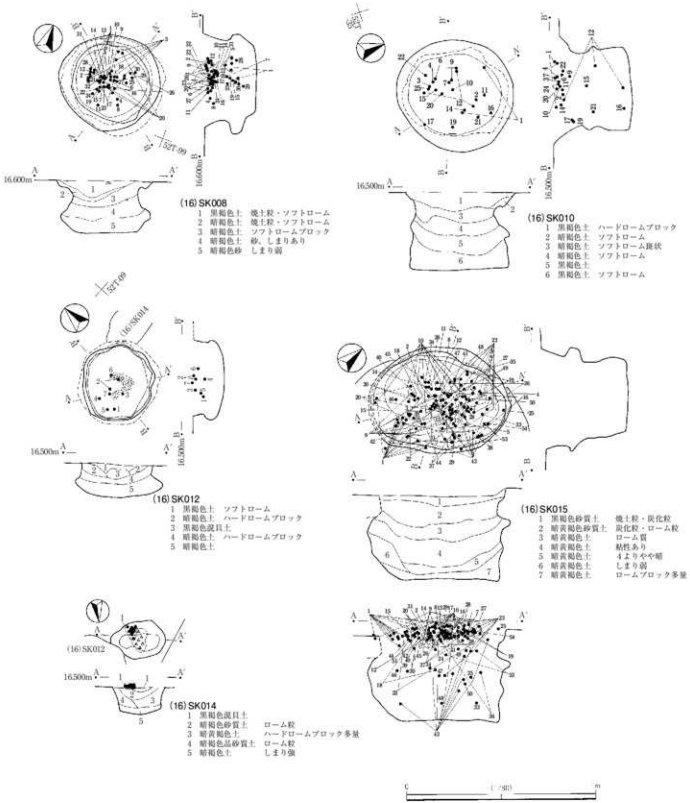
52Ｔ－88・98グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランはほぼ円形で、規模は、検出面が2.13m×2.02m、開口部が1.62m×1.60m、底面が1.52m×1.42mで、底面から高さ0.35m付近が最も広く、2.22m×2.10mである。検出面からの深さは1.12mで、覆土はレンズ状の堆積状況を示すが、上層に焼土粒と遺物を含み、中層以下が砂質のしまりの弱い層となっていることから、埋戻しの可能性がある。底面はおおむね平坦である。

出土遺物　遺構中央付近の覆土上層にやや集中する。ほとんどが土器の小破片であったが、器形復元の可能なものも認められた。中期加曽利Ｅ式が中心で、前期黒浜式が若干混入する。１～29は中期加曽利Ｅ式である。１～3・9･13･14は微隆帯に挟まれた幅広の無文帯により渦巻文を描くもので、口径（復元）は、１が29.8cm、２が27.8cmである。４～８・10～12は口縁部無文帯を微隆帯で区画する。15・16～24は沈線で文様を区画するものである。口縁部無文帯は15・17が隆帯と沈線、16・18は微隆帯、19～24は沈線で区画される。25は両側に沈線を伴う幅広の無文帯で文様を区画するものである。26は全面に単節RLを施す。27は口縁部無文帯を浅い沈線で区画し、胴部に縦位の細かいハケ目を施す。28・29は無文の底部で、底径（復元）は28が5.3cm、29が5.5cmである。30～32は前期黒浜式で、混入であろう。いずれも縄文あるいは撚糸文のみを施すものである。

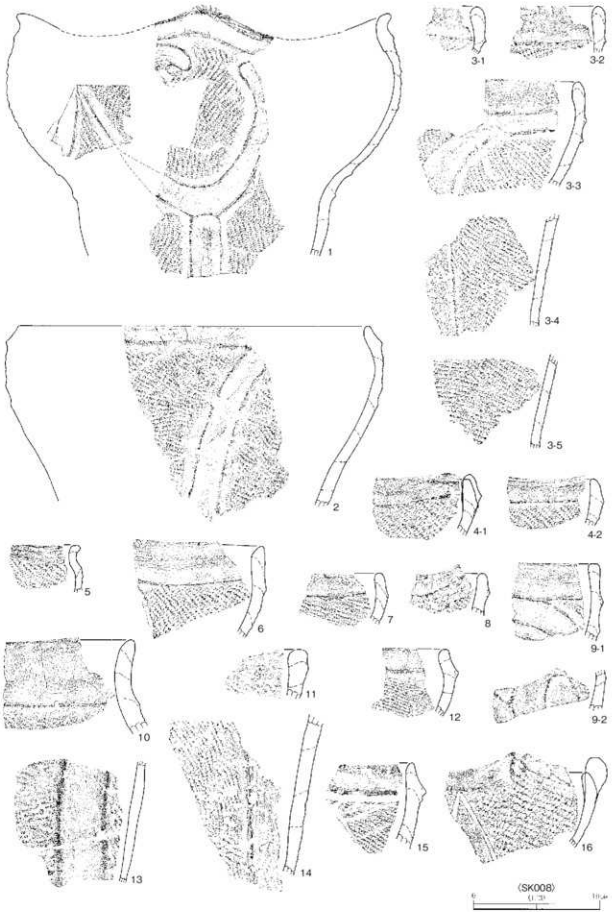
(16) SK010（第4-25･28･29図、図版4-3･10）

52Ｔ－25グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランは楕円形で、規模は、検出面が2.48m×2.36m、開口部が1.98m×1.72m、底面が2.22m×1.75mで、底面が最も広い。検出面からの深さは1.60mで、覆土は埋戻しと考えられる。

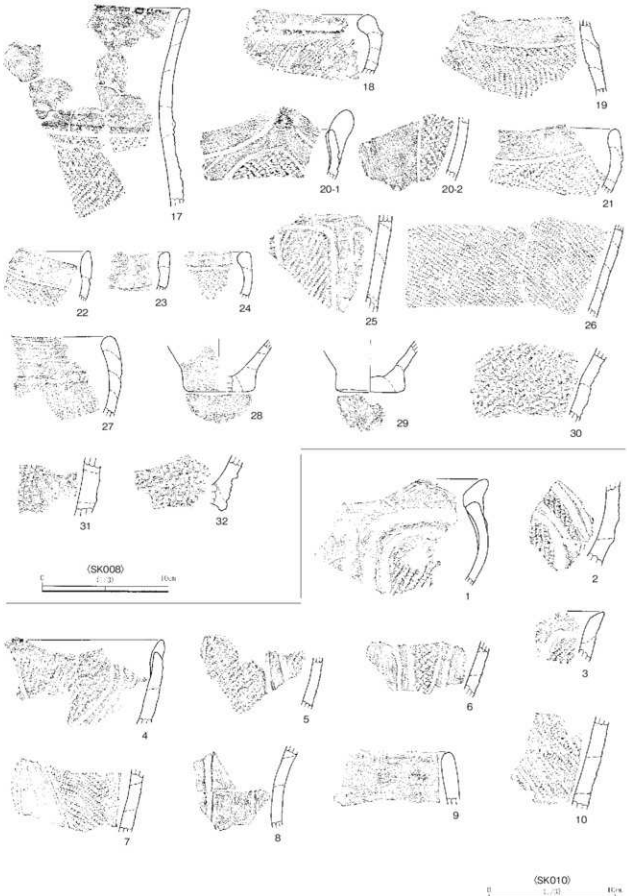
出土遺物　散漫な分布状況を示す。覆土上層が中心であり、ほとんどが土器の小破片である。１～10は中期加曽利Ｅ式である。１・２は隆帯により文様を区画するもの、３～９は沈線により文様を区画するものであるが、３・４・７・９は単沈線、５・６・８は両側に沈線を伴う無文帯である。10は縄文を縦施文する。11～24は前期黒浜式である。11～22は縄文のみを施すもの、22は撚糸文である。23は地文に貼付隆帯を１段めぐらせ、さらに半截竹管によるキャタピラ文を波状施文する。24は半截竹管を用いるものである。



第4-25図　縄文時代土坑①



第4-26図　縄文時代土坑②



第4-27図　縄文時代土坑③

(16) SK012（第4-25･29図、図版4-3･11）

53Ｔ－08グリッドに位置する土坑である。同じ縄文時代の土坑(16)SK014と重複しているが、新旧関係は不明である。平面プランはほぼ円形で、規模は、検出面（開口部）が1.59ｍ×1.61ｍ、底面が1.57ｍ×1.26ｍ、底面から0.3ｍ付近が最も広く、1.80ｍ×1.76ｍである。検出面からの深さは0.68ｍで、底面は中央付近が最も深い。覆土はレンズ状の堆積状況を示すが、ロームブロックを多く含み、中層で貝ブロックを検出していることなどから、一部は埋戻しと考えられる。

貝ブロックは、最大で20㎝の厚みがあった。貝種は第4-1表に示したとおりで、ハマグリが最も多く、ハイガイ、アサリ、イボキサゴがこれに次ぐ。土ごとすべてを取り上げ、水洗選別を行ったが、魚骨などの微細遺物は検出されなかった。

出土遺物　プラン中央付近から出土したが、状況は散漫であり、量も少ない。ほとんどが土器の小破片であった。１～６は前期黒浜式である。１は撚糸文で、近隣グリッド（52Ｔ－99）出土破片の中に同一個体が確認されている。２～４は縄文のみを施すもの、５・６は半截竹管を用いるものである。７は深鉢の破片を使用した大型の土板で、隅丸方形に近い形状であったと想定される。

(16) SK014（第4-25･29図、図版4-3･11）

53Ｔ－08・09グリッドに位置する土坑である。同じ縄文時代の土坑(16)SK012と重複しているが、新旧関係は不明である。平面プランは略楕円形で、主軸方位はＮ－83.0°－Ｗである。規模は、検出面が1.16ｍ×0.76ｍ、底面が0.86ｍ×0.36ｍである。検出面からの深さは0.56ｍで、断面はおおむね逆台形だが、底面は中央が若干くぼんでいる。覆土は自然堆積の様相を呈するが、ロームブロックを多く含み、検出面で貝ブロックが検出されていることから、少なくとも一部は埋戻しの可能性がある。

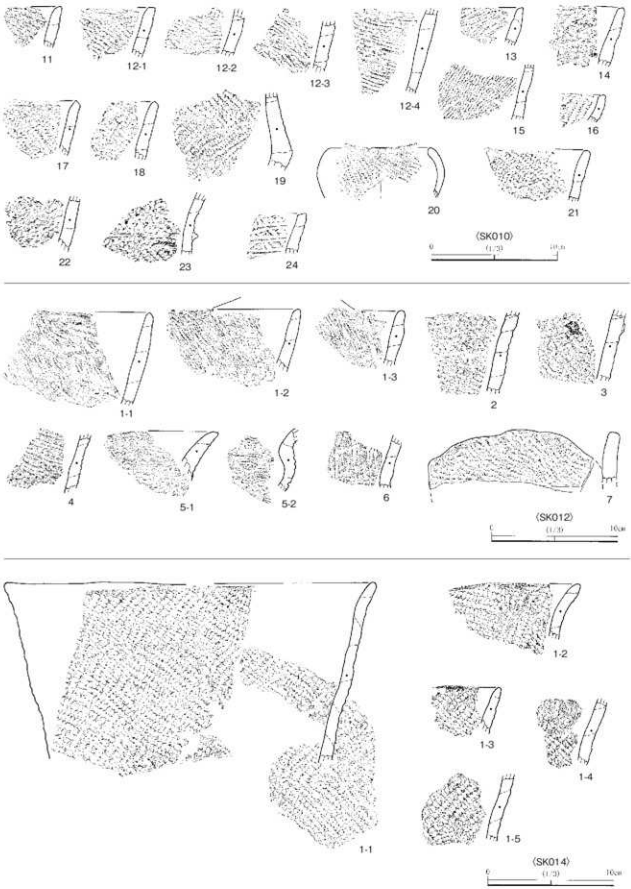
貝ブロックは、最大10㎝の厚みがあった。貝種は第4-1表に示したとおりで、隣接する(16)SK012と様相が異なっている。

出土遺物　貝ブロック北側に集中し、いずれも同一個体の破片であった。１は前期黒浜式の深鉢で、口径（復元）29.3㎝、残存器高13.9㎝である。

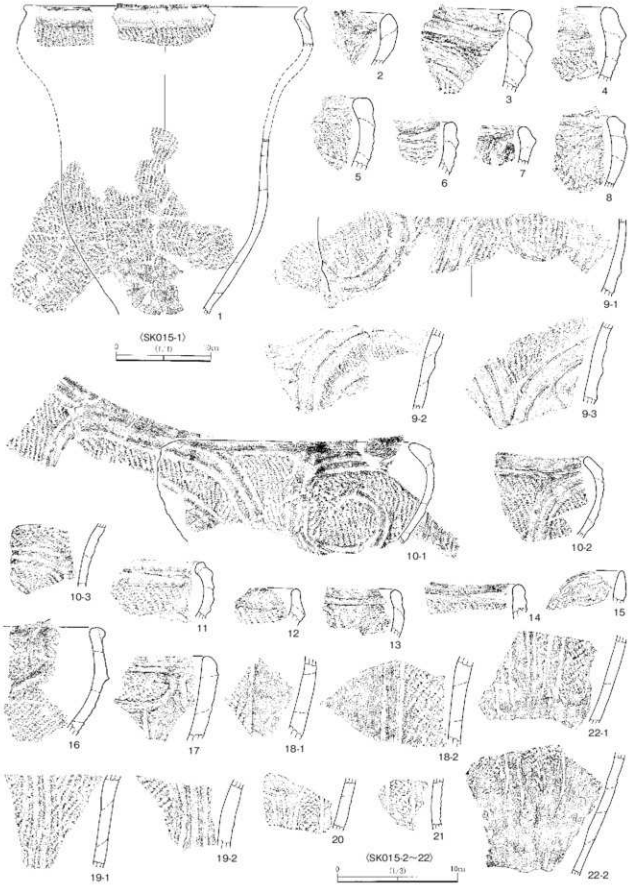
(16) SK015（第4-25･30･31図、図版4-3･11･12）

52Ｔ－98・99、53Ｔ－08・09グリッドに位置する土坑である。縄文時代の竪穴住居跡(16)SI004と重複しており、本土坑のほうが新しい。また、南側の一部をタケの根茎で破壊されている。平面プランは楕円形で、主軸方位はＮ－42.5°－Ｅである。規模は、検出面が3.00ｍ程度×2.23ｍ、底面が2.44ｍ×1.46ｍで、底面から高さ1.1ｍ付近が最も広く、2.95ｍ×1.65ｍである。検出面からの深さは1.30ｍで、底面はおおむね平坦である。覆土は自然堆積の様相を呈する。

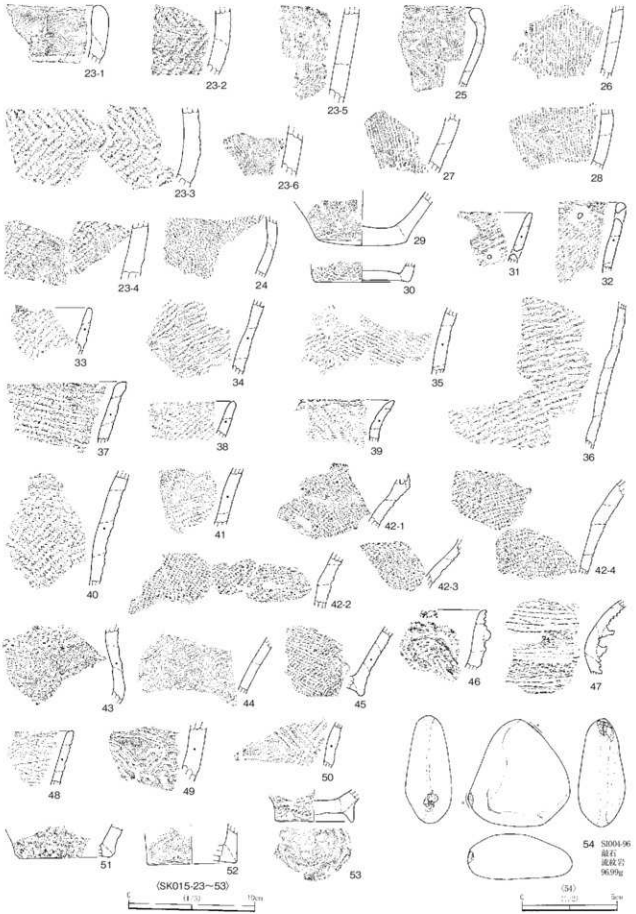
出土遺物　比較的多く出土した。時期は前期と中期が中心であり、前者は(16)SI004の遺物が混入したものであろう。１～31は中期加曽利Ｅ式である。１は口径（復元）29.5㎝の深鉢で、口縁の一部と胴部下半のみが確認された。遺存部分では全面に単節LRを施す。２～８は口縁部を幅広の隆帯で区画し、縄文を充填するものである。９・10は両側に微隆帯を伴うやや幅広の無文帯で渦巻状のモチーフを描くもので、10は口径（復元）18.5㎝である。11～17は口縁部無文帯を沈線で区画するものである。18～22は沈線で文様を区画するものである。19・20は沈線のみ、18・21・22は両側に沈線を伴う無文帯で区画する。23は口縁部無文帯を沈線で区画し、胴部上半に単節RLを上下に羽状施文、胴部下半に櫛状工具によるコンパス文を縦方向に施文する。24～28は櫛状工具による条痕を施すもので、24は半截竹管によるコンパス文を縦



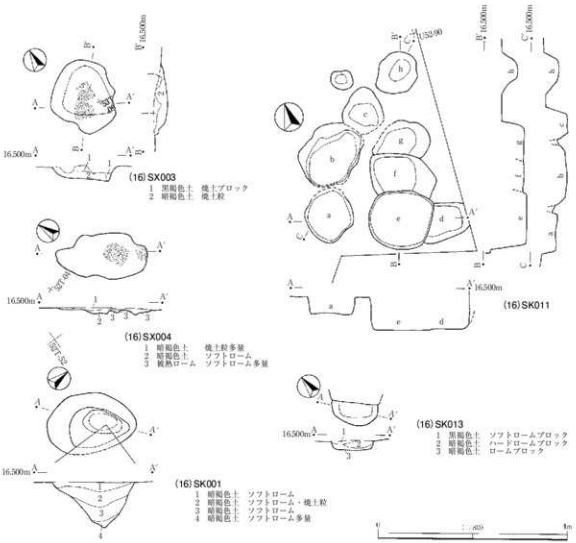
第4-28図　縄文時代土坑④



第4-29図　縄文時代土坑⑤



第4-30図　縄文時代土坑⑥



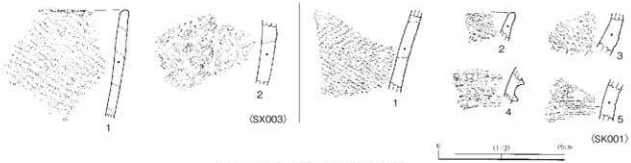
第4-31図　縄文時代土坑⑦

方向に施文する。29は浅い沈線で文様を区画するが、縄文の有無は不明である。底径は7.0cmである。30は縄文を施すもので、原体ははっきりしない。底径7.4cmである。31～53は前期黒浜式である。31～45は縄文あるいは撚糸文のみが施される。31・32はいわゆる穿孔土器で、いずれも焼成後に表面から穿孔されているようである。46は蕨手状の隆帯に沿ってキャタピラ文を施すもの、47～50は半截竹管を用いた沈線文を施すものである。51～53は底部で、底径（復元）は51が7.0cm、52が6.8cm、53は6.0cmで、53は断面が爪形の高台状となっている。54は流紋岩製の敲石である。上端と左側縁下部に敲打の痕跡がみられる。表面は被熱により全体が赤みを帯びている。

(16)SX003（第4-31･32図、図版4-12）

52T－98・99、53T－08・09グリッドに位置する炉跡で、ほかの遺構との重複関係はない。平面プランはやや不整な隅丸三角形で、主軸方位はN－31.0°－Eである。規模は、検出面が0.78m×0.66m、底面が0.55m×0.50mである。覆土には焼土粒を多く含んでいるが、底面はあまり被熱していない。

出土遺物　いずれも強く被熱しており、炉体として利用されていたと考えられる。前期黒浜式で、1は縄文、2は被熱による表面の剥落のため文様は不明である。



第4-32図　縄文時代土坑⑧

(16) SX004（第4-31図）

51T－94、52T－04グリッドに位置する炉跡で、他の遺構との重複関係はない。平面プランは不整な楕円形で、主軸方位はN－33.0°－Wであるが、火床部の軸はほぼ磁北であり、掘り込みの軸方向とずれている。規模は、検出面が0.93m×0.46m、火床部が0.42m×0.22mである。底面の地山は強く被熱している。遺物は僅少で、図示可能なものはない。

(16) SK011（第4-31図、図版4-3）

52T－99、52U－90、53T－09、53U－00グリッドに位置する、８基からなる土坑群である。その他の遺構との重複関係はない。それぞれの底面規模は、Aが1.00m程度×0.89m、Bが1.26m×0.83m、Cが0.48m×0.62m、Dが0.90m程度×0.60m、Eが1.24m×1.15m、Fが0.88m×0.80m程度、Gが0.80m程度×0.62m、Hが0.50m×0.35mである。検出段階では個別の土坑と認識していたが、精査した結果上部がつながってしまった。ただ、調査時の所見では、断面形状や深さ、軸方向に規則性がなく、同時に掘られたものではなさそうだとのことである。遺物は僅少で、図示可能なものはなかったが、本土坑が所在する52T－99グリッドの確認トレンチ内から前期黒浜式の土器が比較的まとまって出土しており、あるいはこれらが本土坑群に伴う遺物であった可能性がある。

(16) SK001（第4-31・32図、図版4-4・12）

52T－42・52グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランは略楕円形で、主軸方位はN－36.5°－Eである。規模は、検出面が1.88m×1.3m程度、底面が0.59m×0.24mである。検出面からの深さは0.95m、短軸方向の断面形状は逆台形で、覆土は自然堆積の様相を呈している。

出土遺物　ほとんどが前期黒浜式の小破片である。１～３は縄文あるいは撚糸文を施すものである。１は単節RLを羽状施文し、境にS字結節文をめぐらすもので、２は無節R、３は網目状撚糸文を施す。４は頸部に貼付隆帯を２条めぐらせ、５は半截竹管による平行沈線文と山形沈線文を施す。

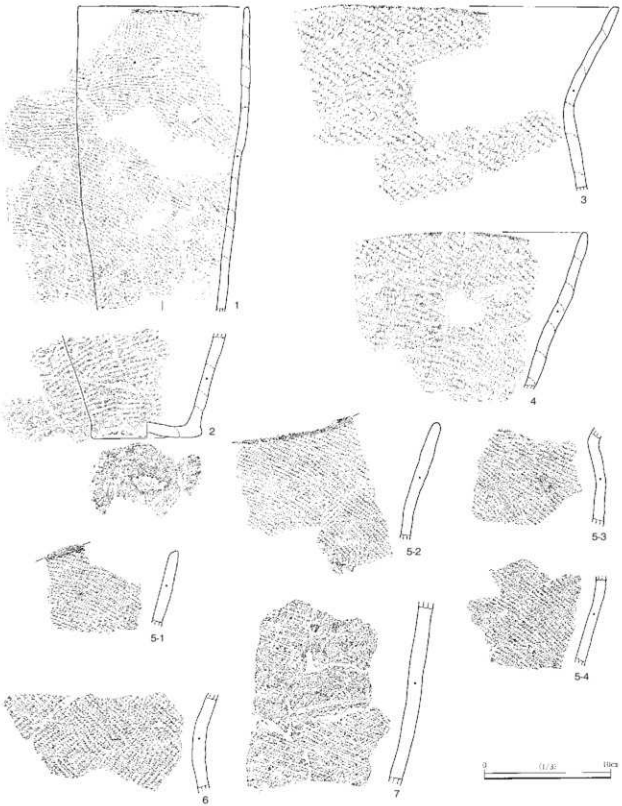
(16) SK013（第4-26図、図版4-4）

52T－98グリッドに位置する土坑である。他の遺構との重複関係はないが、北西辺を攪乱により破壊されている。平面プランは長方形と考えられ、主軸方位はN－48.5°－Wである。規模は、検出面が0.96m、底面が0.71mである。検出面からの深さは0.22mで、断面は逆台形、底面は平坦である。掘り込みが浅いためはっきりしないが、覆土にロームブロックを多く含んでおり、埋戻しを行っている可能性がある。

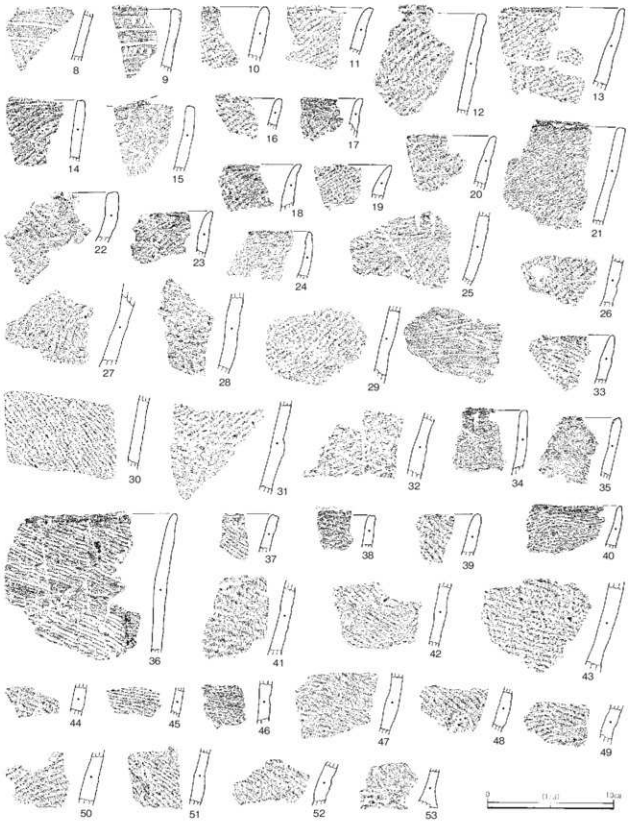
出土遺物　遺物は僅少で、すべて土器の小破片である。図示可能なものはない。

（３）遺構外出土の遺物（第4-33～41図、図版4-12～14）

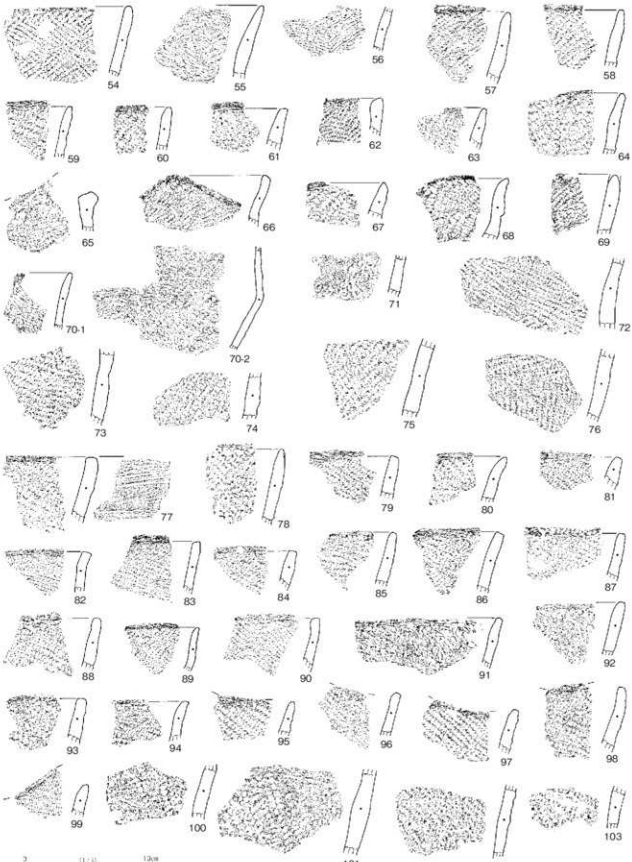
確認調査のトレンチ等から出土した遺物を報告する。時期は早期～晩期にわたるが、量は前期が最も多



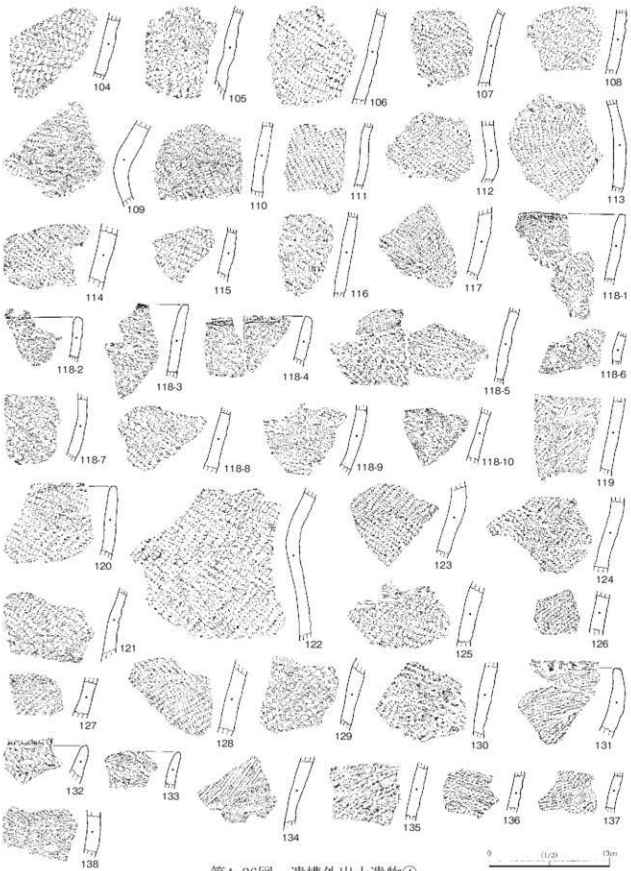
第4-33図　遺構外出土遺物①



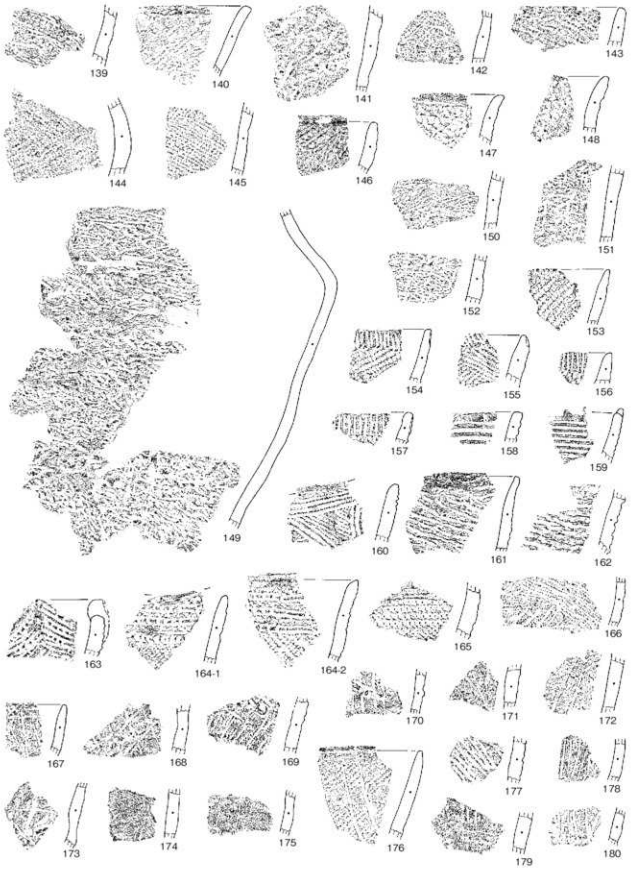
第4-34図　遺構外出土遺物②



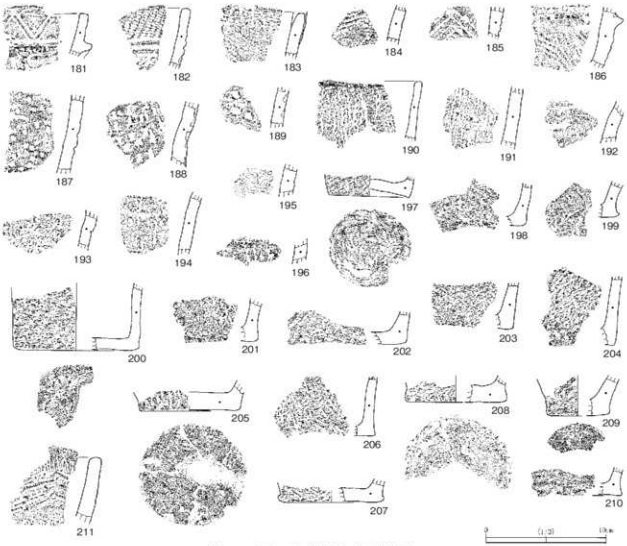
第4-35図　遺構外出土遺物③



第4-36図　遺構外出土遺物④



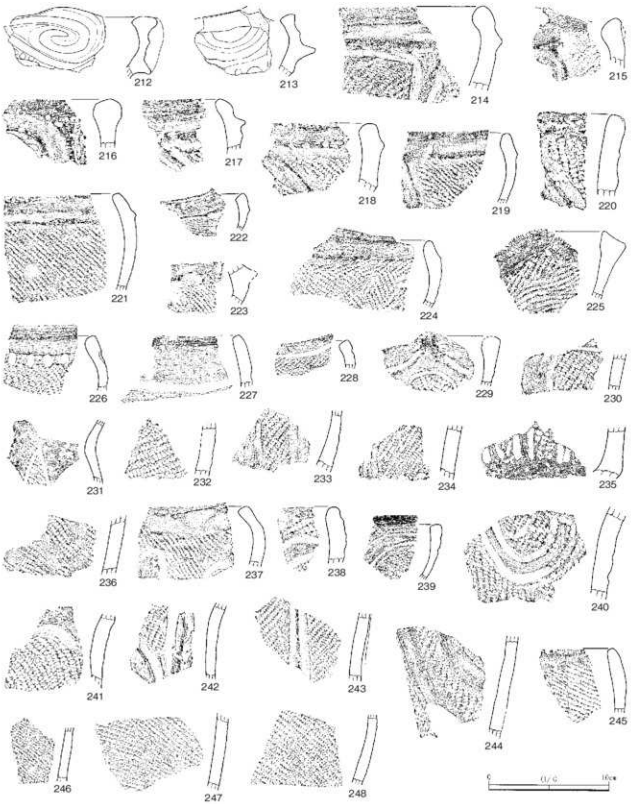
第4-37図　遺構外出土遺物⑤



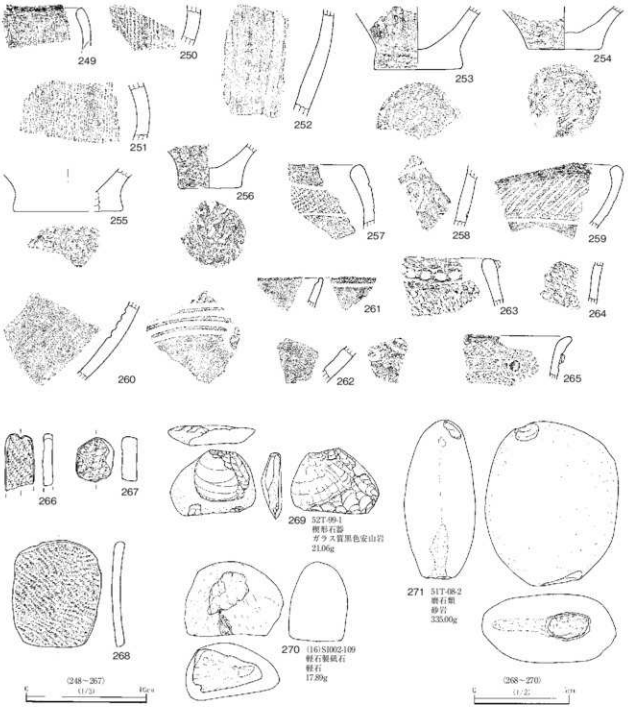
第4-38図　遺構外出土遺物⑥

く、中期がこれに次ぐ。一部のグリッドで器形復元が可能な破片が出土しているほかは、いずれも小破片ばかりである。土器以外には土製品と石器・剥片等がみつかっている。

１～７はややまとまった状態で出土したもので、いずれも前期黒浜式である。出土位置からみて、(16) SK011・SK012・SK014などに関係する遺物の可能性がある。１は口径（復元）13.4cm、残存器高24.0cm、２は底径8.6cmである。１～６は縄文、７は網目状撚糸文を施す。８～268は破片資料である。８・９は早期沈線文系土器である。10～209は前期黒浜式である。10～151は全面に縄文あるいは撚糸文を施すもの、130～137は撚糸文を施すもの、138～145は附加条縄文を施すもの、146・147はループ文、148～151は結節文を施す。152～184は半截竹管を用いるもので、152～156は口縁部下に縦条線をめぐらすもの、157～159・175～179・181は平行沈線、160・161は波状沈線、162～164はキャタピラ文、165は平行沈線による菱形モチーフ、166～174は格子状、180は鍔状隆帯をもち口縁部に山形沈線を施す。182～188は棒状工具による刺突を施すもので、182～185は刺突列、186～188は全面に刺突文を施すものである。189～195はハイガイによる貝殻腹縁文を施すものである。196～209は底部破片で、底径（復元）は、196が6.4cm、200が10.0cm、205が8.0cm、206が8.4cm、207が8.0cmである。210は前期興津式で、半截竹管による条線とキャ

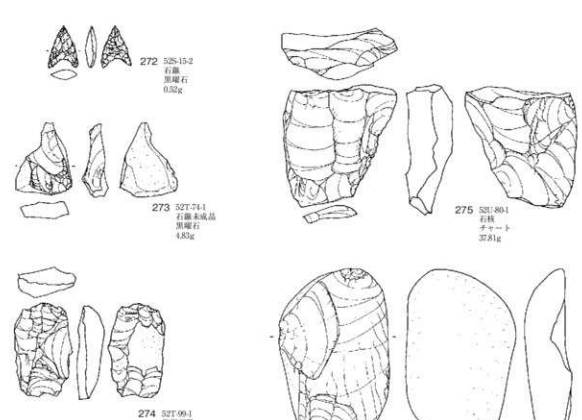


第4-39図　遺構外出土遺物⑦



第4-40図　遺構外出土遺物⑧

タビラ文を施す。211～255は中期加曽利E式である。211・212は隆帯による渦巻文、213～224は隆帯による区画、225～227が沈線による区画、228～234・251が沈線を伴う無文帯による区画、235が無文帯による区画、240～243は浅い沈線を伴う隆帯による区画、236～239が沈線による文様を描くもので、244～247は縄文のみを施すものである。248～250は全面に縦方向の櫛描を施す。252～255は底部で、底径（復元）は252が6.8cm、253が5.8cm、254が8.6cm、255が5.0cmである。256～264は後期で、256・257は称名寺式、258～263は加曽利B式、264は曽谷式あるいは安行1式であろうか。265～267は中期の土器片を再利用した土製品で、265が土器片錘、266・267が土版である。264は下半を欠くが、現存長4.6cm、最大幅2.3cm、最大



第4-41図　遺構外出土遺物⑨

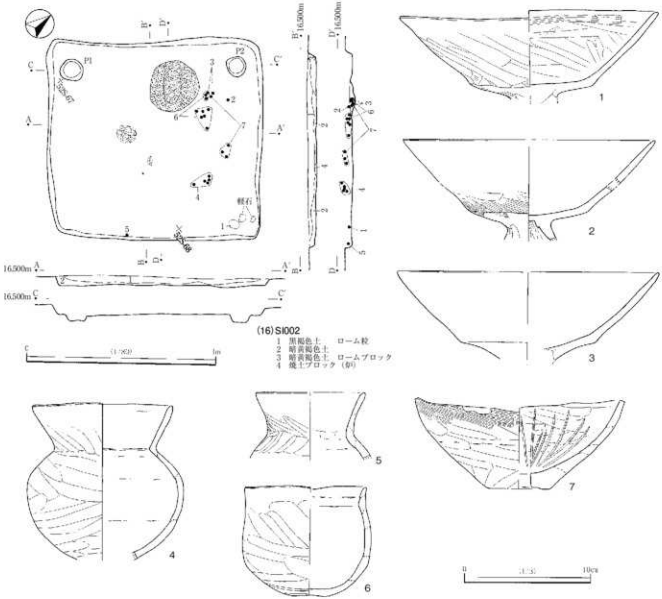
厚0.8cm、265は径3.6cm～2.9cm、最大厚1.2cm、267は最大長8.4cm、最大幅6.9cm、最大厚0.8cmである。268、273及び275は楔形石器である。268と275はガラス質黒色安山岩の小円礫、273はメノウ製の剥片を素材としている。いずれも上下両端に両極打撃の痕跡をとどめる。269は軽石製砥石である。楕円形の半截礫の底面に磨耗痕がある。270は磨石類である。上下両端に敲打痕を残している。271は石鏃である。黒曜石製で、三角形の凹基無茎鏃である。272は石鏃未成品で、肉眼観察ではあるが信州系の黒曜石と考えられる。274は打面転移が頻繁な横長剥片石核である。生産された剥片は主として石鏃の素材に供されたものと考えられる。良質なチャートを石材としている。

2．古墳時代

（1）竪穴住居跡

(16) SI002（第4-42図、図版4-4·16）

52S－57・58・67・68グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。主軸方位はN－52.0°－Wで、規模は、検出面が4.30m×4.50m、床面が4.16m×4.35mのわずかに横長の方形である。検出面からの深さ



第4-42図　(16)SI002

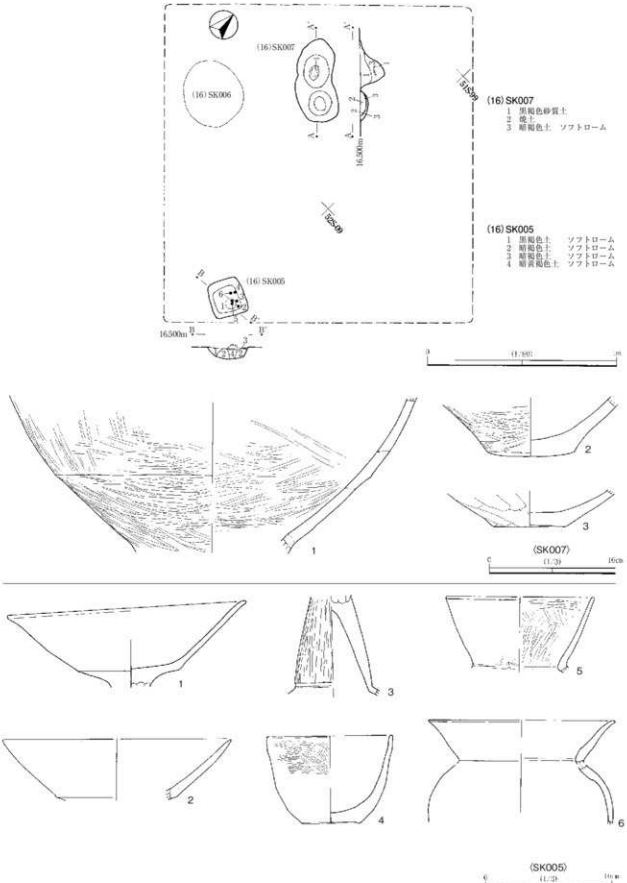
は最大0.23mで、覆土は自然堆積の様相を呈する。床面はおおむね平坦だが、硬化面は認められない。

ピットは、西隅と北隅に2基検出された。比較的整った円形であり、本竪穴住居跡の主柱穴と考えられるが、プランの手前側では確認できていないことから、掘り込みの外側に残りの柱穴が存在した可能性もある。柱間は3.45mである。床面からの深さはP1が14.2cm、P2が11.3cmである。

炉は、プラン中央やや右奥寄りに1基検出された。主軸方位は本竪穴住居跡と同様で、1.06m×1.02mの略円形を呈するが、火床部は0.70m×0.36mの楕円形で、底面が強く被熱していた。また、このほか遺構中央左寄りと中央付近の床面に焼土ブロックが認められた。

貯蔵穴等は検出されていないが、遺構の東隅付近の床面上に軽石のブロックと粘土ブロックが確認されている。

出土遺物　炉の北東側にかけて、ややまとまって出土する傾向が認められた。1～3はいずれも脚部を欠く土師器高杯である。1・2はハケ目後、ヘラナデにより調整されるが、3は摩耗によりはっきりしな



第4~43図　古墳時代土坑①

い。1は口径20.2cm、2は口径（復元）20.0cm、3は口径（復元）20.4cmである。4・5は土師器小型壺で、いずれもヘラナデにより調整される。4は口径10.8cm、頸部径8.0cm、胴部最大径12.4cm、残存器高12.2cm、5は口径（復元）8.5cm、頸部径（復元）6.8cmである。6はやや下膨れ状を呈し、わずかに頸部がくびれる土師器椀で、ヘラナデにより調整される。口径9.6cm、体部最大径10.2cm、底径2.8cm、器高8.6cmである。7は焼成前に穿孔された浅鉢状の土師器甑で、口縁部外面はハケ目、他はヘラナデにより調整される。胎土の粒子は細かいが、比較的粗い作りである。口径16.6cm、底径5.0cm、器高6.0cm～7.0cmである。

（2）土坑

(16) SK005（第4-43図、図版4-5・16）

52S－08・09グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランは比較的整った方形で、主軸方位はN－64.5°－Wである。規模は、検出面が0.77m×0.74m、底面が0.54m×0.52mである。検出面からの深さは0.24mで、断面形状は逆台形、底面は中央がややくぼんでいるが、おおむね平坦である。覆土はソフトロームを混入する黒褐色土および暗褐色土だが、検出面で見つかった伏せた高杯杯部の下は砂質であり、周囲と異なることから、木製容器等を埋納していた可能性がある。

なお、位置関係と併せ、出土遺物がほぼ同時期であることから、後述する(16)SK007を炉とする竪穴住居跡の貯蔵穴であった可能性が考えられる。

出土遺物　1～3は土師器高杯である。1は脚部を完全に欠くが、杯部はほぼ完形に近い。口径19.0cmで、伏せた状態で出土した。2は杯部の破片で、口径（復元）18.0cmである。3は脚部で、外面全面に縦方向の細かいミガキ痕が残る。4は小型の椀で、口径10.0cm、底径4.2cm、器高6.9cmである。口縁部外面にハケ目を残す。5は土師器小型壺で、口径（復元）11.7cm、頸部径（復元）7.4cmである。内面全面に細かいミガキ痕が残る。6は土師器甕で、口径（復元）14.7cm、頸部径（復元）9.8cm、胴部最大径（復元）14.6cmである。

(16) SK007（第4-43図、図版4-5・16）

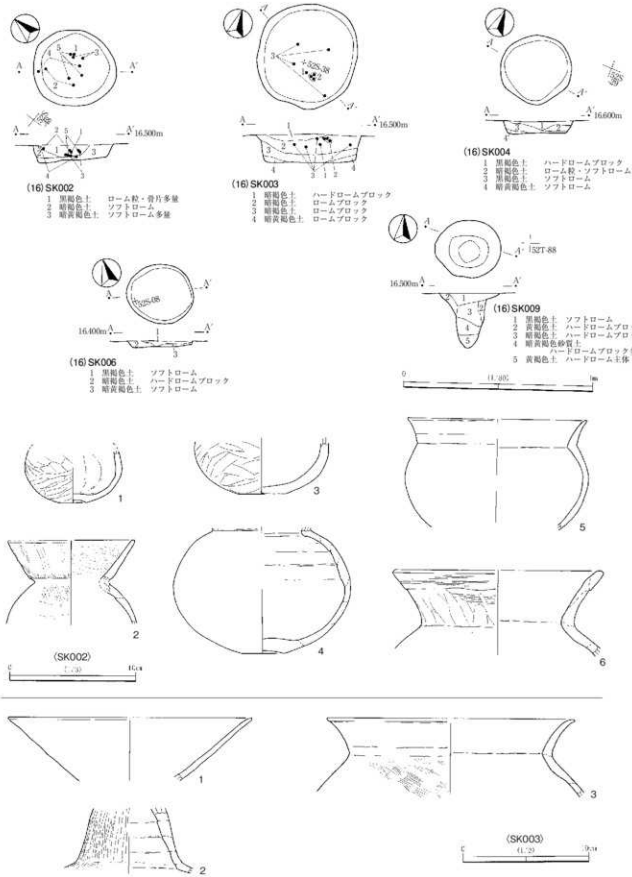
51S－98グリッドに位置する炉跡で、他の遺構との重複関係はない。検出面での平面プランは歪んだ楕円形、主軸方位はN－50.0°－Wで、火床部はほぼ円形である。規模は、検出面が1.76m×0.84m、火床部が0.52m×0.48mである。火床部の覆土はほぼ焼土で占められているが、底面はほとんど被熱していない。また、炉の検出プラン内の北寄りには、0.70m×0.52mの楕円形の土坑があるが、覆土からは焼土は検出されていない。

なお、本炉跡は、出土遺物がほぼ同時期であることから、前述の(16)SK005を貯蔵穴とする竪穴住居跡の炉であった可能性が考えられる。

出土遺物　火床部北側の土坑から、強く被熱した土師器破片が出土した。1は土師器壺の胴部で、内外面ともに細かいミガキにより調整され、胴部下半に稜をもつ。2は土師器壺の底部で、外面は細かいミガキにより調整される。底径7.0cmである。3は土師器甕の底部である。胴部が球形に強く張るタイプと考えられ、外面は斜め方向のヘラケズリにより調整される。底径5.6cmである。

(16) SK002（第4-44図、図版4-16）

52S－38・48グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランはわずかに南北に長い円形で、規模は、検出面が1.75m×1.60m、底面が1.44m×1.36mである。検出面からの深さは0.23m～0.38mで、断面形状は逆台形、底面はおおむね平坦だが、北側に向かって若干傾斜している。覆土は暗



第4~44図　古墳時代土坑②

褐色土が中心だが、上層に骨粉と考えられる白色粒を多量に含んでおり、埋戻しの可能性が高い。

出土遺物　遺構中央付近の覆土中層から比較的多く出土したが、ほとんどが小破片であり、図示可能なものは少ない。1～3は土師器坩で、1・3は胴部がやや算盤珠状に張る。2はハケ目、1・3はヘラナデにより調整され、1は底部をヘラケズリにより作り出している。1は胴部最大径（復元）7.6cm、底径2.1cm、2は口径（復元）10.0cm、頸部径（復元）5.9cm、3は胴部最大径（復元）10.6cm、底径3.7cmである。4は胴部がやや算盤珠状に張る土師器小型壺で、摩耗により外面の調整ははっきりしないが、内面には輪積痕を残す。頸部径（復元）7.8cm、胴部最大径（復元）14.1cm、底径3.2cmである。5は土師器小型甕で、口径（復元）14.1cm、頸部径（復元）12.1cm、胴部最大径（復元）14.5cmである。6は折り返し口縁の土師器壺で、口縁部外面は横ハケ目後縦ヘラナデにより調整される。口径（復元）16.3cm、頸部径（復元）12.1cmである。

(16) SK003（第4-44図、図版4-4･16）

52S－27・28・37・38グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランはやや南北に長い楕円形で、規模は、検出面が2.25m×2.12m、底面が1.93m×1.85mである。検出面からの深さは0.6mで、断面形状は長方形に近い逆台形、底面はほぼ平坦である。覆土はレンズ状の堆積状況を示すが、ロームブロックが多く含まれており、埋戻しの可能性がある。

出土遺物　遺構中央付近から出土したが、ほとんどが小破片である。1・2は土師器高杯である。1は浅く直線的に開く薄手の杯部で、口径（復元）19.3cmである。3は裾部を欠く脚部で、高さに比して径の大きな形状である。外面は細かい縦ミガキにより調整される。3は外反する口縁を有する土師器甕で、口径（復元）19.4cm、頸部径（復元）16.0cmで、胴部外面に斜め方向のハケ目が残る。

(16) SK004（第4-44図、図版4-4）

52S－18・28グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランはほぼ円形で、規模は、検出面が1.50m×1.48m、底面が1.32m×1.25mである。検出面からの深さは0.28mで、断面形状は逆台形、底面はほぼ平坦である。覆土にはロームブロックが多く含まれており、埋戻しの可能性がある。遺物は出土しなかった。

(16) SK006（第4-44図、図版4-5）

51S－97・98、52S－07・08グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。平面プランはやや東西に長い楕円形で、規模は、検出面が1.42m×1.25m、底面が1.26m×1.10mである。検出面からの深さは0.14mで、断面形状は逆台形、底面はほぼ平坦である。浅いため覆土の堆積状況ははっきりしないが、ロームブロックが多く含まれており、埋戻しの可能性がある。遺物は出土しなかった。

(16) SK009（第4-44図、図版4-5）

52S－77・87グリッドに位置する土坑で、他の遺構との重複関係はない。調査時は縄文時代の土坑としていたが、便宜的にここで報告する。検出面での平面プランはやや東西に長い楕円形で、底面は整った円形である。規模は、検出面が1.40m×1.21m、底面は直径0.46m、検出面からの深さは、1.20mである。覆土の状況から、柱の抜き取りを行った柱穴の可能性が考えられるが、本土坑の周囲には同様の土坑は検出されなかった。遺物は出土しなかった。

第３節　まとめ

１．縄文時代

今回の調査範囲からは、前期黒浜式期の竪穴住居跡８軒と土坑２基、炉跡２基、中期加曽利Ｅ式期の袋状土坑３基、土器埋設炉１基のほか、時期不明の土坑群が確認された。これまでの調査範囲では最も遺構の密度が濃いエリアとなったものの、遺構からの遺物の出土状況は概して散漫で、少ない傾向がある。遺構外出土遺物も多くはないが、特定のグリッドとその周辺から比較的まとまって出土する様子が認められた。時期不明の土坑群（(16)SK011）については、周辺グリッドから多くの前期黒浜式の土器が出土しており、あるいはこれらが本土坑群の時期を決定する遺物なのかもしれない。

石器類は、遺構の内外から計473点が出土した。器種は剥片・砕片が主体であり、石鏃等の利器の占める割合は低い。これらの石器群に関する石材と器種の対応関係を第4-2表に示したので、適宜、参照されたい。帰属時期については石器の形態的特徴や出土状態から縄文時代初頭から中期にわたるものと考えられるが、遺構の中でも縄文時代中期後半・加曽利Ｅ３式期の土器埋設炉として調査された(16)SX001とその周囲に集中しており、その出土量は全体の約90％（計415点）を占める。その性格は石鏃の製作に関わるものであり、石鏃未成品（17点）とともに多量の剥片・砕片（計389点）が出土している。またこれに加えて、黒曜石や珪質凝灰岩が二大石材となっており、このような石材の偏りも製作跡のあらわれのひとつと言えよう。

いずれにしろ、(16)西調査区は事業範囲の南西端、(17)調査区は南東端に位置しており、事業範囲外に遺構が広がる可能性が高い。

２．古墳時代

竪穴住居跡１基、土坑７基が確認されたが、(16)SK005と(16)SK007を併せて１軒の竪穴住居跡と仮定すると、今回の調査区内からは２軒の竪穴住居跡と５基の土坑が確認されたことになる。出土遺物はいずれも少ないが、中期の所産と考えられ時期的には比較的まとまっていること、竪穴住居跡の規模は異なるが、主軸方位がこれまで本遺跡で見つかっている当該期の竪穴住居跡と共通していることなどから、ほぼ同時期に存在したものと捉えることができる。これまでの調査では、当該時期の遺構は台地の北側縁辺で見つかっているほか、坂川に向かって北西に伸びる浅い谷の対岸（西側）でも１軒みつかっている。特に集中している箇所も認められないことから、事業範囲外を含めた当台地上での散漫な集落のあり方が想像できよう。

第4-1表　出土貝類組成表（数）

遺構	イボキサゴ	ウミニナ類	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロガイ	キセルガイ類	フジツボ	微小貝	ハマグリ		アサリ		ハイガイ		オキシジミ		シオフキ		サルボオ		オオノガイ		マガキ		ウネナシトマヤガイ		ナミマガシワガイ	
										L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
⑰SI001										4	3					4	5							1					
⑰SI002	6	13	2	9		1	23	6	53	456	487	78	74	280	329	97	95	15	11		1	2	8	244	65	78	103		
⑯SK012	369	7	1	31	1	5		1	1	292	300	128	109	130	145	72	69	18	24	3	1	16	21	35	4	10	9	6	6
⑯SK014							1	1		30	41	59	48			2	4	18	14					15	8	2	7		

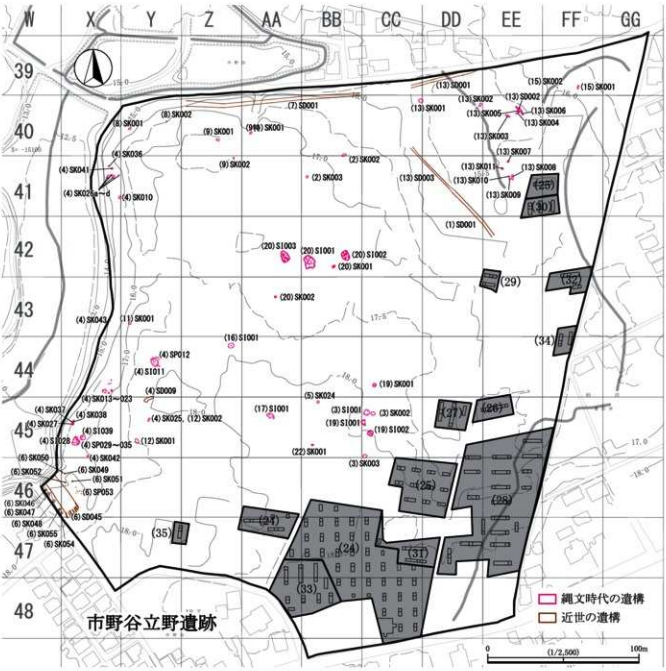
第4-2表　縄文時代石器石材別石器組成表

石材／器種	石鏃	石鏃未成品	楔形石器	削器	二次加工ある剥片	打製石斧	磨石類	敲石	石皿	砥石	側面調整礫	スタンプ形石器	礫	玉	石核	剥片・砕片	原石	計
安山岩							1		1							3		5
緑色岩								1								2		3
軽石										6								6
滑石														1				1
多孔質安山岩									1				1					2
ガラス質黒色安山岩			2													1		3
トロトロ石																	1	1
緑色凝灰岩																1		1
メノウ			1														1	2
珪質凝灰岩		13	1		1										1	103		119
黒雲母片岩																3		3
硬質頁岩				1												2		3
黒曜石	1	6													2	287		296
砂岩						1	2					1				3		7
石英斑岩								1										1
チャート	1	1													1	8		11
ホルンフェルス											1					1		2
流紋岩							1	1								3		5
石英							1											1
緑泥片岩																1		1
合計	2	20	4	1	1	1	5	3	2	6	1	1	1	1	4	418	2	473

第５章　市野谷立野遺跡

第１節　遺跡の概要（第5-1図）

今回報告する第24次～第35次調査の調査状況は第5-1図のとおりである。これまでの調査で、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代の竪穴住居跡や陥穴などが確認されているが、今回報告分の上層については、縄文土器や縄文時代石器が散在するのみで遺構が確認されなかったことから、確認調査で終了した。下層は、第24次調査で旧石器時代の礫群２か所を確認したが、それ以外には第25次調査で剥片１点を出土した



第5-1図　調査範囲と遺構の位置

以外に遺構や遺物はなく、第24次調査を除き、確認調査で終了した。

第２節　遺構と遺物

１．旧石器時代

今回の調査では、調査区の南端から１か所の遺物集中地点（第５ブロック）が検出された。南方約100ｍに小支谷があるが、かなり離れている。この付近の標高は約18.5ｍであり、地形は平坦である。

一般に本地点のような台地平坦部では、遺物の分布が希薄で、単独資料は散見されるものの遺物集中地点を形成することはほとんどない。その意味では当該資料の出土状態は異例といえる。

ただし、第５ブロック付近は、現在の地形は平坦であるが、かつては埋没谷があった可能性が高い。南の小支谷から本地点に向かう等高線の張り出しが気になるところである。

（１）第５ブロック（第5-2～9図、第5-1表、図版5-1～3）

遺物分布　小規模で遺物量も少ない。平面分布は長径約7.5m、短径約5.0mの楕円形を呈する。ただし、これはブロック外周から出土した礫（敲石？）を含めた規模であり、これを除外すれば、幅約3.5mの帯状となる。また、その密集範囲は北西側（径約４ｍ）と南東側（径約２ｍ）に二分される。この範囲には石核のほか同一母岩の剥片類が多数分布しており、北西側はガラス質黒色安山岩、南東側は流紋岩に偏っている。ちなみに下総台地の遺物集中地点は径５ｍ前後で遺物も100点以下を平均とし、小規模・零細である。その意味で本例は下総台地の典型例と捉えられる。なお、接合資料は特に遺物分布が濃密な北西側で４例確認された。

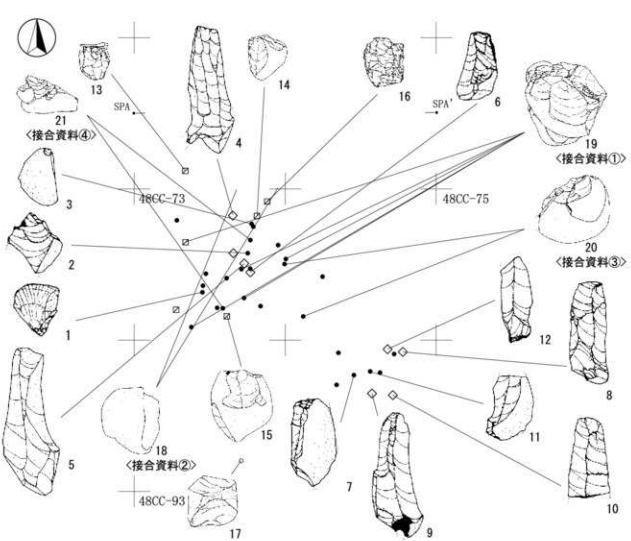
出土層位　遺物はソフトローム（立川ローム Ⅲ層）中から出土した。遺物の高低差は約0.3ｍで、比較的コンパクトである。

器　　種　遺物は42点出土した。内訳は石刃８点、剥片27点、石核６点、及び礫片１点となっている（第5-1表）。

第5-1表　第５ブロック石器組成表

石材	母岩別資料数		石刃	剥片	石核	礫	計
	識別母岩（種）	単独母岩（内数）					
ガラス質黒色安山岩	2			14	3		17
流紋岩	2	1	2	5	1		8
チャート	2	2	1	1	1		3
トロトロ石	1	1	3	3	1		7
黒色頁岩	2	2	1	1			2
凝灰岩	1	1		1			1
砂岩	1	1				1	1
珪質頁岩	1	1	1				1
ホルンフェルス				2			2
合計	12	9	8	27	6	1	42

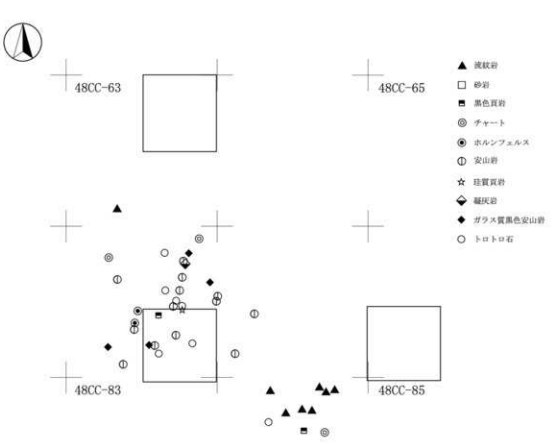
第5-4図１～３・７・11は剥片である。１～３はガラス質黒色安山岩製であり、接合資料①（19）・③（20）・④（21）と同一母岩である。７・11は流紋岩製で、同一母岩の資料である。このうち11については、石刃の可能性もあるが欠損のため定かではない。４～６・８～10・12は石刃である。８を除き、背面側剥離面の打撃が一方向であることから、多くの場合、単設打面の石核から生産されたことがわかる。このことは13・14などの石核の特徴とよく合致する。第5-5図13～15・第5-6図16は石核である。13・14は円礫を素材とした調整打面の資料で、剥離は一方向である。13は単独母岩。14についてもその可能性があるが明確ではない。15はトロトロ石の円礫を用いた石核である。単独母岩であり、剥片生産はさほど進行していない。このことから試し割りの段階で使用を断念した可能性も浮上する。16は角礫状のチャートを原材とした石核である。約90°の打面転移が行われ、横長剥片が複数生産されている。17は断片的なため、ここでは便宜的に礫としたが、敲石の破片の可能性もある。砂岩製で被熱により赤く変色している。18と第5-7～９図19～21は接合資料である。18はガラス質黒色安山



第5-2図 第５ブロック器種別分布図

岩の剥片（18a）と石核（18b）の接合例（接合資料②）である。ただし、通常の打撃ではなく、被熱による不規則な割れであることに留意しなければならない。19～21は同一母岩（母岩別資料12）の接合例で、いずれも剥片生産に関わる資料である。19（接合資料①）は石核（19e）に剥片４点（19a・19b・19c・19d）が接合している。おおむね拳大の円礫を素材とした打面転移が頻繁な石核から横長剥片が多数生産されている。20（接合資料③）と21（接合資料④）は横長剥片各２点（20a・20b、21a・21ｂ）の接合例である。いずれも背面側に自然面を大きく残すことから、剥片生産の初期段階の資料と捉えられる。

石　　材　石材はガラス質黒色安山岩17点、流紋岩８点、トロトロ石７点、チャート３点、黒色頁岩・ホルンフェルス各２点、凝灰岩・砂岩・珪質頁岩各１点で構成されている。母岩別資料については、ガラス質黒色安山岩・流紋岩・チャート・黒色頁岩が２種、そのほかは各１種識別できた。このうち黒色頁岩、

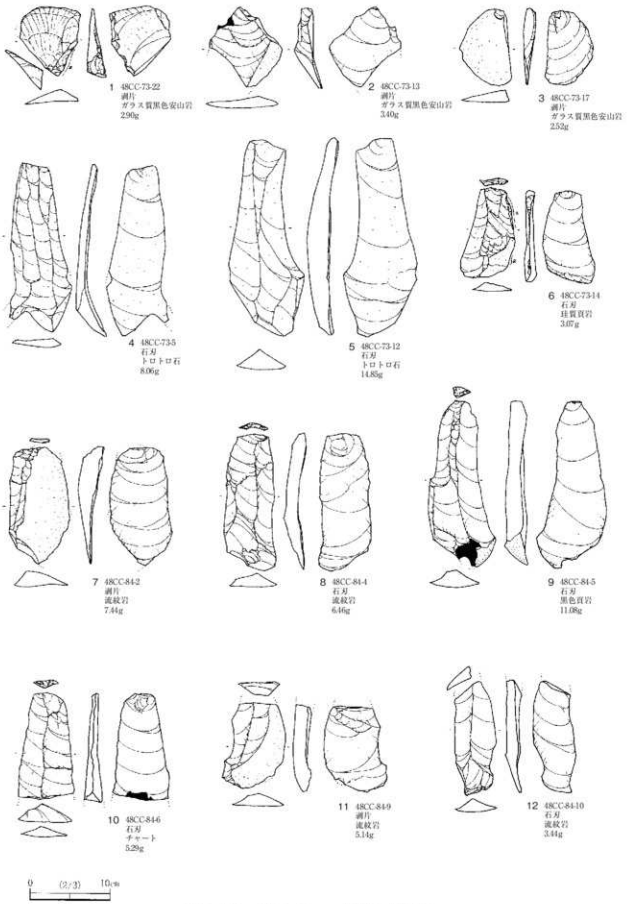


第5-3図 第５ブロック石材別分布図

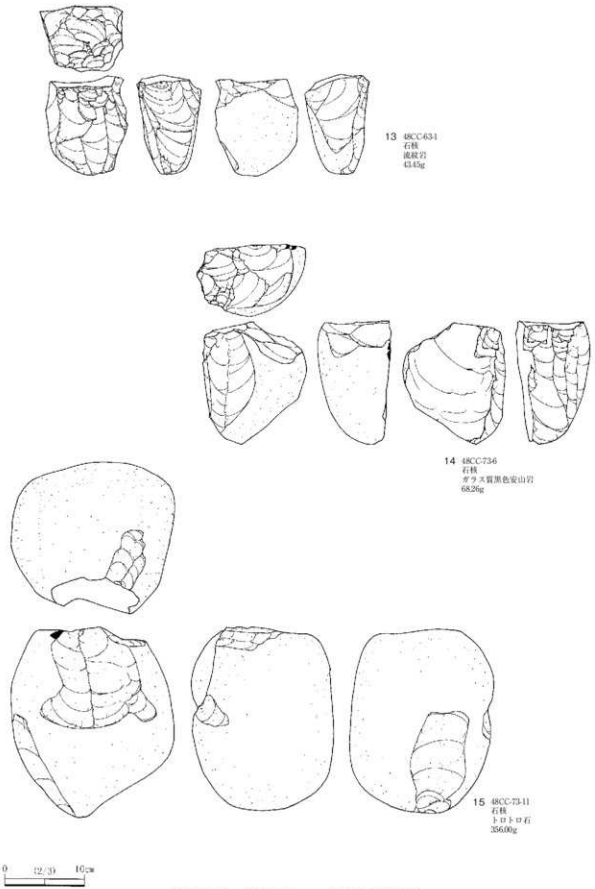
凝灰岩、砂岩、及び珪質頁岩は単独資料で１つの母岩を構成している。敲石の用材と推定される砂岩を除き、いずれも搬入石刃の用材であろうという点が興味深い。

２．縄文時代（第5-10･11図、図版5-4･5）

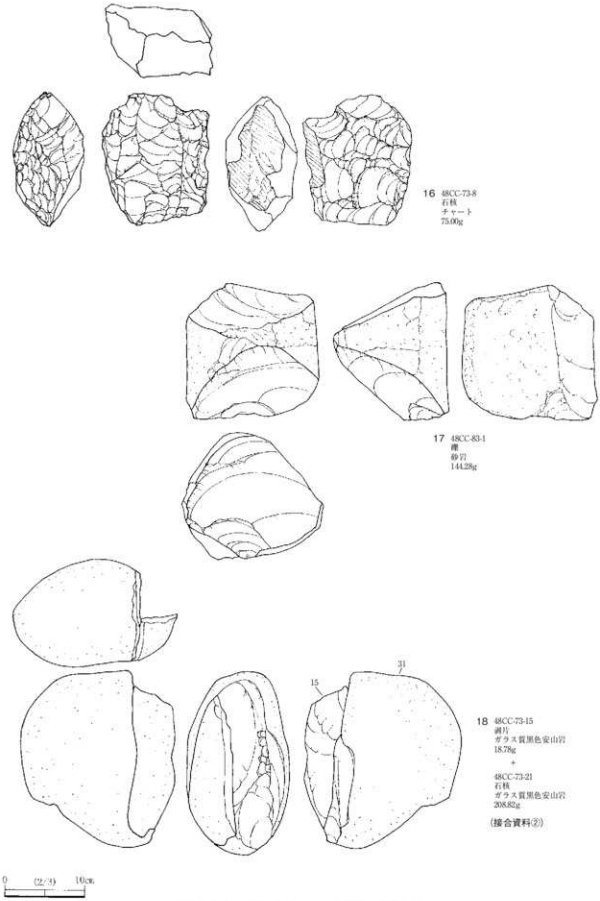
確認トレンチ内出土遺物を遺構外出土遺物として報告する。１～３は早期田戸下層式である。４～39は前期黒浜式である。４～33は縄文あるいは撚糸文のみを施すもので、４～７は無節Ｌ、８は無節Ｒ、９～27・32は単節LR、17は単節LR＋RL、18～27・32は単節RL、28～30は附加条１種、31は撚糸文、33は結節文である。34・35は半截竹管を用いるもので、34は平行沈線、35は山形あるいは波状沈線を施す。36～39は底部で、底径（復元）は、36が8.2cm、37が6.4cm、38が8.0cm、39が10.4cmである。40･41は前期興津式で、40は凸凹文、41は棒状工具による列点文を施す。42～54は中期加曽利Ｅ式で、42～45・52・53は縄文のみを施すもの、46・50・51は沈線を伴う無文帯で区画するもの、47は沈線で文様を描くもの、48・49は隆帯で区画するものである。54は底径5.0cmの小型の無文の鉢で、全面に丁寧なミガキが施される。55～71は後期で、55・56は後期称名寺式、57・59～70は後期加曽利Ｂ式、58は堀之内１式、71は安行式であろうか。



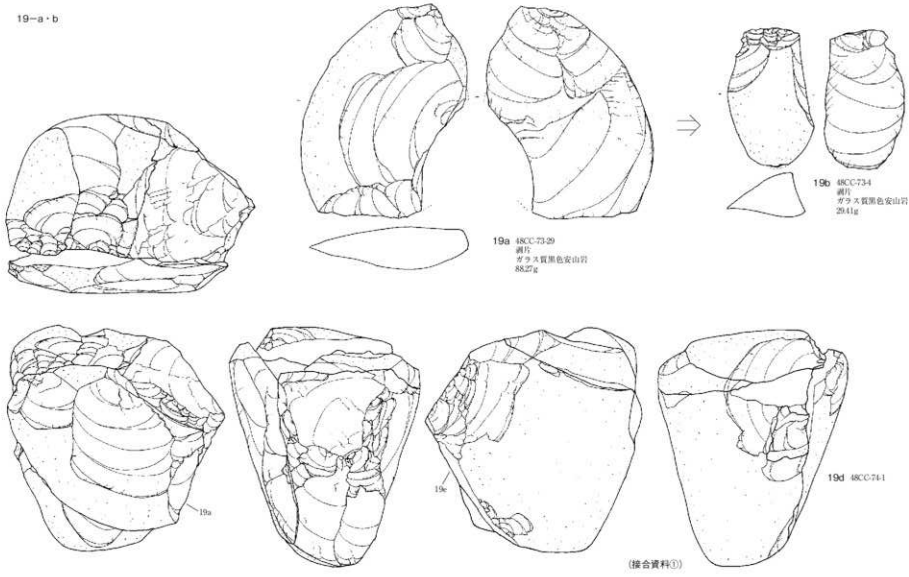
第5-4図　第５ブロック出土石器①



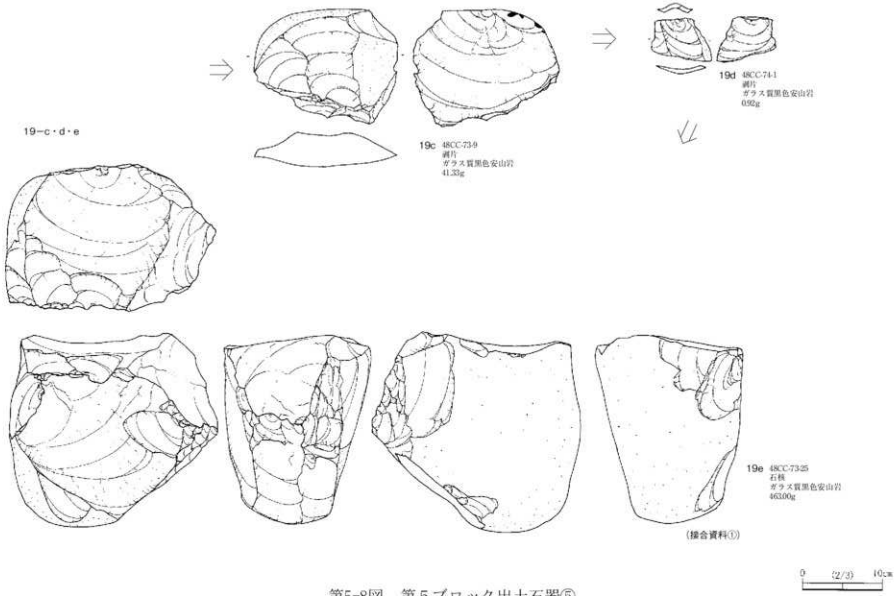
第5-5図　第５ブロック出土石器②



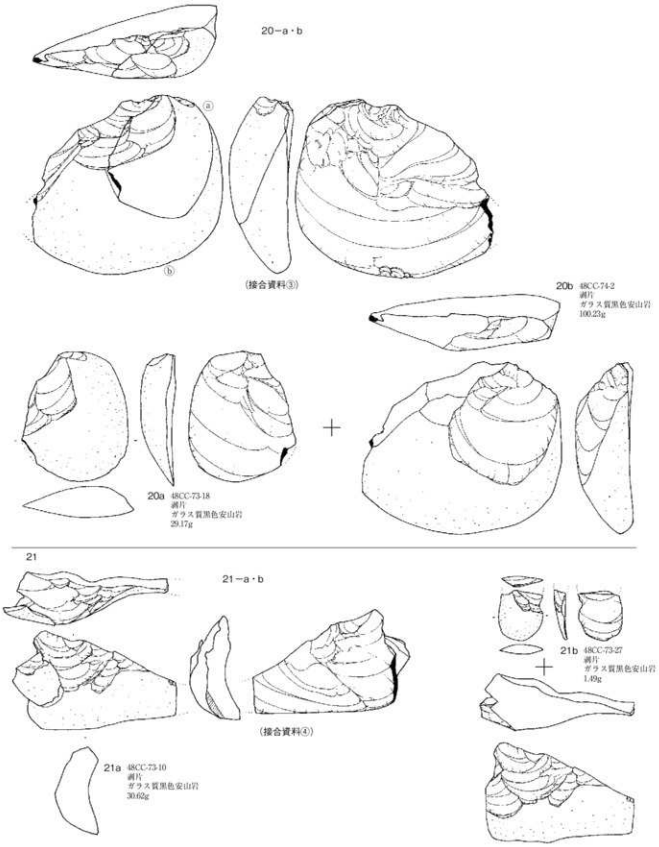
第5-6図　第５ブロック出土石器③



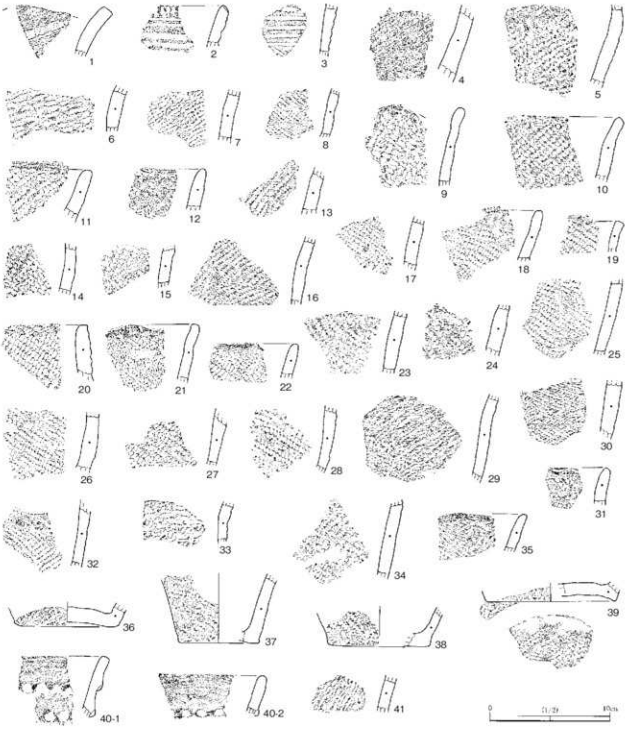
第5-7図　第５ブロック出土石器④



第5-8図　第５ブロック出土石器⑤



第5-9図　第５ブロック出土石器⑥

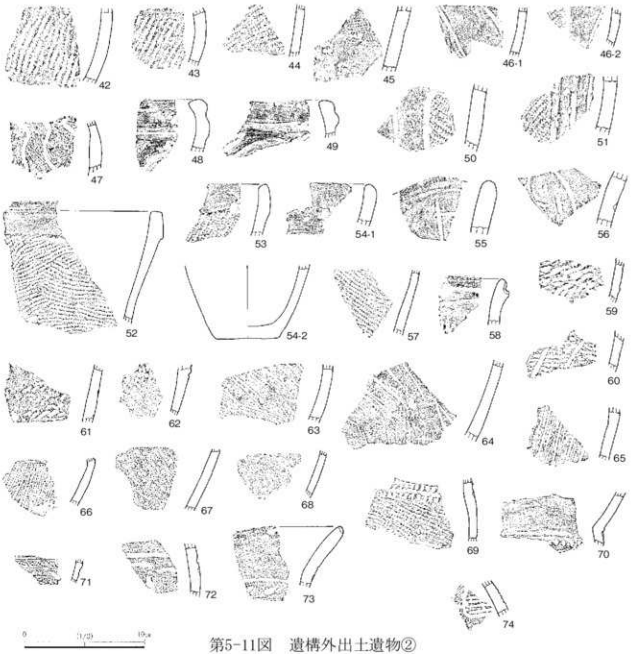


第5-10図　遺構外出土遺物①

72・73は沈線区画内に列点文を充填するもので、晩期安行３ｃ式であろう。

３．弥生時代（第5-11図74、図版5-5）

確認トレンチ内から小破片が１点出土した。74は中期の壺型土器の胴部片で、粒の細かい単節RLを地文とし、櫛描による疑似流水文が描かれる。胎土は白っぽく、砂を多く含む特徴的なもので、焼成は良好



第5-11図　遺構外出土遺物②

である。器表は赤褐色だが、赤彩されているか否かははっきりしなかった。

第3節　まとめ

1．旧石器時代

市野谷立野遺跡では、立川ロームⅢ層中から1ブロックと計42点の遺物が出土した。これらの石器群は基本的に以下の内容によって特徴づけられる。

・石器群は石刃、剥片及び石核等で構成され、利器がない。

・技術基盤は石刃・縦長剥片生産技術を基調としている。

・石器石材のなかで最も多用されているのはガラス質黒色安山岩である。これに北関東系の流紋岩、トロトロ石、黒色頁岩、及びチャート等が加わる。このうち黒色頁岩は群馬県利根川、流紋岩は栃木県

鬼怒川、トロトロ石は茨城県久慈川でそれぞれ採取が可能であり、全体的には北関東からの石材の流入が想定される。

これらの資料は、示準石器となる利器に欠けるが、出土層準と石刃技法を基調とした石器群の特徴からおおよそ砂川期（立川ロームⅣ層上・中部）に対比されよう。

注

1）橋本勝雄・平井真紀子　2016　『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８　流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡』　公益財団法人　千葉県教育振興財団

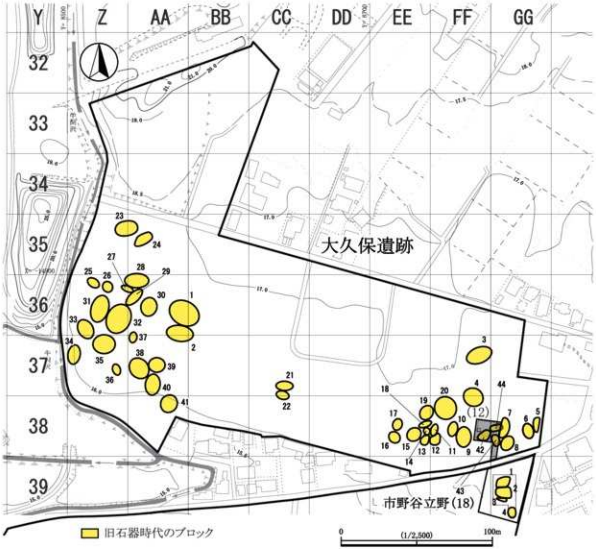
２．縄文時代以降

今回の調査範囲では縄文時代以降の遺構は確認されず、遺物も散漫な状況であった。遺物の時期は縄文時代早期～晩期に及ぶが、最も多いのが前期黒浜式で、中期加曽利E式がこれに次ぐという状況は、本遺跡の他の調査区や今回報告する他の遺跡とも同様であり、当地域の一般的な様相を示しているのかもしれない。一方、これまで当該地区では弥生時代の遺構・遺物は確認されていなかったが、今回初めて遺物が確認された。ただ、発見された土器は断片で、１点のみであることから、本遺跡及びその周辺に当該期の遺構が存在したかどうかについては、現段階では判断することはできない。

第６章　大久保遺跡

第１節　遺跡の概要（第6-1図）

今回報告するのは第12次調査の下層分で、調査状況は第6-1図のとおりである。なお、上層については前回報告しているので、こちらを参照していただきたい。本遺跡では、別の事業による調査地を含めたこれまでの調査で、ほぼ全域にわたって旧石器時代の遺物集中地点が多数確認されており、今回の調査範囲でもⅢ層～Ⅳ層を中心とする遺物集中地点が５か所確認された。



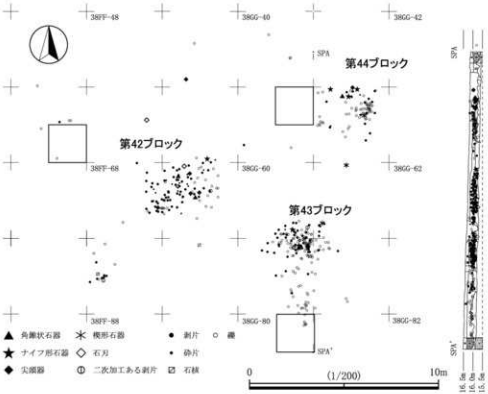
第6-1図　調査範囲と遺構の位置

第２節　遺構と遺物

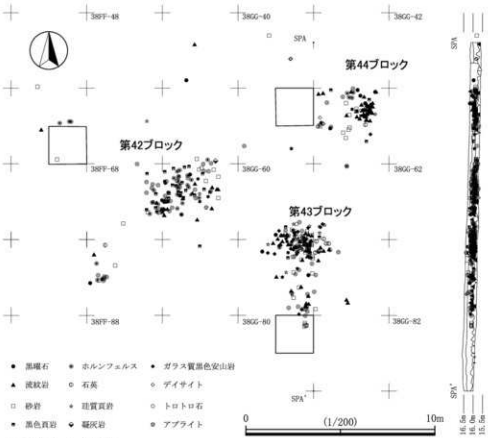
１．旧石器時代

今回の調査地点は南の支谷に面する台地縁辺部（標高16m～17m）に立地する。この支谷は、現在では埋没谷となっており旧状をとどめていないが、往時は台地西側の坂川源流部に向かう小規模な水の流れが

器種別分布



石材別分布



第6-2図　出土石器分布図

あったものと推定される。この付近では、すでに平成９年度～平成17年度に調査が行われ、その結果、立川ローム第Ⅳ層下部から18か所の遺物集中地点（第３～第20ブロック）と総計8,468点の遺物が発見された。このような周辺の調査状況から、今回の地点については調査前段階で遺物集中地点の検出が確実視されていた。調査の結果、新たに３か所（第42～第44ブロック）の遺物集中地点と遺物433点が検出され、過去の調査成果を合わせれば遺物集中地点は21か所、遺物総量は8,901点ということになる。これらのブロック群については、３ｍ～５ｍの距離を隔てて近接しており、石器群の類似性と、ブロック間の接合関係の多寡から、同一時期に形成されたものと推定される。（第6-2図、第6-1表）

ここでは以上のブロック間の有機的関係を考慮して、接合資料及び母岩別資料については、ブロック単位ではなく、ブロック全体の通し番号とした。

第6-1表　旧石器時代石器組成表（全体）

石材	母岩別資料数		角錐状石器	尖頭器	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工ある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	礫	計
	識別母岩（種）	単独母岩（内数）											
黒色頁岩	7	5			5			1	37	3	2		48
チャート	13	5	4	2		1	2		32	12	1	29	83
流紋岩	21	7					1		6	2	1	83	93
ガラス質黒色安山岩	1	0				1	1		10	1			13
黒曜石	4	3		2	1	1	1		13	3	1		22
ホルンフェルス	8	3			2				22	9	2	2	37
砂岩	18	7							1			64	65
凝灰岩	0	0							1	1			2
石英斑岩	10	7										30	30
珪質頁岩	5	3		2				1	18	1			22
トロトロ石	1	1							1				1
石英	2	1							1			9	10
デイサイト	3	1										6	6
アプライト	1	1										1	1
合計	94	44	4	6	8	3	5	2	142	32	7	224	433

（1）各ブロックの解説

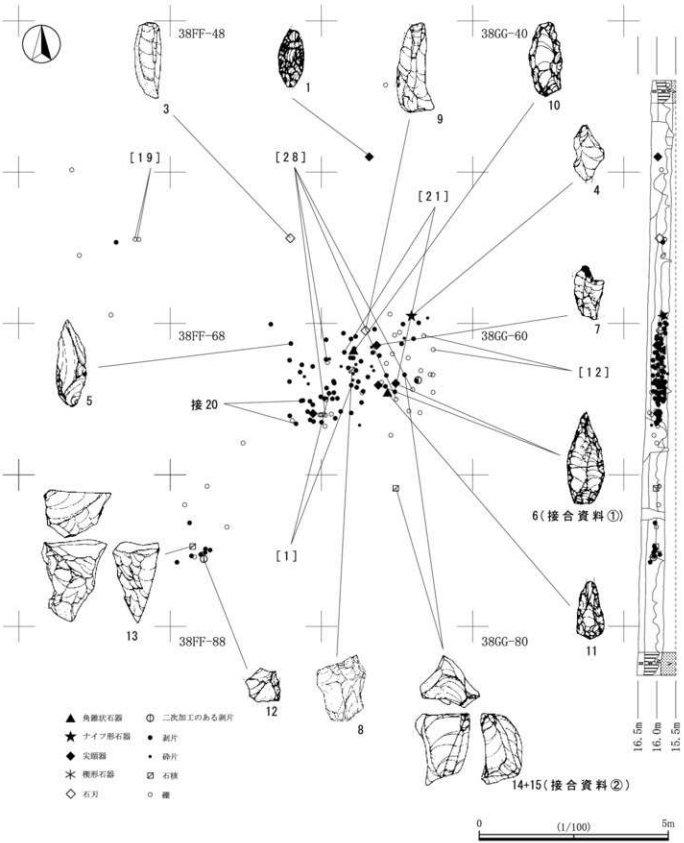
第42ブロック（第6-3～6図、第6-2表、図版6-1･2）

遺物分布　長径約11ｍ、短径約９ｍの範囲で、145点出土した。ただし、このうち約８割が中央部（径約３ｍ×４ｍ）に集中している。器種や礫の分布の偏りは特にみられない。接合資料は密集部で２例確認できた。

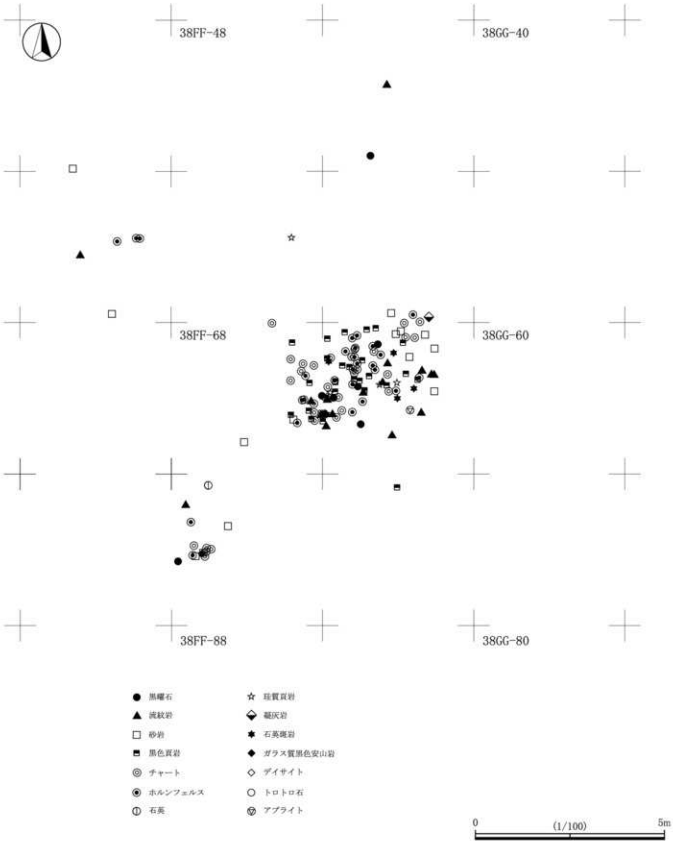
出土層位　立川ロームⅢ層・Ⅳ層から出土した。遺物の高低差は約0.4ｍである。

器　　種　石器は尖頭器５点、角錐状石器・ナイフ形石器・二次加工ある剥片・石刃各２点、剥片70点、砕片17点、石核３点で構成され、このほかに礫が42点出土した。このうち両面加工の小型尖頭器１点（第6-6図１）と石刃２点（３・９）は上層の文化層（砂川期）の混在と考えられるが、全ての資料について明確な層位差を見いだせないため、ここでは便宜的に本ブロックに含め報告する。

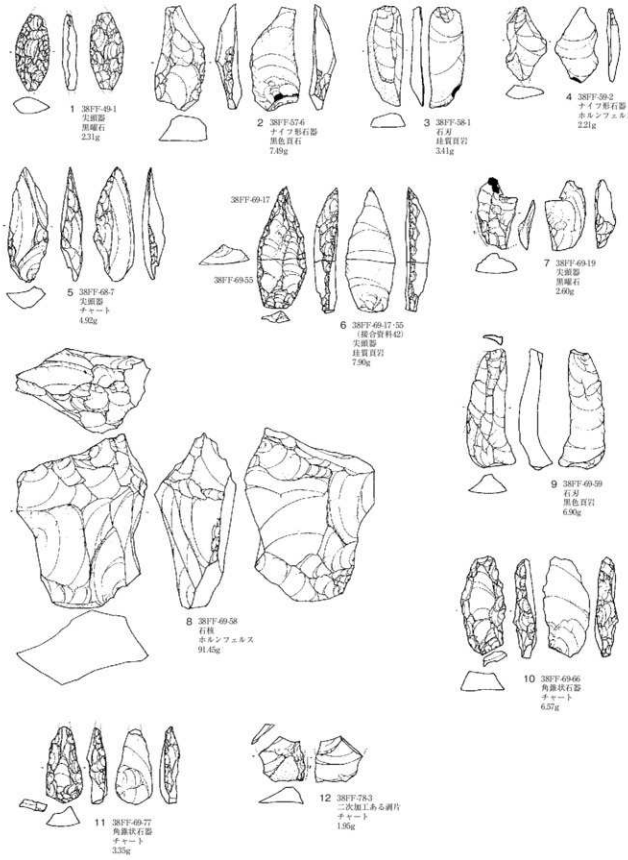
１・５～７は尖頭器である。１は両面加工であり表裏とも比較的平坦な剥離面で覆われている。先の報告の第28ブロックから出土したチャート製の資料に類似している。５～７は周辺加工の尖頭器である。６は接合資料、７は尖頭器の基部の破片である。１・７は黒曜石、５・６は珪質頁岩を用材としている。黒曜石は漆黒色で斑晶を多く含むことから高原山産と推定される。２・４は横長剥片を素材としたナイフ形石器である。横長剥片を素材としており、２は基部二側縁、４は部分加工である。２は黒色頁岩、４は風



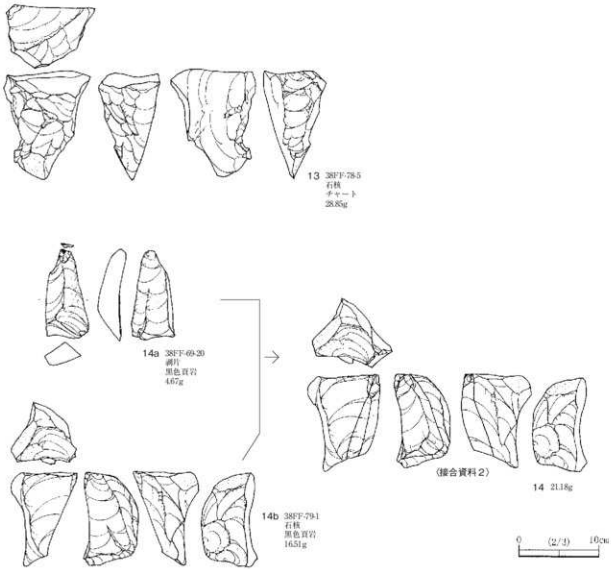
第6-3図　第42ブロック器種別分布図



第6-4図　第42ブロック石材別分布図



第6-5図　第42ブロック出土石器①



第6-6図　第42ブロック出土石器②

化が顕著なホルンフェルス製である。10・11は角錐状石器である。背面中央部に素材剥片（横長剥片）の第一次剥離面を残しており、断面は台形を呈する。二次加工は急角度である。５～７のような尖頭器と断面三角形の典型的な角錐状石器との中間的な形態といえる。石材はいずれもチャートである。３・９は石刃である。３は珪質頁岩製であり、背面側左側縁に自然面を残している。９は黒色頁岩製であり、背面側左側縁の一部が欠損している。器面に部分的に残された自然面の状態から、ともに円礫を素材とした石刃石核から生産されたことが理解できる。12はチャート製の二次加工ある剥片である。破片のため本来の器種が不明であり、残存形態からナイフ形石器または尖頭器のいずれかの可能性が高いが定かではない。13は石核である。８はホルンフェルス製で、求心的な剥離により横長剥片を連続的に生産している。第6-7図13は剥片素材のチャート製石核であり、長軸方向の剥離面が数条みとめられる。14は剥片(a)と石核(b)の接合資料である。14aはやや寸詰まりであるが、小型の石刃との言い換えも可能である。14bは上下両端からの打撃痕がある両設打面の石核である。かなり小型化しており、究極まで使い尽くしている。自然面のあり方から円礫（黒色頁岩）を用いたことは明らかである。

石　　材　石材は、チャート35点、黒色頁岩29点、ホルンフェルス26点、流紋岩19点、砂岩16点、黒曜石７点、石英斑岩５点、珪質頁岩４点、ガラス質黒色安山岩・凝灰岩・石英・アプライト各１点で構成されている。黒色頁岩・チャート・ガラス質黒色安山岩・黒曜石・凝灰岩・珪質頁岩が剥片石器、流紋岩の大半と砂岩・石英斑岩・石英・アプライトのすべてが礫専用の石材となっている。

第43ブロック（第6-7～9図、第6-3表、図版6-1･2）

遺物分布　長径約5.5m、短径約4.0mの小範囲で、191点出土した。本ブロックの性格は基本的に礫群であり、礫の分布がブロック全体に及ぶのに対して、石器は北側に偏っている。

出土層位　遺物は立川ロームⅢ層・Ⅳ層から出土した。遺物の高低差は約0.4mである。

器　　種　石器は、角錐状石器１点、ナイフ形石器３点、楔形石器１点、二次加工ある剥片３点、剥片50点、砕片10点、及び石核３点で構成され、これに礫120点が加わる。

１は右側縁に二次加工のみられる剥片である。破損品であり、本来は何らかの製品の可能性が高い。２・３・６はナイフ形石器である。いずれも素材は縦長剥片で、石材は黒色頁岩である。２は先端部の欠損資料であり、基部に部分加工がみられる。３も部分加工の資料である。完形品で、背面左上部側縁に刃潰し加工がみられる。６は基部が欠損した二側縁加工のナイフ形石器である。４は楔形石器である。裏面の上下両端に両極加撃の痕跡をとどめる。素材は剥片、石材はガラス質黒色安山岩である。５は角錐状石器である。縦長剥片を素材として、下端部を除いた二側縁に急角度な周辺加工が施されている。先端部が若干欠損している。石材はチャートである。７は縦長剥片を素材としており、背面の左側縁に二次加工がみられる。削器ないしはナイフ形石器の製作途上の可能性もあるが、明確ではないため、ここでは便宜的に二次加工ある剥片とした。石材は流紋岩である。８は小型の石核である。平坦打面であり、側面に寸詰まりの縦長剥片を剥離した痕跡をとどめる。ほぼ使い尽くされており、残核といっても差し支えない。石材は黒曜石である。９・10は接合資料である。９は横長剥片３点（９a・９b・９）の接合例で、石材は流紋岩である。ほぼ打面を固定し、石核から横長剥片を連続的に生産する状況が看取される。10は二次加工ある剥片（10a）と剥片２点（10b、10）の接合例である。10aは二次加工中に生じた偶発的な事故の所産であり、接合によってそのこと（縦折れ）が確認された。上端部に二次加工がみられるが、部分的であり、定型的な石器とは言いがたい。石材はガラス質黒色安山岩である。

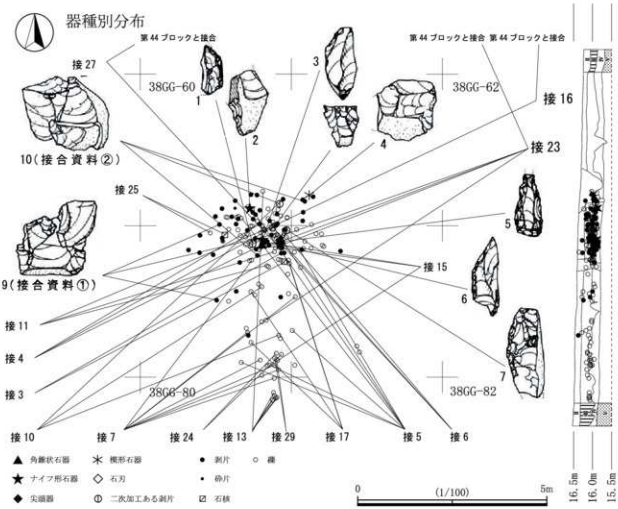
石　　材　流紋岩41点、砂岩37点、チャート35点、珪質頁岩17点、石英斑岩15点、ガラス質黒色安山岩・黒色頁岩各11点、黒曜石・石英各８点、ホルンフェルス６点、凝灰岩・トロトロ石各１点となっている。石器はガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、及び黒曜石を、礫は流紋岩、砂岩、石英斑岩、及びチャートを主体としている。

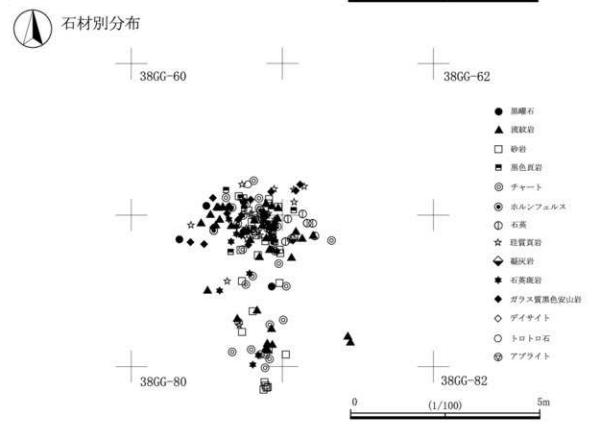
第44ブロック（第6-10･11図、第6-4表、図版6-1･2）

遺物分布　94点出土した。径約3.5mの小範囲で、非常にコンパクトなブロックである。本ブロックの性格も他と同様に基本的に礫群であり、その中に石器が共存する状況が看取される。

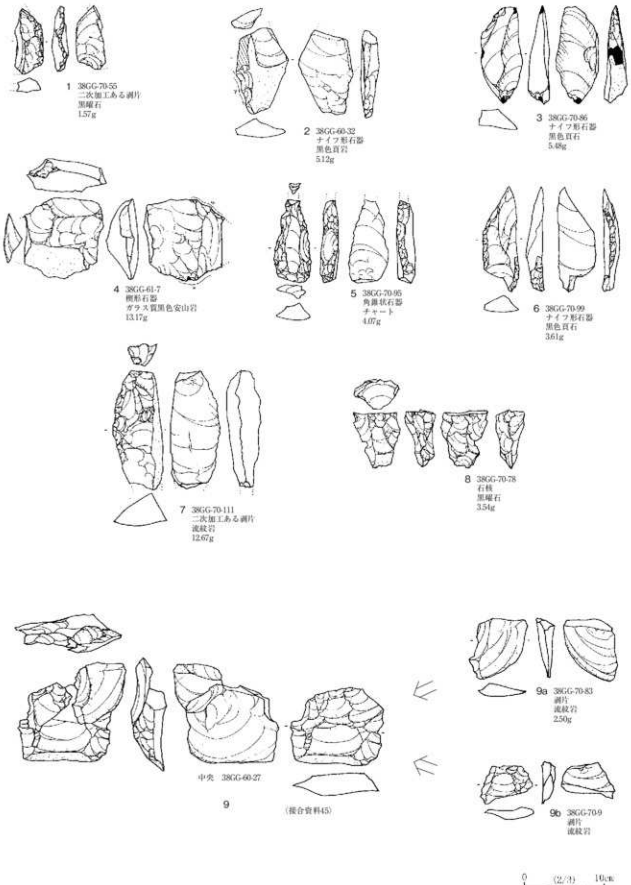
出土層位　立川ロームⅢ層・Ⅳ層から出土した。高低差は約0.5mである。

器　　種　石器34点と礫60点が出土した。石器は、角錐状石器・尖頭器各１点、ナイフ形石器３点、楔形石器２点、剥片21点、砕片５点、及び石核１点で構成される。１・４・７はナイフ形石器である。１は縦長剥片を素材とした二側縁加工の資料である。完形品で、石材は黒色頁岩である。４は断片的な資料であり素材は不明である。左側縁にナイフ形石器特有の急角度な調整加工がみられる。石材は斑晶に富む漆黒

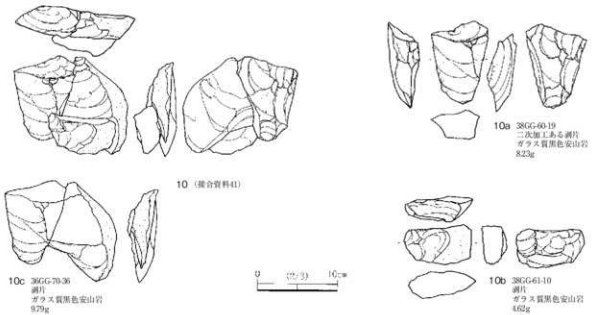




第6-7図　第43ブロック器種・石材別分布図



第6-8図　第43ブロック出土石器①



第6-9図　第43ブロック出土石器②

色の高原山産黒曜石である。7は風化が顕著なホルンフェルス製である。このため素材・調整加工については詳らかではない。ここでは縦長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器というにとどめておく。2は角錐状石器（2a）と調整剥片（2b）との接合例である。部分的であるため詳細は明らかではないが、剥離が進み形態も非対称形を呈することから、製作時というよりも再加工時の資料の可能性が高い。石材はチャートである。3はチャート製の断片的な資料である。ここでは尖頭器としたが、急角度な調整加工を重視すればナイフ形石器の可能性も考えられる。5・6は楔形石器である。いずれも上下両端に両極打法による刃潰れがみられる。5は高原山産黒曜石、6はチャートを用材としている。8は黒色頁岩製の石核である。一部に礫面をとどめ、円礫を素材としていたことが理解される。平坦な節理面を打面として横長剥片が生産されている。

石　　材　流紋岩33点、チャート12点、砂岩11点、石英斑岩9点、黒色頁岩8点、黒曜石7点、デイサイト6点、ホルンフェルス5点、及びガラス質黒色安山岩・珪質頁岩・石英各1点となっている。石器はガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、チャート、及び黒曜石を、これに対して礫は流紋岩、砂岩、石英斑岩、及びデイサイトを主体としている。

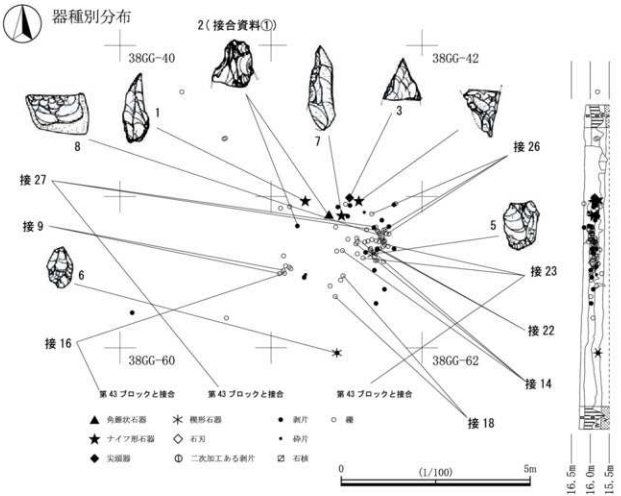
（2）母岩別資料と接合資料

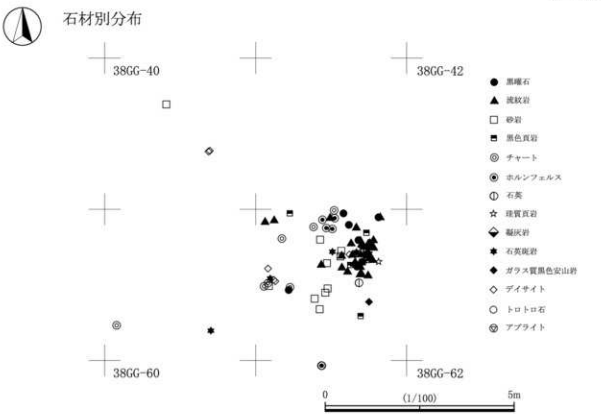
ア）母岩別資料

94種（石器37、礫57）を識別した。

このうち、単独母岩は44個体（石器23、礫21）である。このうち器種別内訳は、剥片14、石核1、石刃1、角錐状石器3、尖頭器1、楔形石器1、ナイフ形石器1、二次加工ある剥片1である。単独母岩に石器の比率が高く、石器の中でも利器がその多くを占めることは過去の事例と矛盾しない。

ブロック間の母岩別資料の共有関係については、母岩別資料33（石器：第42ブロック15点、第44ブロック1点）、母岩別資料34（石器：第42ブロック6点、第44ブロック1点）、母岩別資料45（石器：第43ブロック3点、第44ブロック4点）、母岩別資料59（礫：第43ブロック1点、第44ブロック1点）、母岩別資料





第6-10図　第44ブロック器種・石材別分布図

第6-11図　第44ブロック出土石器

60（礫：第42ブロック２点、第43ブロック１点）、及び母岩別資料64（礫：第43ブロック１点、第44ブロック６点）の６母岩が識別できた。

イ）接合資料

46個体を識別した。内訳は、石器11個体、礫35個である。ブロック単位では第42ブロックが13個体、第43ブロックが14個体、第44ブロックが22個体となっている。合算すると49個体となるが、この中にはブロ

ック間相互の接合資料が3個体含まれている。その内訳は接合資料16（礫:母岩別資料59、第43ブロック・第44ブロック）、接合資料23（礫：母岩別資料67、第43ブロック・第44ブロック）、及び接合資料27（礫：母岩別資料71、第43ブロック・第44ブロック）となっている。

第6-2表　第42ブロック石器組成表

石　材	角錐状石器	尖頭器	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工ある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	礫	計
黒色頁岩			1			1	23	3	1		29
チャート	2	1			2		23	6	1		35
流紋岩							1	1		17	19
ガラス質黒色安山岩							1				1
黒曜石		2					4	1			7
ホルンフェルス			1				17	5	1	2	26
砂岩										16	16
凝灰岩								1			1
石英斑岩										5	5
珪質頁岩		2				1	1				4
トロトロ石											
石英										1	1
デイサイト											
アプライト										1	1
合　計	2	5	2		2	2	70	17	3	42	145

第6-3表　第43ブロック石器組成表

石　材	角錐状石器	尖頭器	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工ある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	礫	計
黒色頁岩			3				8				11
チャート	1						3	4		27	35
流紋岩					1		4	1	1	34	41
ガラス質黒色安山岩				1	1		8	1			11
黒曜石					1		6		1		8
ホルンフェルス							2	3	1		6
砂岩							1			36	37
凝灰岩							1				1
石英斑岩										15	15
珪質頁岩							16	1			17
トロトロ石							1				1
石英										8	8
デイサイト											
アプライト											
合　計	1		3	1	3		50	10	3	120	191

第6-4表　第44ブロック石器組成表

石　材	角錐状石器	尖頭器	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工ある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	礫	計
黒色頁岩			1				6		1		8
チャート	1	1		1			5	2		2	12
流紋岩							1			32	33
ガラス質黒色安山岩							1				1
黒曜石			1	1			3	2			7
ホルンフェルス			1				3	1			5
砂岩										11	11
凝灰岩											
石英斑岩										9	9
珪質頁岩							1				1
トロトロ石											
石英							1				1
デイサイト										6	6
アプライト											
合　計	1	1	3	2			21	5	1	60	94

第３節　まとめ

１．旧石器時代

大久保遺跡では、立川ロームⅢ層・Ⅳ層から３つのブロックと計433点の遺物が検出された。これらの石器群は基本的に以下の内容によって特徴づけられる。

・文化層は２枚あり、第１文化層（立川ロームⅣ層上･中部段階）と第２文化層（立川ロームⅣ層下部･Ⅴ層段階）に区分される。ただし、両者は出土層位が接近しているために視覚的に分離することは困難である。

・第１文化層は、石器群の特徴から第42ブロックから出土した小型･扁平の両面加工尖頭器と石刃２点（母岩別資料14・34）が確実視されるが、それ以外は不明である。この種の尖頭器と石刃技法の存在が特徴的である。ちなみに、先の報文の第２b文化層28ブロックでも同種の小型尖頭器が出土している。

・第２文化層は、尖頭器・角錐状石器・ナイフ形石器を主体とした石器群に礫群が加わっている。石器群の技術基盤は横長剥片生産技術を主体としている。

・第２文化層の３か所のブロックの基本的な性格は礫群であり、礫の数量は遺物全体の約50％を占める。

・石材は文化層全体で13種を数える。その数量の内訳は流紋岩93、チャート83、砂岩65、黒色頁岩48、ホルンフェルス37、黒曜石・珪質頁岩各22、ガラス質黒色安山岩13、石英10、デイサイト６、凝灰岩２、及びトロトロ石・アプライト各１となっている。総じて、流紋岩、トロトロ石、黒色頁岩、及びチャート等の北関東系の卓越が指摘できる。

・調査区全体で、母岩別資料は94種（石器37、礫57）、接合資料は46個体を識別したが、母岩別資料の６種、接合資料については３個体認められたにすぎず、各ブロック相互の有機的な関係は希薄と言わざるを得ない。

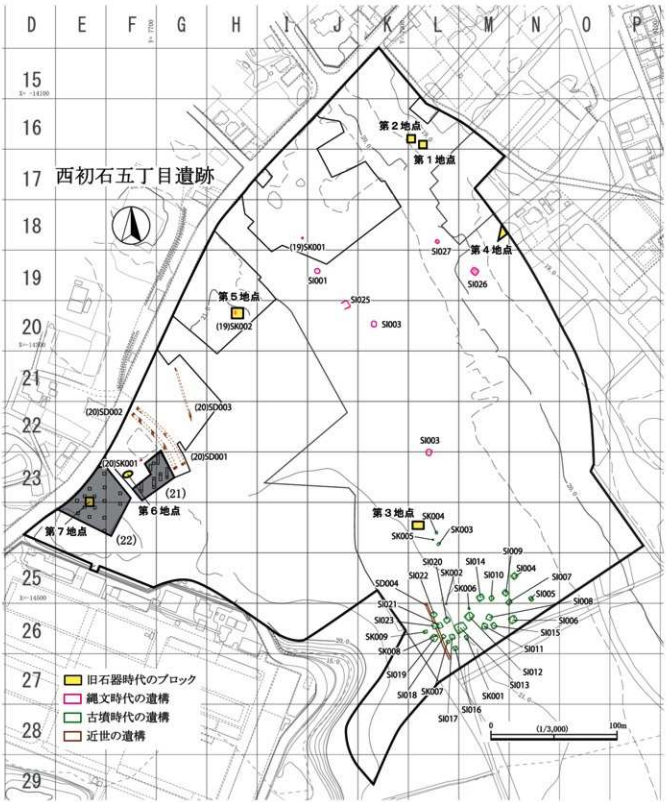
以上の石器群の諸特徴は、大枠として下総台地におけるこれまでの旧石器時代遺跡の調査成果と矛盾しない。

注

1）新田浩三・落合章雄　2011　『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書５　流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡』　財団法人千葉県教育振興財団

2）橋本勝雄・平井真紀子　2016　『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８　流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡』　公益財団法人千葉県教育振興財団

第７章　西初石五丁目遺跡



第7-1図　調査範囲と遺構の位置

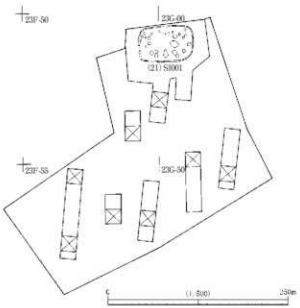
第１節　遺跡の概要（第7-1図）

今回報告するのは第21・22次調査であり、調査状況は第7-1図のとおりである。本遺跡では、これまでの調査で、旧石器時代の遺物集中地点や縄文時代の竪穴住居跡・土坑、近世の野馬土手や野馬堀、溝状遺構、シシ穴などが検出されている。今回の調査範囲では、第21次調査区で縄文時代の竪穴住居跡を検出したほか、22次調査区のⅢ層上面で礫群が確認された。

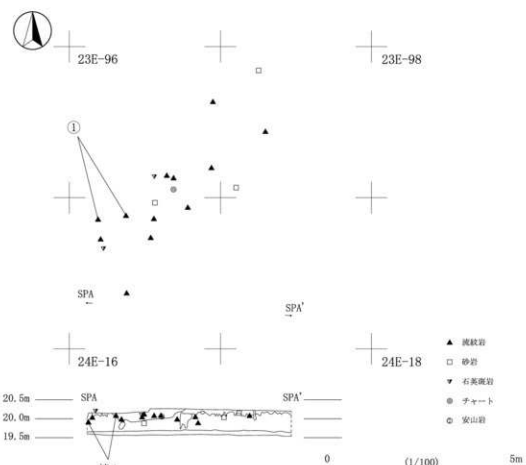
第２節　遺構と遺物

１．旧石器時代

旧石器時代の調査では遺物集中地点が１か所検出された。この付近は



第7-2図　遺構配置図



第7-3図　第７地点石材別分布図

遺跡の南端部に近く南の谷津に臨む台地縁辺部に位置する。標高は約20.5m～21mである。

第７地点（第7-3図、第7-1表）

遺物分布　長径6.55m、短径約2.0mの細長い楕円形を呈する。南半部にやや密集した箇所があるものの、分布密度はほぼ均一である。

出土層位　立川ロームのソフトロームとハードロームの境界付近に密集する。遺物の最大レベル差は約0.5mである。

遺　　物　礫が21点出土した。被熱による破砕が顕著であるが、原形は概ね拳大の礫と推定される。

石　　材　流紋岩12点、砂岩４点、チャート２点、石英斑岩２点及び安山岩１点となっている。このような流紋岩優勢の石材構成は、その供給源が鬼怒川水系にあることを示している。

母岩別資料と接合資料　いずれも被熱による変質が著しく、明確な母岩分類に堪えなかった。接合資料は１例（接合資料①）にとどまるが、このことは逆に、母岩別資料がいかに多岐にわたるかを示している。

第7-1表　下層第７地点出土遺物一覧

整理番号	調査次数	グリッド	遺物番号	器種	石材	重量(g)	接合No.	備考
1	22	E23-96	1	礫	チャート	23.25		
2	22	E23-96	2	礫	石英斑岩	39.61		
3	22	E23-96	3	礫	流紋岩	69.98		
4	22	E23-96	4	礫	流紋岩	42.46		
5	22	E23-96	5	礫	流紋岩	9.95		
6	22	E23-96	6	礫	チャート	13.23		
7	22	E23-96	7	礫	流紋岩	17.12		
8	22	E23-97	2	礫	砂岩	25.31		
9	22	E23-97	3	礫	流紋岩	61.52		
10	22	E23-97	4	礫	砂岩	76.59		
11	22	E24-06	2	礫	流紋岩	34.82		
12	22	E24-06	3	礫	流紋岩	2.31		
13	22	E24-06	4	礫	流紋岩	24.82		2点
14	22	E24-06	5	礫	流紋岩	29.86	①	
15	22	E24-06	6	礫	流紋岩	43.18	①	
16	22	E24-06	7	礫	流紋岩	16.03		
17	22	E24-06	8	礫	石英斑岩	14.67		
18	22	E24-06	10	礫	流紋岩	7.13		
19	22	E24-06	11	礫	砂岩	76.61		
20	22	E24-07	1	礫	安山岩	52.80		
21	22	E24-25	1	礫	砂岩	63.39		縄文？

時　　期　出土層位と遺物の特徴から、本ブロックは立川ロームⅣ層下部・Ⅴ層段階に対比される。

２．縄文時代

（１）竪穴住居跡

(21) SI001（第7-4図、図版7-1）

北辺と西辺、南辺のそれぞれ一部を攪乱により破壊されている。平面プランは比較的整った隅丸長方形で、主軸方位はN－86.0°－Eである。規模は、検出面が7.20m程度×4.84m、床面が6.90m程度×4.55mである。検出面からの深さが最大でも0.15mと浅いため、覆土の堆積状況ははっきりしないが、自然堆積と考えられる。床面はあまり平坦でなく、硬化面は確認されなかった。

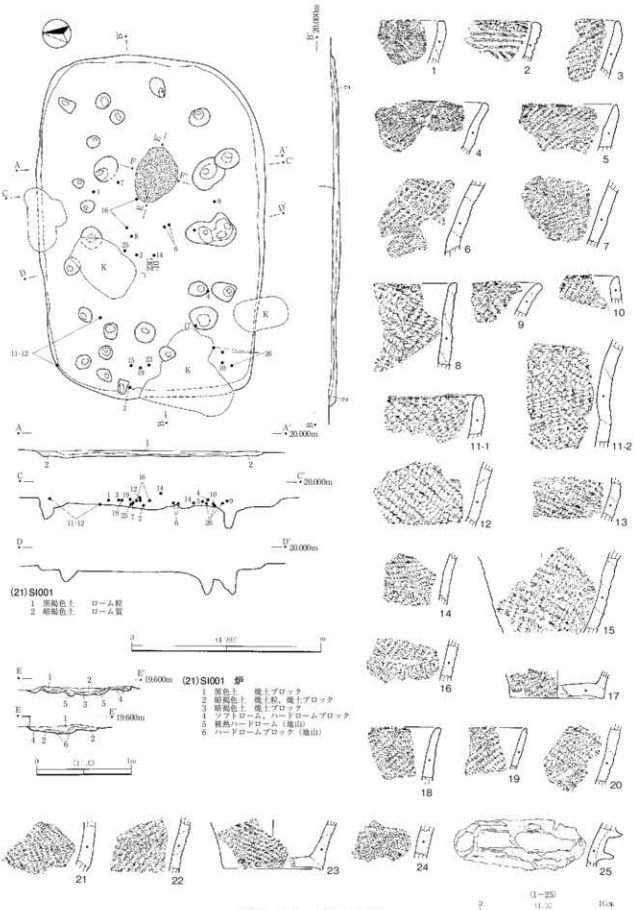
ピットは24基検出された。そのうちP１～P８およびP９～P18については、ややいびつながら多角形状の配置が認められることから、本竪穴住居跡の柱穴の可能性がある。

炉は遺構の中央東寄りに検出された。1.18m×0.88mの楕円形で、底面はよく被熱している。

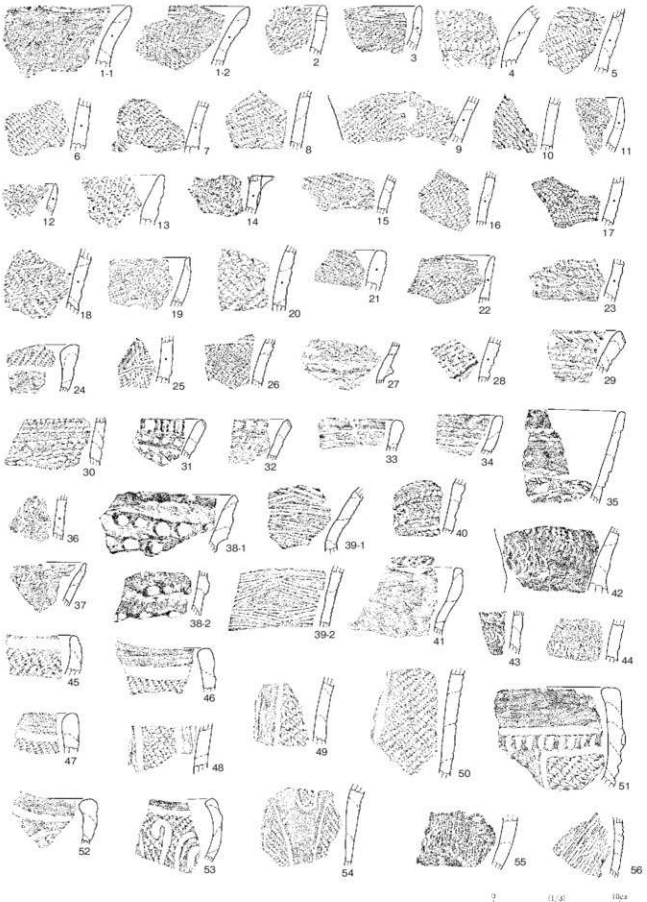
出土遺物　遺構の南西側を中心として散漫な出土状況を示す。１～24は前期黒浜式の範疇で把握できるものである。１・２は半截竹管を用いた沈線、３～24は縄文のみを施すもので、４～７は無節L、８～17は単節RL、18～23は単節LR、24は附加条１種である。25は貼付隆帯により横長区画を形成する。

（２）遺構外出土の遺物（第7-5･6図、図版7-1）

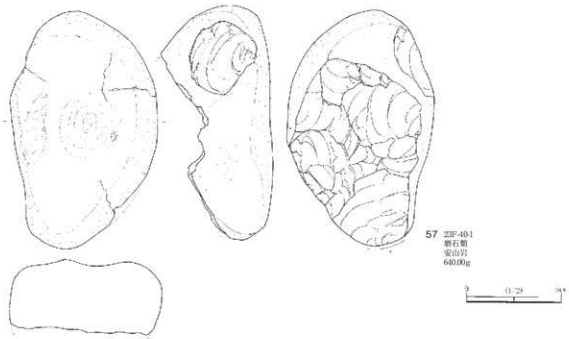
確認トレンチから出土した遺物は前期～中期で、前期が最も多く、中期がそれに次ぐ。ただ、いずれも小破片が多く、図示可能なものは少ない。また、石器は４点出土したが、図示可能なものは１点である。１～37は前期黒浜式で、１～23は縄文あるいは撚糸文のみを施すもの、24～37は半截竹管を用いるもので



第7-4図　(21)SI001



第7-5図　遺構外出土遺物①



第7-6図　遺構外出土遺物②

ある。38～41は興津式で、38は指頭による凸凹文、39は半截竹管による平行沈線、40はキャタピラ文、41は口唇にキザミを施す。42～44は浮島Ⅲ式で、いずれも貝殻腹縁文を施す。45～56は中期加曽利Ｅ式で、45～47は浅い沈線による区画、48～51・54は沈線を伴う無文帯による区画、52・53は沈線により文様を描くもの、55･56は櫛描文を施すものである。57は安山岩製の磨石類である。片面は旧状をとどめているが、裏面には打撃による再加工痕が複数みられる。これ以外の部位には、磨耗痕、凹み痕（表面中央）及び敲打痕（裏面下端）が共存する。大きさは長さ12.4cm、幅8.2cm、厚さ5.6cm、重さ640.0gである。

第３節　まとめ

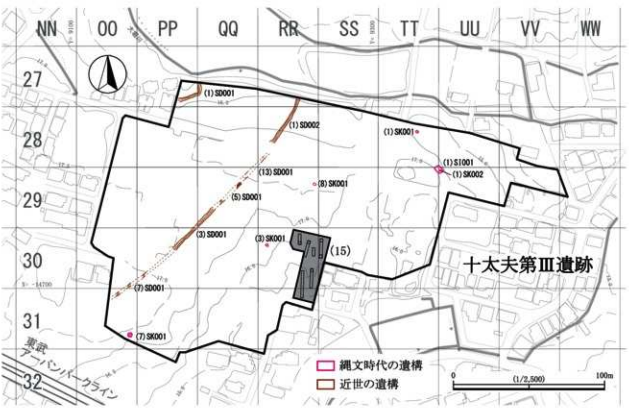
旧石器時代では、Ⅳ層下部・Ⅴ層相当層から礫群が１か所検出された。構成礫は21点にすぎず、すべて小型の熱破砕礫である。したがって、その基本的な性格は一過性の生活跡と捉えられよう。

縄文時代では、これまでの調査で北側を中心に前期黒浜式期の竪穴住居跡などの遺構が確認されているが、今回の地点で同時期の竪穴住居跡が確認されたことから、前期の集落が台地全体に散漫に分布する可能性が高いことが判明した。遺構外出土の遺物は前期～後期にわたるものの、前期黒浜式期が多く、中期加曽利Ｅ式がそれに次ぐという傾向は、周辺遺跡と同様である。

第８章　十太夫第Ⅲ遺跡

第１節　遺跡の概要（第8-1図）

今回報告するのは第15次調査で、調査状況は第8-1図のとおりである。これまでの調査では、旧石器時代の遺物集中地点のほか縄文時代の竪穴住居跡や土坑、中近世の溝状遺構を検出しているが、今回の調査範囲では近世の溝状遺構を２条検出したのみであったため、上層、下層ともに確認調査で終了した。



第8-1図　調査範囲と遺構の位置

第２節　遺構と遺物

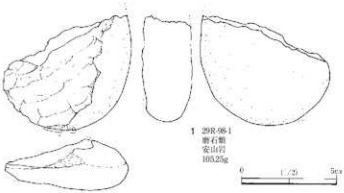
１．縄文時代（第8-2図、図版8-1）

遺構は検出されなかったが、確認トレンチ内で礫石器が出土した。１は安山岩製の磨石で、29RR－98グリッドから出土した。比較的扁平な円礫を素材としており表面下端部には敲打痕がみられる。現存長5.1cm、幅7.6cm、厚さ2.7cm、重さ105.25gである。時期は不明である。

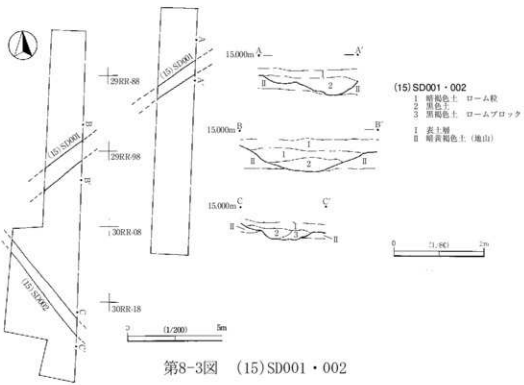
２．中世～近世（第8-3図）

(15) SD001

調査区の中央付近を南西－北東方向に直線状に走る溝状遺構である。方位はＮ－54.0°－Ｅ、上端幅は0.8m～0.6mで、断面は皿状である。底幅は0.2mで、若干の平坦面を持つが、硬化していない。確認トレンチの壁面で確認したところ、深さ最大0.4mで、覆土は黒色土が主体である。遺物は出土しなかった。



第8-2図　遺構外出土遺物



第8-3図　(15) SD001・002

(15) SD002

調査区の中央付近を北西－南東方向に直線状に走る溝状遺構である。方位はN－49.0°－Wで、(15) SD001とほぼ直交するが、交差部を確認していないため、新旧関係は不明である。上端幅は0.8m～0.6mで、断面は皿状である。底幅は0.4mで、部分的に平坦面を持つが、硬化していない。確認トレンチの壁面で確認したところ、深さ最大0.24mで、覆土は黒色土が主体である。遺物は出土しなかった。

第3節　まとめ

過去の調査によると、縄文時代では、北側台地縁辺部に前期の土器集中地点、台地中央付近で後期の遺物が集中する傾向が確認されているが、今回の調査範囲では遺構は確認されず、遺物も希薄であった。一方、中近世の溝状遺構は、幅は比較的広いものの、方向が地割の方向に近いことから、近世の牧に関連するものであるかは不明である。

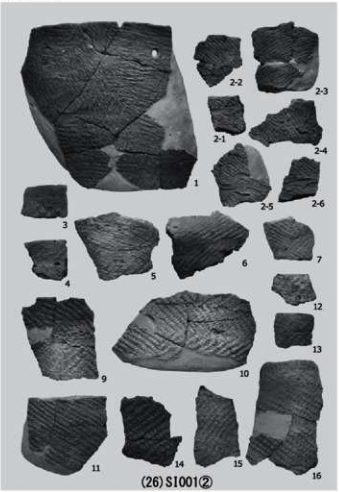
写 真 図 版

図版1-1

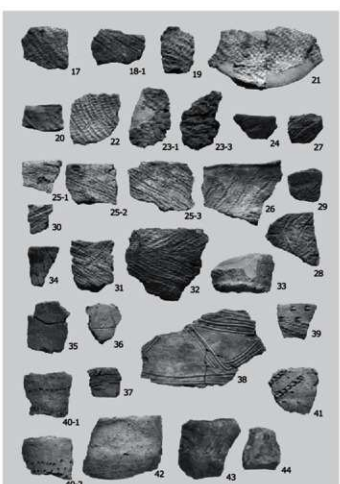
遺跡周辺航空写真(昭和22年撮影)

調査区全景　東から

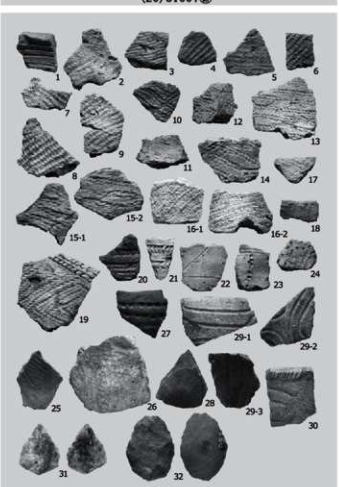
(26)SI001①　北東から



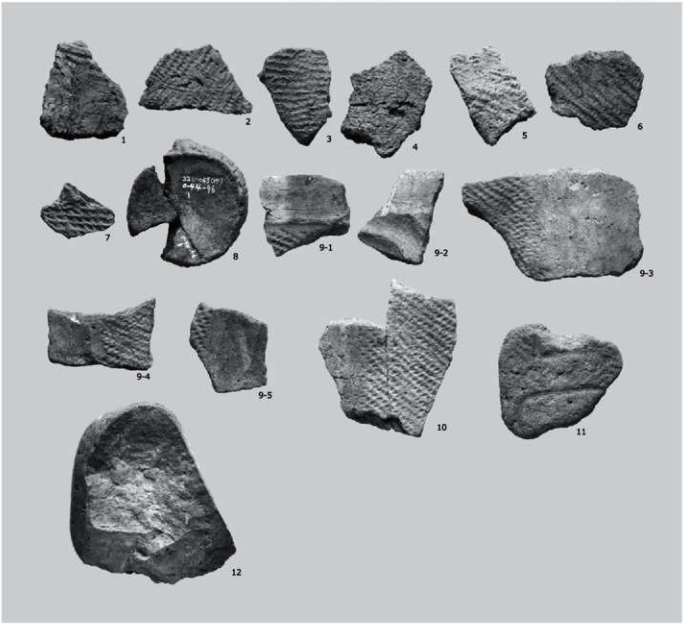
(26)SI001②



(26)SI001③



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

(16)SI001

(16)SI001 炉

(16)SI003

(16)SI004・SK015

(16)SI005・006

(16)SI005 炉

(16)SI006 炉

(16)SI007

(16)SI007 炉

(17)SI001・002 遺物出土状況

(17)SI001・002

(16)SX001

(16)SX001 炉体土器出土状況

(16)SX001 土層断面

(16)SK008

(16)SK010

(16)SK012・014

(16)SK012 貝層

(16)SK012 土層断面

(16)SK015

(16)SK011

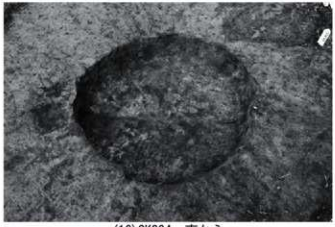
(16)SK001　南西から

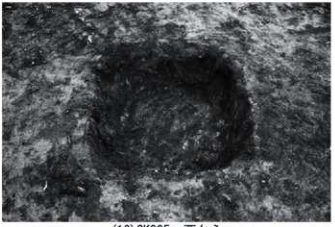
(16)SK013　北から

(16)SI002　東から

(16) SK002　南西から

(16) SK003　東から

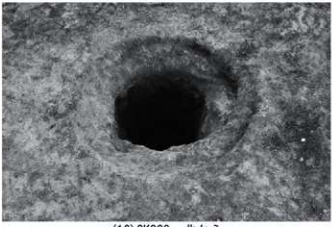

(16) SK004　南から

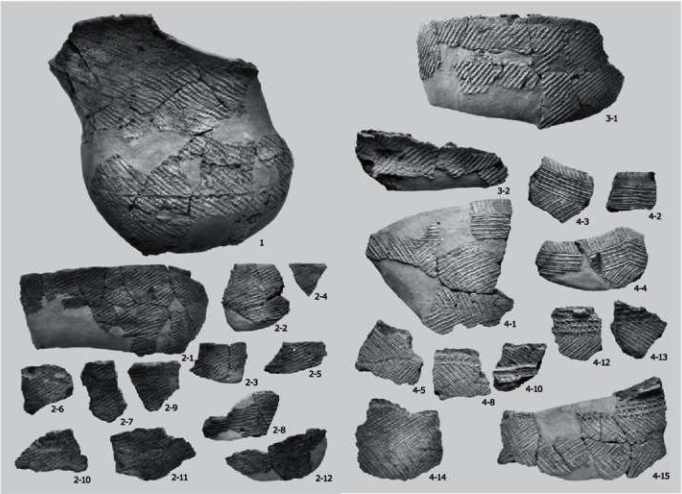

(16) SK005　西から

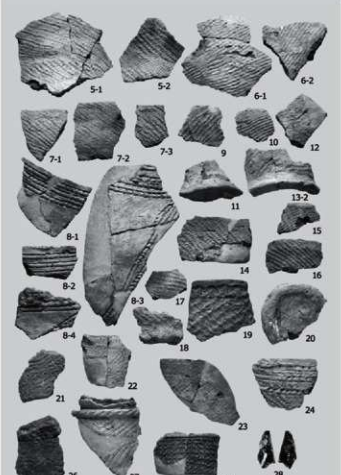
(16) SK005 遺物出土状況　南西から

(16) SK007　南から

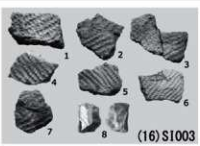
(16) SK006　南から


(16) SK009　北から



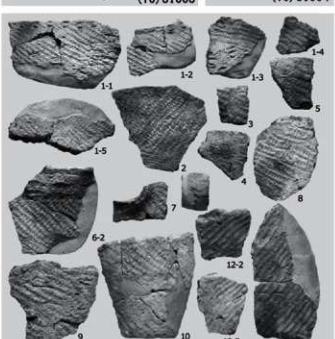


(16) SI001

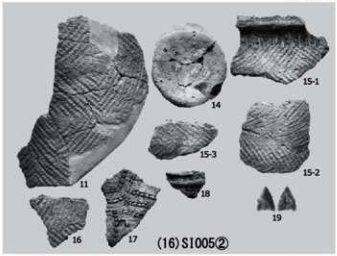


(16) SI003

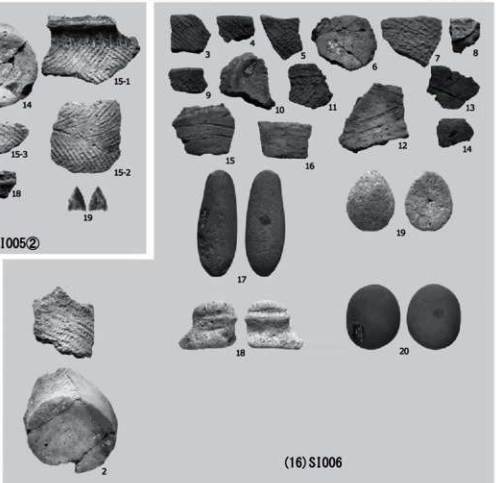
(16) SI004



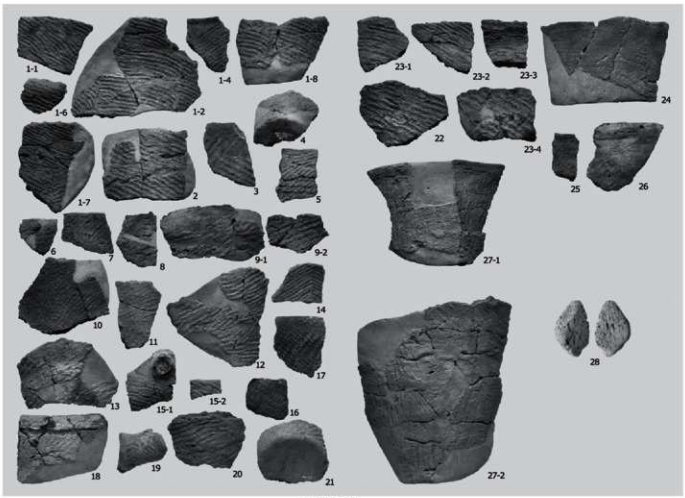
(16) SI005①



(16) SI005②

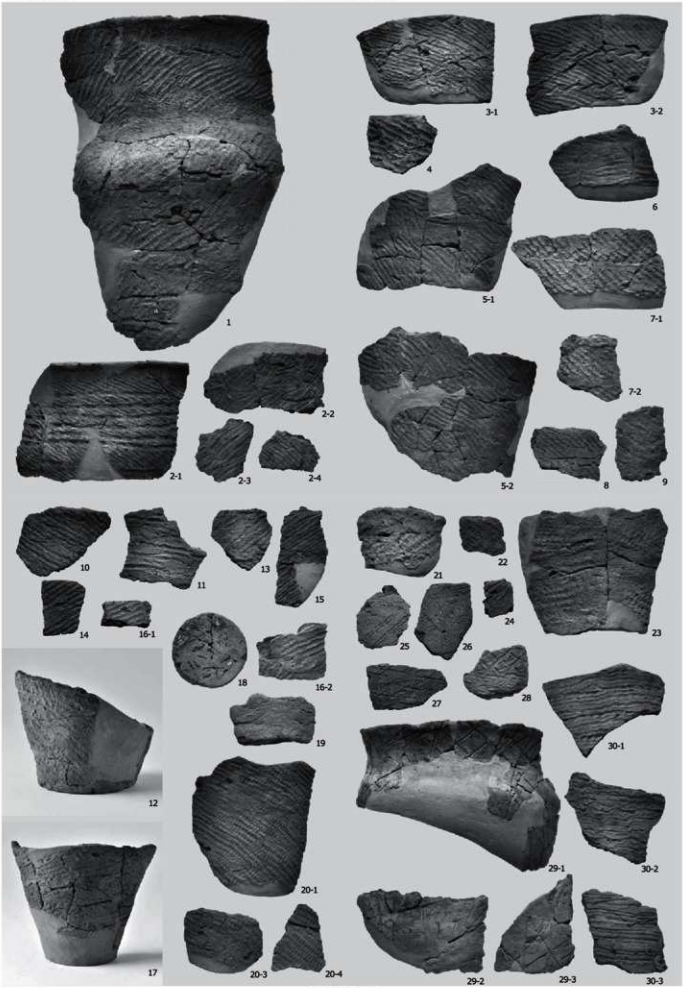


(16) SI006

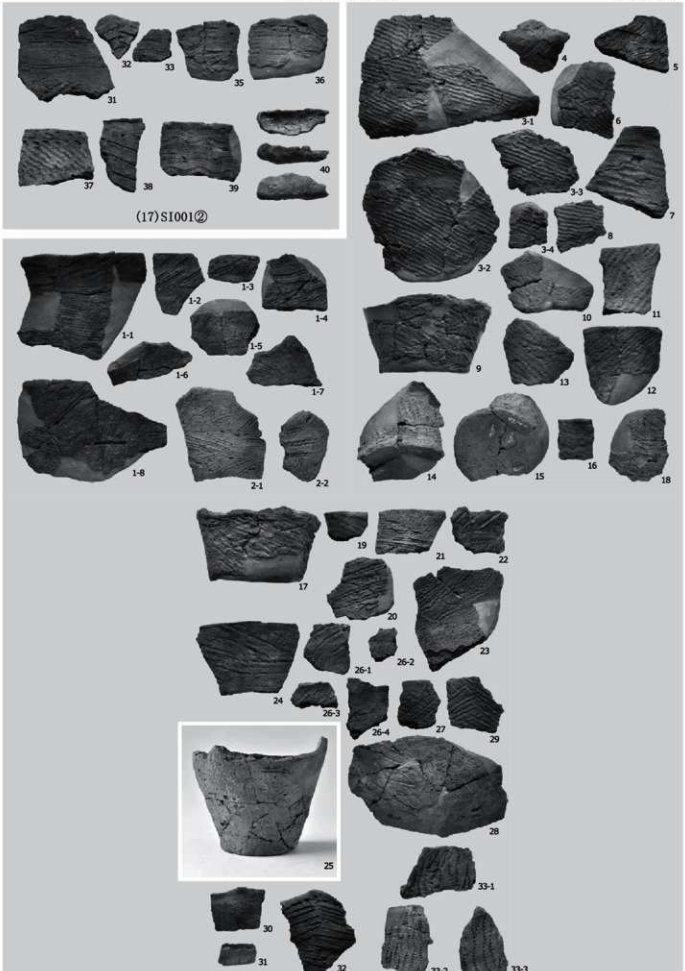


(16) SI007

市野谷向山遺跡

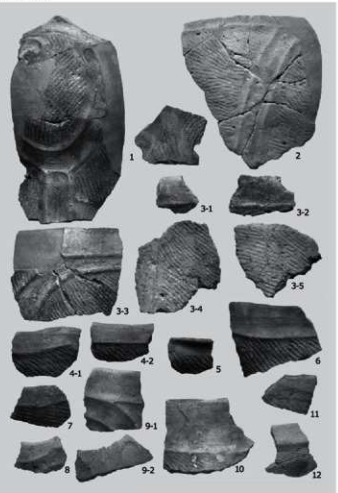


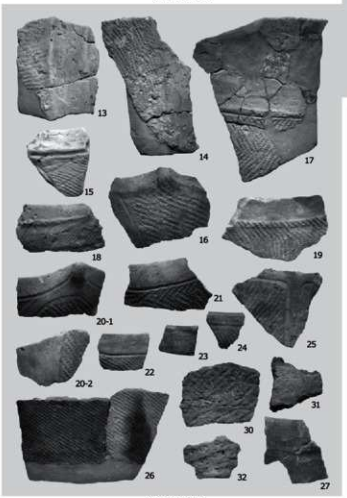
(17) S1001①


31
32
33
35
36
37
38
39
40
(17)SI001②
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
1-7
1-8
2-1
2-2
3-1
3-2
3-3
3-4
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
18
17
19
20
21
22
23
24
25
26-1
26-2
26-3
26-4
27
28
29
30
31
32
33-1
33-2
33-3

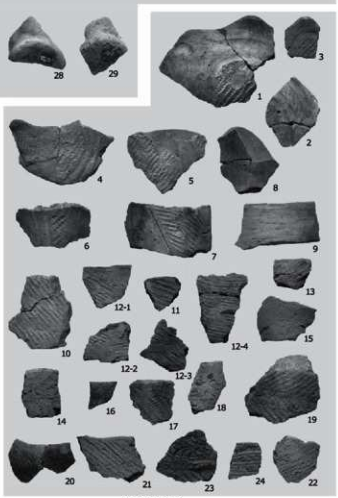
(17)SI002

(16) SX001

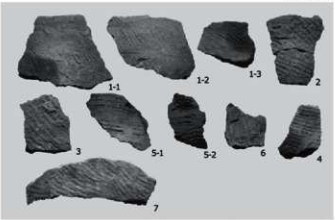




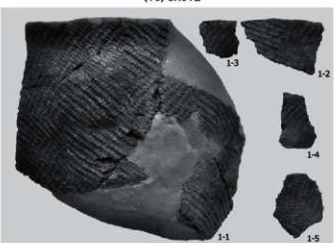
(16) SK008



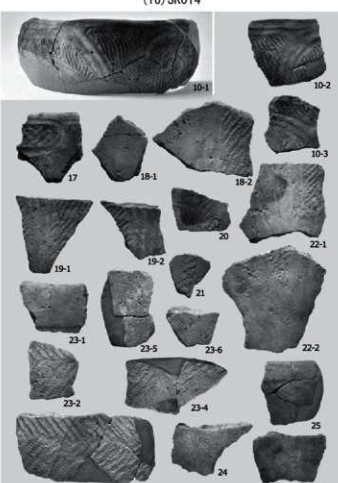
(16) SK010

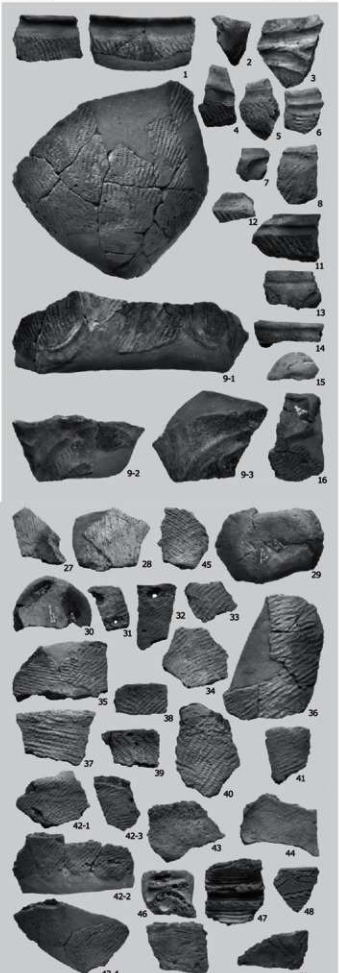


(16) SK012

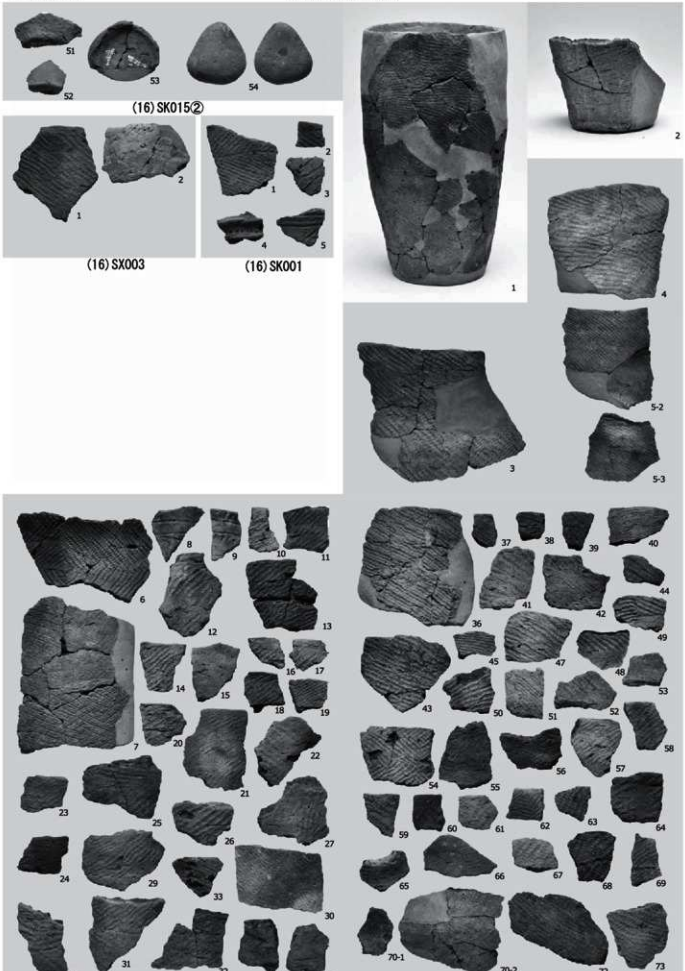


(16) SK014

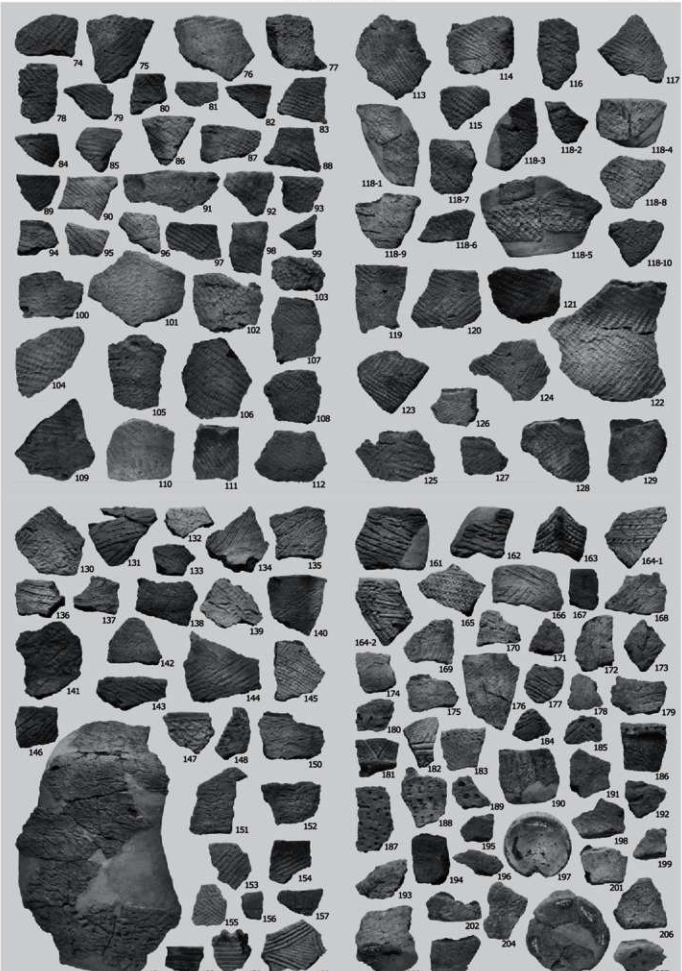




(16) SK015①

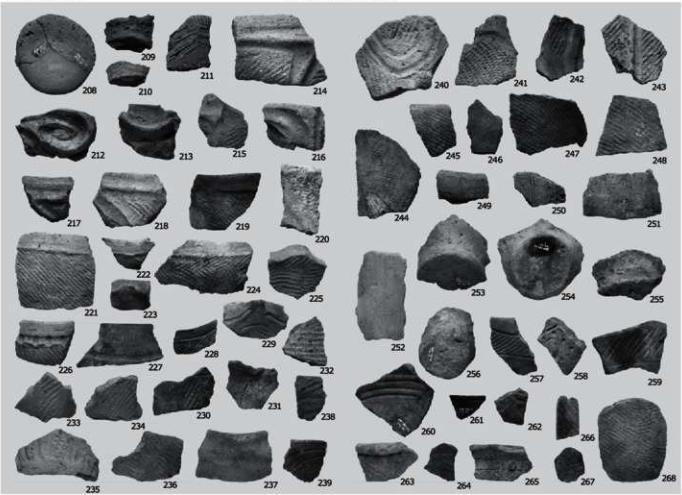


遺構外出土遺物①

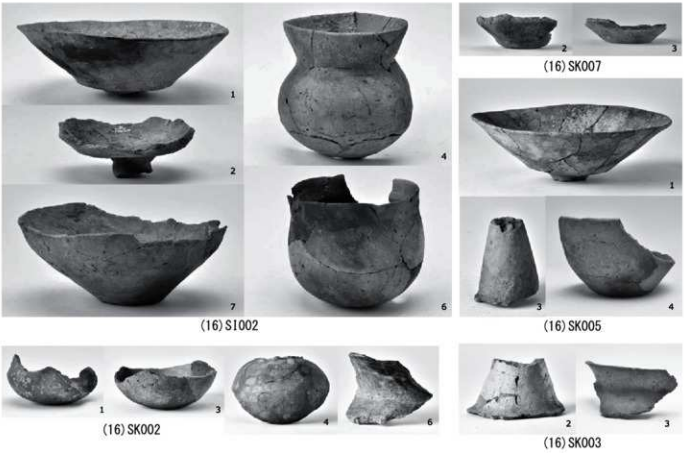

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118-1
118-2
118-3
118-4
118-5
118-6
118-7
118-8
118-9
118-10
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164-1
164-2
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207

遺構外出土遺物②

市野谷向山遺跡



遺構外出土遺物③



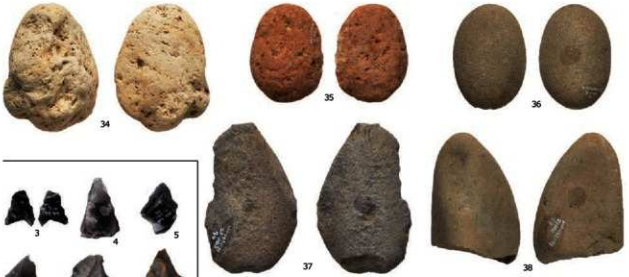
(16) SI002

(16) SK007

(16) SK005

(16) SK002

(16) SK003



(17)SI002 出土石器

(16)SX001 出土石器

遺構外出土石器

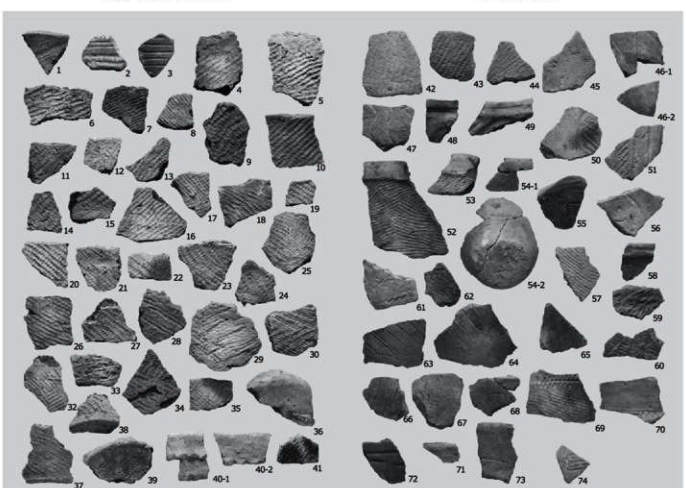
市野谷立野遺跡

48CC-73·84 旧石器出土状況　北から

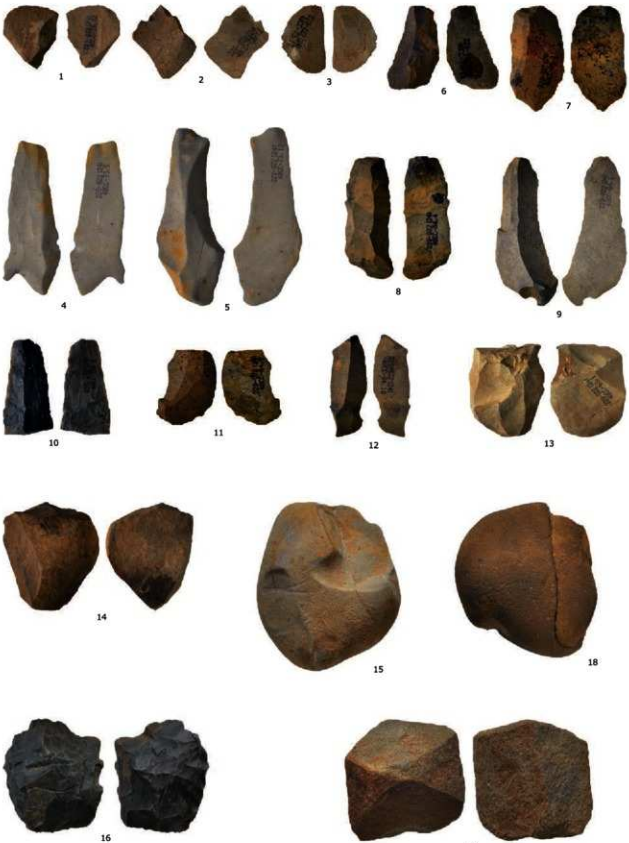
48CC-73 旧石器出土状況

48CC-73·84 土層断面

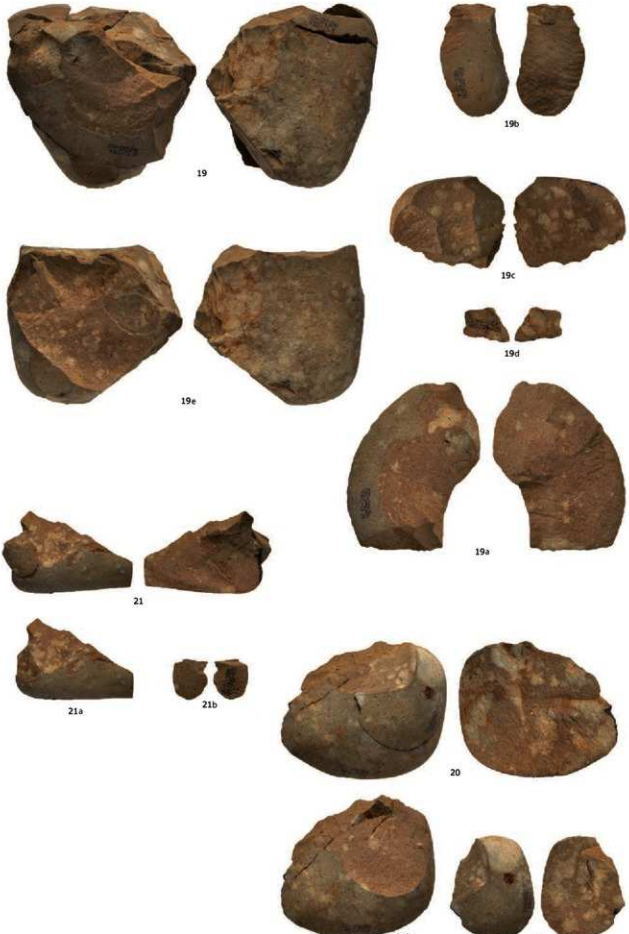
G1 土層断面



遺構外出土遺物

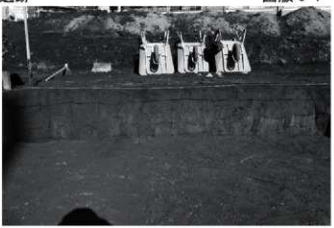


第 5 ブロック出土石器①



第 5 ブロック出土石器②

38FF-57 土層断面


38GG-50 土層断面

38FF-57 石器出土状況

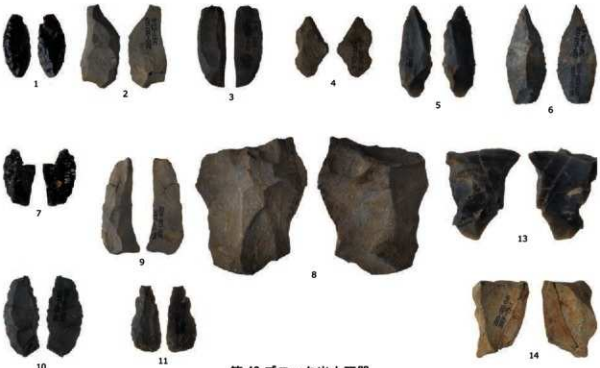
38FF-68·69 石器出土状況

38GG-51·60·61·70 石器出土状況

38GG-51 石器出土状況

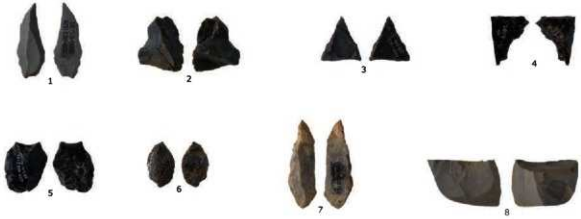
38GG-71 石器出土状況

38GG-80 土層断面



第 42 ブロック出土石器

第 43 ブロック出土石器

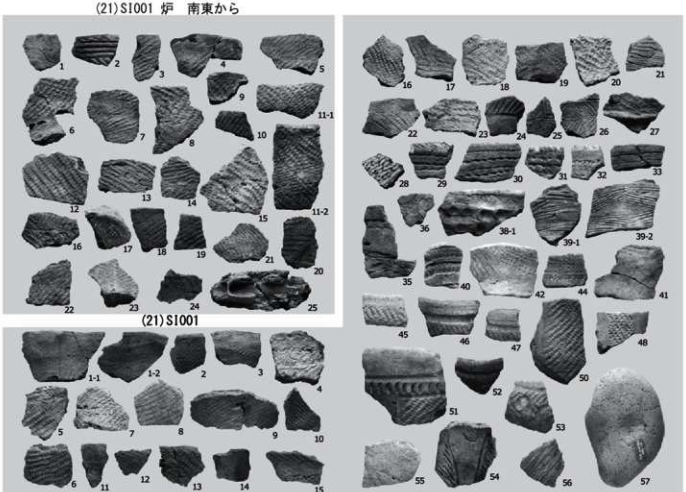


第 44 ブロック出土石器

(21)SI001　東から

(21)SI001　南から

(21)SI001 炉　南東から



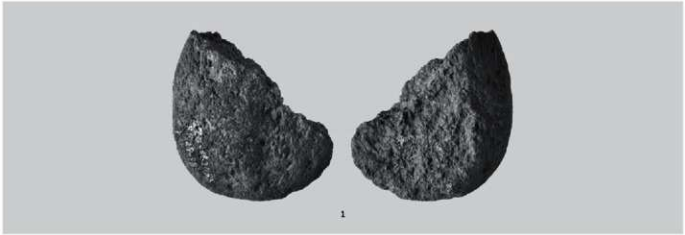
遺構外出土遺物

図版 8-1

十太夫第Ⅱ遺跡（15）

（15）調査区全景　南から

（15）調査区全景　北から



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡
巻次	10
シリーズ名	公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第769集
編著者名	城田義友・橋本勝雄・岸本雅人・平井真紀子
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2017年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いちのやさかえくぼ 市野谷芋久保 遺跡(26)	ながれやましいちのや 流山市市野谷 624-1ほか	12220	021	35度 51分 58秒	139度 55度 06秒	20150413 ～ 20150507	2,781	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
いちのやなかじまい 市野谷中島遺 跡(17)	ながれやましいちのや 流山市市野谷 607-1地先ほか	12220	055	35度 51分 56秒	139度 55分 19秒	20150518 ～ 20150521	348	
いちのやむこうやまい 市野谷向山遺 跡(15)～(17)	ながれやましいちのや 流山市市野谷 463-3ほか	12220	036	35度 51分 48秒	139度 55分 29秒	20150216 ～ 20160210	7,519	
いちのやたてのい 市野谷立野遺 跡(24)～(35)	ながれやましいちのや 流山市市野谷 786-7ほか	12220	022	35度 51分 53秒	139度 55分 31秒	20140825 ～ 20160216	14,504	
おおくぼ 大久保遺跡(12)	ながれやましにしはつかい 流山市西初石６ 丁目818-14ほか	12220	023	35度 52分 04秒	139度 55分 38秒	20141113 ～ 20150116	265	
にしはつかいごちょうめ 西初石五丁目 遺跡(21)(22)	ながれやましあおの 流山市大畔 521-2ほか	12220	045	35度 52分 24秒	139度 54分 56秒	20160224 ～ 20160518	2,131	
じゅうにだゆうにい 十太夫第Ⅲ遺 跡(15)	ながれやましじゅうにだゆう 流山市十太夫230	12220	062	35度 52分 15秒	139度 55分 57秒	20150716 ～ 20150729	825	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市野谷芋久保遺跡(26)	集落跡 包蔵地	縄文時代 中世～近世	竪穴住居跡１軒 溝状遺構１条	縄文土器	縄文時代前期黒浜式期の竪穴住居跡から、釈迦堂Ｚ３式の深鉢が出土した。
市野谷中島遺跡(17)	包蔵地	縄文時代		縄文土器	
市野谷向山遺跡(15)～(17)	集落跡 集落跡	縄文時代 古墳時代	竪穴住居跡８軒、袋状土坑３基、土坑16基、土器埋設炉１基、焼跡２基 竪穴住居跡１軒、土坑７基	縄文土器・縄文時代石器 土師器	
市野谷立野遺跡(24)～(35)	包蔵地 包蔵地 包蔵地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代	石器集中地点１か所	旧石器時代石器 縄文土器・縄文時代石器 弥生土器	
大久保遺跡(12)	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点３か所	旧石器時代石器	
西初石五丁目遺跡(21)(22)	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代	礫群１か所 竪穴住居跡１軒	縄文土器・縄文時代石器	
十太夫第Ⅲ遺跡(15)	包蔵地	縄文時代 中世～近世	溝状遺構２条	縄文時代石器	

要約

旧石器時代では、市野谷立野遺跡、大久保遺跡から立川ロームⅢ層～Ⅴ層に包含される４か所のブロックが検出された。

縄文時代では、市野谷芋久保遺跡、市野谷向山遺跡、西初石五丁目遺跡から前期黒浜式期の竪穴住居跡、市野谷向山遺跡から中期加曽利Ｅ式期の土坑群と石器製作址が検出された。その他の遺跡でも量は少ないものの、前期～晩期にわたる土器が出土している。

弥生時代では、市野谷立野遺跡から中期の壺型土器片が１点出土した。この一連の調査で初の事例となる。

古墳時代では、市野谷向山遺跡から中期の竪穴住居跡と土坑が確認された。

中世～近世では、市野谷芋久保遺跡、十太夫第Ⅲ遺跡から溝状遺構が確認された。

千葉県教育振興財団調査報告第769集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10

－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・
市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・
西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－

平成29年３月15日発行

編　集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発　行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿６－５－１
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の２
印　刷	株式会社	弘文社 市川市市川南二丁目７番２号